

Oracle® X4 シリーズサーバー管理ガイド

ORACLE®

Part No: E50103-02
2014 年 4 月

Part No: E50103-02

Copyright © 2014, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS. Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション (人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む) への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle および Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMD ロゴ, AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は、The Open Group の登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

このドキュメントの使用	11
管理ガイドについて	15
システム管理ツール	15
システム管理タスク	16
システム管理ツールの概要	21
複数システム管理ツール	21
単一システム管理ツールの概要	22
Oracle System Assistant の概要	26
Oracle System Assistant のリビジョン	28
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) の概要	28
このガイドで定義されている Oracle ILOM タスク	33
Oracle Hardware Management Pack (HMP) の概要	34
Oracle Hardware Management Pack のユーティリティー	35
BIOS 設定ユーティリティーの概要	35
UEFI ブートモードとレガシー BIOS ブートモード	36
製品ドキュメント	36
システム管理ツールへのアクセス	39
Accessing Oracle System Assistant	39
▼ 起動時に Oracle System Assistant を起動する	40
▼ Oracle System Assistant を起動する (Oracle ILOM)	41
▼ Oracle System Assistant を終了する	43
Oracle ILOM へのアクセス	44
▼ Oracle ILOM への初回管理接続を確立する	44
▼ Oracle ILOM を起動しログインする	46
KVMS のための Oracle ILOM リモートリダイレクションセッションの起動	47
▼ ホストシリアルコンソールリダイレクションセッションの起動	48
▼ リモートシステムコンソールリダイレクションセッションの起動	49

▼ 中央リポジトリからの仮想ストレージデバイスリダイレクションセッションの構成	53
Oracle Hardware Management Pack へのアクセス	55
▼ Oracle Hardware Management Pack にアクセスする	55
BIOS 設定ユーティリティへのアクセス	56
▼ BIOS 設定ユーティリティにアクセスする	56
サーバーの電源の制御	59
サーバーの電源投入と電源切断	59
▼ 電源ボタンを使用してサーバーの電源を切断する	60
▼ 電源ボタンを使用してサーバーの電源を投入する	61
▼ サーバーの電源を投入および切断する (Oracle ILOM)	61
ブート順序の変更	63
▼ ブート順序を変更する (BIOS)	63
▼ 次のブートデバイスを設定する (Oracle ILOM)	65
ストレージリソースの構成	67
RAID 構成オプション	67
その他の RAID オプション	68
▼ RAID 用にハードウェアを構成する (Oracle System Assistant)	68
▼ RAID を構成する (Oracle HMP)	71
▼ RAID を構成する (BIOS)	72
iSCSI 仮想ドライブプロパティの変更	73
▼ Legacy ブートモードで iSCSI 仮想ドライブプロパティを変更する (BIOS)	74
▼ UEFI ブートモードで iSCSI 仮想ドライブプロパティを変更する (BIOS)	80
サーバー管理のための初期設定アクションの実行	91
システム識別情報の割り当て	92
▼ システム識別情報を割り当てる (Oracle System Assistant)	93
▼ システム識別情報を割り当てる (Oracle ILOM)	94
▼ システム識別情報を割り当てる (Oracle HMP)	96
Oracle ILOM のネットワーク設定の構成	96
▼ SP のネットワーク設定を構成する (Oracle System Assistant)	96
▼ SP または CMM のネットワーク設定を構成する (Oracle ILOM)	99
▼ SP のネットワークアドレスを構成する (BIOS)	101
Oracle ILOM ユーザーアカウントの追加	102

▼ Oracle ILOM ユーザーアカウントを追加、変更、または削除する (Oracle System Assistant)	103
▼ SP または CMM のローカルユーザーアカウントを追加する (Oracle ILOM)	105
SP のクロックプロパティの設定	106
▼ SP のクロックプロパティを設定する (Oracle System Assistant)	106
▼ SP のクロックプロパティを設定する (Oracle ILOM)	108
▼ SP の DNS を構成する (Oracle System Assistant)	109
▼ 構成管理 (Oracle System Assistant)	111
Oracle HMP のダウンロード	113
▼ Oracle HMP をダウンロードする (Oracle System Assistant)	113
▼ My Oracle Support から Oracle HMP をダウンロードする (MOS)	113
▼ TPM プロパティを構成する (BIOS)	114
システムおよび管理電源ポリシーの設定 (Oracle ILOM)	117
システム全体の電源管理設定の設定 (Oracle ILOM)	117
▼ サーバー SP に電力制限目標プロパティを設定する	118
▼ サーバー SP に電力上限ポリシーを設定する	119
▼ シャーシモニタリングモジュール (CMM) にブレードスロット許可制限プロパティを設定する	121
▼ CMM に電源装置冗長性ポリシーを設定する	122
▼ CMM に電源装置軽負荷時効率性ポリシーを設定する	123
▼ CMM に電源装置ファン速度ポリシーを設定する	125
ブート時ホスト電源の SP ポリシーの設定 (Oracle ILOM)	126
▼ SP のブート時ホスト電源ポリシーを設定する	126
サーバー冷却ポリシーの設定 (Oracle ILOM)	127
▼ SP 冷却ポリシーを設定する	127
ブレードを強制的に SAS2 対応にする (Oracle ILOM)	128
▼ サーバードブレードを強制的に SAS2 対応にする	129
オペレーティングシステムのインストール	131
オペレーティングシステムのインストールの準備	131
▼ オペレーティングシステムをインストールする (Oracle System Assistant)	132
サーバーのインベントリおよび健全性のモニタリング	137
サーバーの情報やインベントリの表示	137
▼ サーバーの情報およびインベントリを表示する (Oracle System Assistant)	137

▼ サーバーまたはブレードシステムの情報およびインベントリを表示する (Oracle ILOM)	139
未解決の問題のモニタリングと解決	141
▼ 未解決の問題を表示して解決する (Oracle ILOM)	141
▼ イベントログのエントリを表示する (Oracle ILOM)	142
▼ 未解決の問題をモニターする (Oracle HMP)	143
▼ POST でエラーメッセージを表示して解決する	144
診断の概要	145
ファームウェア構成と BIOS 設定のバックアップおよび復元	147
BIOS ファームウェア構成のバックアップ、復元、またはレプリケート (Oracle ILOM)	147
▼ 現在の BIOS ファームウェア構成をバックアップする (Oracle ILOM) ...	148
▼ バックアップした BIOS 構成を復元するか、出荷時デフォルトにリセットする (Oracle ILOM)	149
▼ ホスト BIOS ファームウェア構成を同期する (Oracle ILOM)	150
Oracle ILOM ファームウェア構成のバックアップ、復元、またはレプリケート	152
▼ 現在の Oracle ILOM ファームウェア構成をバックアップする (Oracle ILOM)	152
▼ バックアップした Oracle ILOM 構成を復元するか、構成を出荷時デフォルトにリセットする (Oracle ILOM)	154
▼ Oracle ILOM ファームウェア構成をほかの Oracle システムにレプリケートする (Oracle ILOM)	156
▼ BIOS 設定をバックアップ、復元、および元に戻す (Oracle System Assistant 1.1)	157
Oracle System Assistant の使用	161
Accessing Oracle System Assistant	161
▼ 起動時に Oracle System Assistant を起動する	162
▼ Oracle System Assistant を起動する (Oracle ILOM)	164
▼ Oracle System Assistant を終了する	165
Oracle System Assistant ユーザーインターフェースの使用	166
タスクペインとメインペイン	167
Oracle System Assistant のホーム画面	168
▼ ヘルプおよび ReadMe ファイルを表示する	169
▼ プラットフォームドキュメントを表示する	170
Oracle System Assistant フラッシュドライブ上のファイルへのアクセス	171
▼ オペレーティングシステムからフラッシュドライブのファイルにアクセスする	171
▼ Oracle System Assistant の内容を参照する	172

▼ Solaris 10 ホストで Oracle System Assistant フラッシュドライブをマウントする	174
▼ Oracle VM ホストで Oracle System Assistant フラッシュドライブをマウントする	175
▼ Linux ホストで Oracle System Assistant フラッシュドライブをマウントする	177
ハードウェア構成のインポートとエクスポート (Oracle System Assistant 1.2)	178
▼ ハードウェア構成のエクスポート (Oracle System Assistant 1.2)	178
▼ ハードウェア構成のインポート (Oracle System Assistant 1.2)	179
Oracle System Assistant の管理	181
Oracle System Assistant の更新の準備	181
▼ ネットワークインタフェース設定を構成する (Oracle System Assistant)	181
▼ Oracle System Assistant の更新を有効にするように MOS を構成する	184
Oracle System Assistant の有効化と無効化	187
▼ Oracle System Assistant を無効にする (Oracle System Assistant)	187
▼ Oracle System Assistant を有効または無効にする (BIOS)	189
▼ Oracle System Assistant のキーボード言語を設定する	190
▼ 使用ログのエクスポート (Oracle System Assistant 1.2)	191
Oracle System Assistant のトラブルシューティング	193
▼ Oracle System Assistant のトラブルシューティングや確認を行う	194
▼ Oracle System Assistant メディアの整合性をチェックする	197
▼ Oracle System Assistant ソフトウェアの復元	198
BIOS の設定と構成	205
BIOS 設定ユーティリティ	205
BIOS 設定ユーティリティメニューの概要	205
▼ BIOS 設定ユーティリティメニューにアクセスする	206
▼ BIOS 設定ユーティリティを終了する	208
▼ BIOS 設定ユーティリティメニュー間を移動する	209
BIOS のキーマッピング	211
▼ UEFI Late Synchronization を設定する	212
Legacy ブートモードと UEFI ブートモード	213
Legacy と UEFI のそれぞれの BIOS ブートモードを選択する場合	213
BIOS ブートモードに関するその他の考慮事項	214
ブートモードの表示と変更	215

▼ UEFI または Legacy ブートモード (BIOS) を選択する	216
システムのファームウェアやソフトウェアのダウンロードと更新	219
更新とツールの概要	219
システムソフトウェアおよびファームウェアの更新 (Oracle System Assistant)	222
▼ プラットフォームソフトウェア、ドライバ、およびファームウェアの更新をダウンロードする (Oracle System Assistant)	223
▼ プラットフォームソフトウェア、ドライバ、およびファームウェアの更新をローカルの場所からダウンロードする (Oracle System Assistant)	225
▼ ソフトウェアおよびファームウェアを更新する (Oracle System Assistant)	227
サーバーまたはブレードシャーシファームウェアの更新 (Oracle ILOM)	229
▼ BIOS および SP ファームウェアまたは CMM ファームウェアを更新する (Oracle ILOM)	230
SP および BIOS ファームウェア、および HBA ファームウェアの更新 (Oracle HMP)	231
MOS または PMR からのファームウェアおよびソフトウェアの取得	232
▼ My Oracle Support を使用してファームウェアとソフトウェアをダウンロードする	232
物理メディアのリクエスト	233
物理メディアのリクエスト用の情報を収集する	234
▼ 物理メディアのリクエスト (オンライン)	234
▼ 物理メディアのリクエスト (電話)	236
索引	237

このドキュメントの使用

このセクションでは、Sun Server X4 シリーズのモデルの命名規則について説明し、その他の一般的な情報を提供します。説明項目は次のとおりです。

- 11 ページの「Sun X4- シリーズのモデル名」
- 11 ページの「ドキュメントおよびフィードバック」
- 12 ページの「サポートおよびトレーニング」
- 13 ページの「寄稿者」
- 13 ページの「変更履歴」

Sun X4- シリーズのモデル名

プラットフォーム名の意味は次のとおりです。

- X は x86 製品を示します。
- 最初の数字 4 は、サーバーの世代を意味します。
- 2 番目の数字は、プロセッサの数を意味します。
- 文字が存在している場合、L はそれを大型システムとして識別し、B はブレードとして識別します。

ドキュメントおよびフィードバック

ドキュメント	リンク
すべての Oracle 製品	http://www.oracle.com/documentation
Oracle Integrated Lights Out Manager	http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs
Oracle Hardware Management Pack	http://www.oracle.com/goto/OHMP/docs

このドキュメントについてのフィードバックは <http://www.oracle.com/goto/docfeedback> からお寄せください。

Oracle Support へのアクセス

Oracle のお客様は、My Oracle Support を通して電子サポートにアクセスできます。詳細については、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> または聴覚に障害をお持ちの場合は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

サポートおよびトレーニング

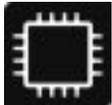
次の Web サイトに追加のリソースがあります。

- サポート: <http://support.oracle.com>
- トレーニング: <http://education.oracle.com>

このドキュメントで使用されているアイコン

このドキュメントでは、各タスクに使用するツールをアイコンで識別できます。次の表に、アイコンと各アイコンが表すツールを示します。

アイコン	ツール
	Oracle System Assistant
	Oracle ILOM
	Oracle Hardware Management Pack

アイコン	ツール
	BIOS

寄稿者

第一著者: Michael Bechler, Cheryl Smith。

寄稿者: Ray Angelo, Cynthia Chin-Lee, Lisa Kuder, Mary Martyak。

変更履歴

次の一覧はこのドキュメントのリリース履歴です。

- 2013年9月。初版。
- 2013年12月。Oracle System Assistant 1.2 のための更新。
- 2014年4月。追加更新と改良。

管理ガイドについて

このガイドでは単一システム管理用の管理手順を示します。これは、使用されるツールに関する情報を含んでおり、ツールを使って管理タスクを実行する手順を示します。

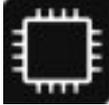
このガイドでは次を提供します。

- ツールに関する情報。15 ページの「[システム管理ツール](#)」を参照してください。
- ツールを使って実行する管理タスクの手順。16 ページの「[システム管理タスク](#)」を参照してください。

システム管理ツール

次の表では、単一システム管理ツールを一覧表示し、それらの説明が含まれているセクションへのリンクを提供します。

ツール	アイコン	概要	アクセス手順
Oracle System Assistant		26 ページの「Oracle System Assistant の概要」	161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」
Oracle Integrated Lights Out Manager (Oracle ILOM)		28 ページの「Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) の概要」	44 ページの「Oracle ILOM へのアクセス」
Oracle Hardware Management Pack (Oracle HMP)		34 ページの「Oracle Hardware Management Pack (HMP) の概要」	55 ページの「Oracle Hardware Management Pack へのアクセス」

ツール	アイコン	概要	アクセス手順
BIOS 設定ユーティリティ		35 ページの「BIOS 設定ユーティリティの概要」	56 ページの「BIOS 設定ユーティリティへのアクセス」

複数システム管理については、21 ページの「複数システム管理ツール」を参照してください。

Oracle System Assistant の追加情報については、「[Oracle System Assistant の使用](#)」と「[Oracle System Assistant の管理](#)」を参照してください。

システム管理タスク

次の表では、一般的な管理機能を一覧表示し、各機能に関連するタスクへのリンクを提供します。

機能	タスク
電源の制御	<p>61 ページの「電源ボタンを使用してサーバーの電源を投入する」。</p> <p>60 ページの「電源ボタンを使用してサーバーの電源を切断する」。</p> <p>61 ページの「サーバーの電源を投入および切断する (Oracle ILOM)」。</p> <p>117 ページの「システム全体の電源管理設定の設定 (Oracle ILOM)」。</p> <p>126 ページの「ブート時ホスト電源の SP ポリシーの設定 (Oracle ILOM)」。</p>
ブート設定の構成	<p>63 ページの「ブート順序を変更する (BIOS)」。</p> <p>65 ページの「次のブートデバイスを設定する (Oracle ILOM)」。</p> <p>216 ページの「UEFI または Legacy ブートモード (BIOS) を選択する」。</p>
OS のインストール 注記 - これらのタスクを順番に HTML で実行するには、最初のタスクを shift キーを押しながら選択し、新しいウィンドウで開きます。タスクが完了したら、ウィンドウを閉じ、次のタスクを shift キーを押しながら選択します。すべての	<p>Oracle System Assistant を更新用に準備します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 181 ページの「ネットワークインタフェース設定を構成する (Oracle System Assistant)」。 ■ 184 ページの「Oracle System Assistant の更新を有効にするように MOS を構成する」。 <p>プラットフォームソフトウェア、ドライバ、およびファームウェアの更新をダウンロードしてインストールします。</p>

機能	タスク
<p>タスクが完了するまで続けます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ 223 ページの「プラットフォームソフトウェア、ドライバ、およびファームウェアの更新をダウンロードする (Oracle System Assistant)」。 ■ 227 ページの「ソフトウェアおよびファームウェアを更新する (Oracle System Assistant)」。 <p>RAID を構成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 67 ページの「RAID 構成オプション」。 <p>オペレーティングシステムをインストールする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 132 ページの「オペレーティングシステムをインストールする (Oracle System Assistant)」。
<p>モニターおよびトラブルシューティング</p>	<p>141 ページの「未解決の問題を表示して解決する (Oracle ILOM)」。</p> <p>142 ページの「イベントログのエントリを表示する (Oracle ILOM)」。</p> <p>143 ページの「未解決の問題をモニターする (Oracle HMP)」。</p> <p>144 ページの「POST でエラーメッセージを表示して解決する」。</p> <p>137 ページの「サーバーの情報およびインベントリを表示する (Oracle System Assistant)」。</p> <p>139 ページの「サーバーまたはブレードシステムの情報およびインベントリを表示する (Oracle ILOM)」。</p> <p>137 ページの「サーバーの情報やインベントリの表示」。</p> <p>141 ページの「未解決の問題のモニタリングと解決」。</p> <p>145 ページの「診断の概要」。</p>
<p>更新およびバックアップ</p>	<p>更新</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 219 ページの「更新とツールの概要」。 ■ 222 ページの「システムソフトウェアおよびファームウェアの更新 (Oracle System Assistant)」。 ■ 229 ページの「サーバーまたはブレードシャーシファームウェアの更新 (Oracle ILOM)」。 ■ 181 ページの「Oracle System Assistant の更新の準備」。 ■ 232 ページの「MOS または PMR からのファームウェアおよびソフトウェアの取得」。 <p>BIOS をバックアップして復元します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 148 ページの「現在の BIOS ファームウェア構成をバックアップする (Oracle ILOM)」。 ■ 149 ページの「バックアップした BIOS 構成を復元するか、出荷時デフォルトにリセットする (Oracle ILOM)」。 ■ 150 ページの「ホスト BIOS ファームウェア構成を同期する (Oracle ILOM)」。 <p>Oracle ILOM をバックアップして復元します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 152 ページの「現在の Oracle ILOM ファームウェア構成をバックアップする (Oracle ILOM)」。

機能	タスク
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 154 ページの「バックアップした Oracle ILOM 構成を復元するか、構成を出荷時デフォルトにリセットする (Oracle ILOM)」。 ■ 156 ページの「Oracle ILOM ファームウェア構成をほかの Oracle システムにレプリケートする (Oracle ILOM)」。
Oracle System Assistant を使用したシステムの初期設定	<p>注記 - 通常これらの項目はここに記載されている順番で実行するため、各項目を順番に shift キーを押しながらクリックして、終了したらここに戻ってください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 93 ページの「システム識別情報を割り当てる (Oracle System Assistant)」。 ■ 181 ページの「ネットワークインタフェース設定を構成する (Oracle System Assistant)」。 ■ 96 ページの「SP のネットワーク設定を構成する (Oracle System Assistant)」。 ■ 103 ページの「Oracle ILOM ユーザーアカウントを追加、変更、または削除する (Oracle System Assistant)」。 ■ 106 ページの「SP のクロックプロパティを設定する (Oracle System Assistant)」。 ■ 109 ページの「SP の DNS を構成する (Oracle System Assistant)」。 ■ 111 ページの「構成管理 (Oracle System Assistant)」。これは選択した Oracle ILOM の設定を出荷時デフォルトに戻します。 ■ 113 ページの「Oracle HMP をダウンロードする (Oracle System Assistant)」。 ■ 114 ページの「TPM プロパティを構成する (BIOS)」。
RAID の設定	<p>68 ページの「RAID 用にハードウェアを構成する (Oracle System Assistant)」</p> <p>71 ページの「RAID を構成する (Oracle HMP)」。</p> <p>72 ページの「RAID を構成する (BIOS)」。</p>
iSCSI	<p>74 ページの「Legacy ブートモードで iSCSI 仮想ドライブプロパティを変更する (BIOS)」。</p> <p>80 ページの「UEFI ブートモードで iSCSI 仮想ドライブプロパティを変更する (BIOS)」。</p>
BIOS 設定ユーティリティー	<p>35 ページの「BIOS 設定ユーティリティーの概要」。</p> <p>206 ページの「BIOS 設定ユーティリティーのメニューにアクセスする」。</p> <p>213 ページの「Legacy ブートモードと UEFI ブートモード」。</p> <p>216 ページの「UEFI または Legacy ブートモード (BIOS) を選択する」。</p> <p>208 ページの「BIOS 設定ユーティリティーを終了する」。</p> <p>209 ページの「BIOS 設定ユーティリティーのメニュー間を移動する」。</p> <p>212 ページの「UEFI Late Synchronization を設定する」。</p> <p>147 ページの「BIOS ファームウェア構成のバックアップ、復元、またはレプリケート (Oracle ILOM)」。</p> <p>157 ページの「BIOS 設定をバックアップ、復元、および元に戻す (Oracle System Assistant 1.1)」。</p>
Oracle ILOM の使用	<p>28 ページの「Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) の概要」の導入。</p> <p>Oracle ILOM へのアクセス</p>

機能	タスク
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 44 ページの「Oracle ILOM への初回管理接続を確立する」。 ■ 46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」。 ■ 47 ページの「KVMS のための Oracle ILOM リモートリダイレクションセッションの起動」。 <p>Oracle ILOM のバックアップ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 152 ページの「Oracle ILOM ファームウェア構成のバックアップ、復元、またはレプリケート」。
Oracle Hardware Management Pack の使用	<p>34 ページの「Oracle Hardware Management Pack (HMP) の概要」の導入。</p> <p>55 ページの「Oracle Hardware Management Pack へのアクセス」。</p>
Oracle System Assistant の使用および管理	<p>26 ページの「Oracle System Assistant の概要」の導入。</p> <p>Oracle System Assistant の使用。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」。 ■ 166 ページの「Oracle System Assistant ユーザーインタフェースの使用」。 ■ 169 ページの「ヘルプおよび ReadMe ファイルを表示する」。 ■ 170 ページの「プラットフォームドキュメントを表示する」。 ■ 172 ページの「Oracle System Assistant の内容を参照する」。 ■ 171 ページの「Oracle System Assistant フラッシュドライブ上のファイルへのアクセス」。 ■ 178 ページの「ハードウェア構成のインポートとエクスポート (Oracle System Assistant 1.2)」。 <p>Oracle System Assistant の管理。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 181 ページの「Oracle System Assistant の更新の準備」。 ■ 187 ページの「Oracle System Assistant の有効化と無効化」。 ■ 190 ページの「Oracle System Assistant のキーボード言語を設定する」。 ■ 191 ページの「使用ログのエクスポート (Oracle System Assistant 1.2)」。 194 ページの「 Oracle System Assistant のトラブルシューティングや確認を行う」。 <p>Oracle System Assistant のトラブルシューティングおよび復元。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 194 ページの「 Oracle System Assistant のトラブルシューティングや確認を行う」。 ■ 197 ページの「 Oracle System Assistant メディアの整合性をチェックする」。 ■ 198 ページの「 Oracle System Assistant ソフトウェアの復元」。

システム管理ツールの概要

このセクションでは、Oracle サーバーの管理に使用できるツール、および最適なツールの選択方法に関する情報を提供します。

説明	リンク
複数のサーバーを管理する際に使用可能なツールの概要	21 ページの「複数システム管理ツール」
各単一システム管理ツールの利点の比較	22 ページの「単一システム管理ツールの概要」
単一システム管理ツールの概要	26 ページの「Oracle System Assistant の概要」 28 ページの「Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) の概要」 34 ページの「Oracle Hardware Management Pack (HMP) の概要」 35 ページの「BIOS 設定ユーティリティの概要」
システム管理ドキュメントの場所	36 ページの「製品ドキュメント」

複数システム管理ツール

複数のシステムに対して同時にシステム管理機能を実行するには、**Oracle Enterprise Manager Ops Center** の使用を検討します。Oracle Enterprise Manager Ops Center は、サーバーサポートの連絡先の一部としてサーバーに含まれている場合があります。Oracle Enterprise Manager Ops Center ソフトウェアを Oracle から注文することもできます。

Oracle Enterprise Manager Ops Center は、物理環境にも仮想環境にも対応できるスケーラビリティの高い統合管理プラットフォームです。Oracle Enterprise Manager Ops Center を使用すると、グローバルなデータセンター全体に分散した Oracle X86 および SPARC マルチプラットフォームシステムを管理し、Oracle システムを既存のツールセットと統合することができます。Oracle Enterprise Manager Ops Center には、多様な側面のコン

プライアンスレポート機能 (ITIL) とデータセンターの自動化機能があるため、数千単位システムを同時に管理できます。

Oracle Enterprise Manager Ops Center の製品情報については、<http://www.oracle.com/technetwork/oem/ops-center/index.html> を参照してください。

関連情報

- 22 ページの「単一システム管理ツールの概要」

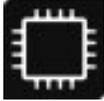
単一システム管理ツールの概要

このセクションでは、単一システム管理に使用するツールについて説明し、各ツールを使用して実行できるタスクを示します。

次の表では、Oracle の単一システム管理 (SSM) ツールを一覧表示して説明します。

複数システム管理の詳細は、21 ページの「複数システム管理ツール」を参照してください。

SSM ツール	アイコン	タイプや環境	機能	リンク
Oracle System Assistant		ホスト上でブートされるユーティリティ。グラフィカルユーザーインターフェース、およびホストオペレーティングシステムからファイルブラウザを使ってアクセス可能なファイルを含んでいます。	サポート対象のオペレーティングシステムのインストール、およびローカルまたはリモートでのサーバーハードウェアの構成や更新を行います。	26 ページの「Oracle System Assistant の概要」
Oracle Integrated Lights Out Manager (Oracle ILOM)		OS がブートされているかどうかに関係なく、ホストから独立して動作します。Web インタフェースとコマンド行インタフェース (CLI) を提供します。	サーバーコンポーネントをローカルまたはリモートで構成および管理します。専用のネットワークポート、サイドバンドポート、またはローカルシリアルポートに接続します。	28 ページの「Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) の概要」
Oracle Hardware		インストール済みのサービスプロセッサ (SP) ユーティリティ。初期構成が若干必要となります。	ホスト OS のコマンド行から実行します。SNMP を使ってリモートから、またはコマンド行インタフェースツールを使っ	34 ページの「Oracle Hardware Management

SSM ツール	アイコン	タイプや環境	機能	リンク
Management Pack		オペレーティングシステムレベルで動作するコマンドやエージェントを備えており、複数のシステムにわたって使用可能です。 アドオンのソフトウェアパック。Oracle System Assistant から取得するか、 http://www.oracle.com/goto/system-management からダウンロードします。	ローカルで、ホストオペレーティングシステム経由でハードウェアをモニターします。	Pack (HMP) の概要
BIOS 設定ユーティリティ		アクセスするには、システムをブートしてブートプロセスに割り込みをかけます。 単純なグラフィカルユーザーインターフェースを提供します。	システム機能のハードウェアレベルの管理を提供します。	35 ページの「BIOS 設定ユーティリティの概要」

各サーバー管理ツールには固有の機能がありますが、一部の機能は重複しています。各ツールは個別に使用することも、複数のツールを併用してより包括的なシステム管理を行うこともできます。

次の表は、一般的なシステム管理タスクと、各タスクの実行に使用されるツールの一覧です。

タスク	Oracle System Assistant	Oracle ILOM	Oracle HMP	関連ドキュメント
ソフトウェアおよびファームウェアを設定する。	222 ページの「システムソフトウェアおよびファームウェアの更新 (Oracle System Assistant)」	229 ページの「サーバーまたはブレードシャーシファームウェアの更新 (Oracle ILOM)」	231 ページの「SP および BIOS ファームウェア、および HBA ファームウェアの更新 (Oracle HMP)」	該当なし
電源投入と冷却のポリシーを設定する。	該当なし	「システムおよび管理電源ポリシーの設定 (Oracle ILOM)」	該当なし	該当なし
BIOS または Oracle ILOM ファームウェアを更新する。	Update Firmware	CLI: load コマンド Web インタフェース: 「Oracle ILOM Administration」 > 「Maintenance」 > 「Firmware Upgrade」	fwupdate	該当なし

タスク	Oracle System Assistant	Oracle ILOM	Oracle HMP	関連ドキュメント
HBA とエクスパンダファームウェアを更新する。	Update Firmware	該当なし	fwupdate	該当なし
インストール済みのオペレーティングシステムを構成する。	該当なし	該当なし	該当なし	サーバーの設置ガイド
Linux オペレーティングシステムをインストールする。	Install Operating System	該当なし	該当なし	サーバーの Linux オペレーティングシステムインストールガイド
Windows オペレーティングシステムをインストールする。	Install Operating System	該当なし	該当なし	サーバーの Windows オペレーティングシステムインストールガイド
Oracle VM ソフトウェアをインストールする。	Install Operating System	該当なし	該当なし	サーバーの Oracle VM Server インストールガイド
Oracle Solaris オペレーティングシステムをインストールする。	Install Operating System	該当なし	該当なし	サーバーの Oracle Solaris OS インストールガイド
ESXi VMware をインストールする。	該当なし	該当なし	該当なし	サーバーの ESX Software インストールガイド
サーバー SP の IP アドレスを表示する。	System Overview	CLI: show /SP/network Web インタフェース: 「System Information」 > 「Summary」	該当なし	該当なし
ホストの MAC アドレスを表示する。	System Overview	CLI: show /System Web インタフェース: 「System Information」 > 「Summary」	該当なし	該当なし
Oracle ILOM のネットワーク設定を変更する。	「Configure Hardware」 > 「Service Processor Configuration」	CLI: set /SP/network Web インタフェース: 「ILOM	ilomconfig	該当なし

タスク	Oracle System Assistant	Oracle ILOM	Oracle HMP	関連ドキュメント
RAID を構成する。	「Configure Hardware」 >「RAID Configuration」	Administration」 >「Network Settings」 該当なし	raidconfig	67 ページの「RAID 構成オプション」
リモートでサーバーの電源を投入する。	該当なし	CLI: start /System	該当なし	該当なし
リモートでサーバーの電源を切断する。	該当なし	Web インタフェース: 「System Information」 > 「Summary」 CLI: stop /System	該当なし	該当なし
SP をデフォルト値にリセットする。	「Configure Hardware」 >「Service Processor Configuration」	Web インタフェース: 「System Information」 > 「Summary」 CLI: set /SP reset_to_defaults=all	ilomconfig	該当なし
ハードウェアコンポーネントをモニターする。	該当なし	Web インタフェース: 「ILOM Administration」 > 「Configuration Management」 > 「Reset Defaults」 CLI: show /SYSTEM/ Open_Problems Web インタフェース: 「System Information」	hwmgmtcli	該当なし

関連情報

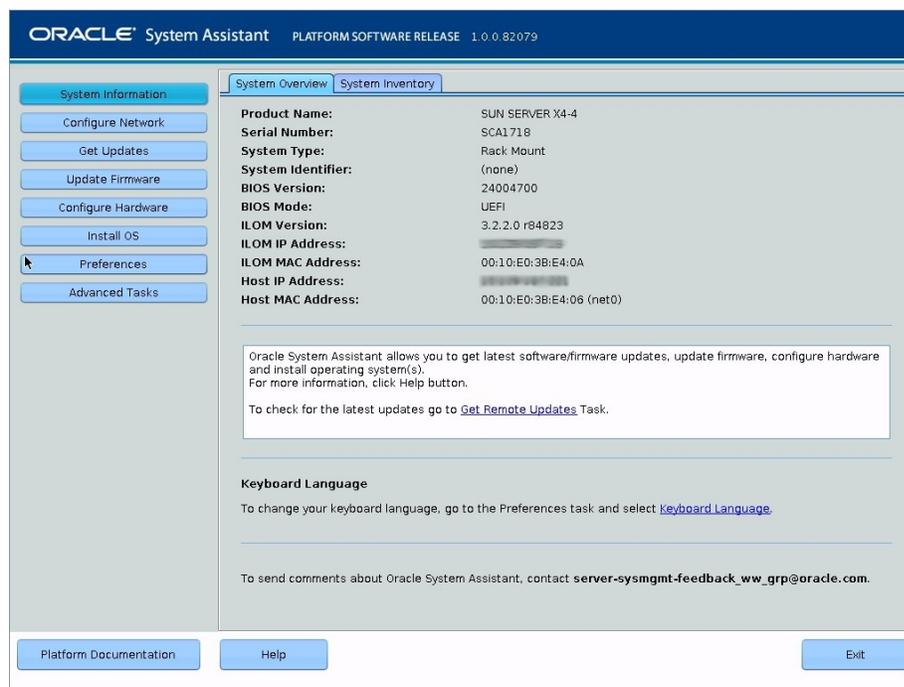
- [「システム管理ツールへのアクセス」](#)

Oracle System Assistant の概要

Oracle System Assistant は、Oracle の Sun サーバー向けのスタートアップ/保守ツールです。説明項目は次のとおりです。

- 構成、アップグレード、インストールの各タスクを実行するブート可能なユーティリティ。
- ホストオペレーティングシステムからファイルブラウザでアクセス可能なツール、ファイル、ファームウェア、およびドキュメント。

Oracle System Assistant ユーティリティを起動するには、BIOS、Oracle ILOM Web インタフェース、Oracle ILOM コマンド行インタフェース、のいずれかを使用できます。起動の詳細については、[161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)を参照してください。



Oracle System Assistant ユーティリティを使えば次のことが行えます。

- サポートされているオペレーティングシステムをインストールし、それらを最新のドライバやサポートされているツールで更新します。

- 入手可能な最新のシステム BIOS、Oracle ILOM、サポート対象オペレーティングシステム、ファームウェア、ツール、およびドライバを Oracle から取得します。インターネット接続が必要です。
- オプションのアクセサリカード用およびその他のシステムハードウェア用に、システム BIOS、Oracle ILOM、および Oracle 認証デバイスドライバを更新します。
- Oracle ILOM サービスプロセッサ (SP) と BIOS を構成します。
- システムの概要およびサーバーハードウェアインベントリ情報を表示します。
- 統合 LSI ディスクコントローラが搭載されたサーバーに RAID 0、RAID 1、RAID 5、または RAID 10 を構成します。
- 実行環境の使用が許可されている Oracle System Assistant (Linux) シェル端末ウィンドウにアクセスします。
- Oracle Hardware Management Pack コマンドに (Oracle System Assistant シェルを使用して) アクセスします。
- サーバー固有のドキュメントにアクセスします。
- Oracle System Assistant を無効にします。

Oracle System Assistant は、システムに組み込まれた USB ストレージデバイス上で提供されます。これには、サポートされているオペレーティングシステムでサーバーを使い始めるのに必要なものがすべて含まれています (ただし、オペレーティングシステムのインストールメディアは除く)。

Oracle System Assistant コンポーネントはネットワーク経由で更新されます。組み込みストレージドライブは、すべてのコンポーネントをオンライン更新機能を使用して保守できるように、出荷時にサーバー固有のバージョンの Oracle System Assistant がインストールされた状態で構成されます。あるいは、My Oracle Support Web サイトから UPDATER ISO イメージをダウンロードすることもできます。

Oracle は継続的に製品を改善するよう努力しています。Oracle System Assistant についてコメントを送信する場合は、server-sysmgmt-feedback_ww_grp@oracle.com まで連絡してください。

関連情報

- [「Oracle System Assistant の使用」](#)
- [「Oracle System Assistant の管理」](#)

Oracle System Assistant のリビジョン

このマニュアルには、Oracle System Assistant の次の 2 つのバージョンに関する情報が含まれています。

- Sun Server X4-2 以前のシステムでは、Oracle System Assistant Release 1.1 が使用されます。
- Sun Server X4-4 以降のシステムでは、Oracle System Assistant Release 1.2 が使用されます。

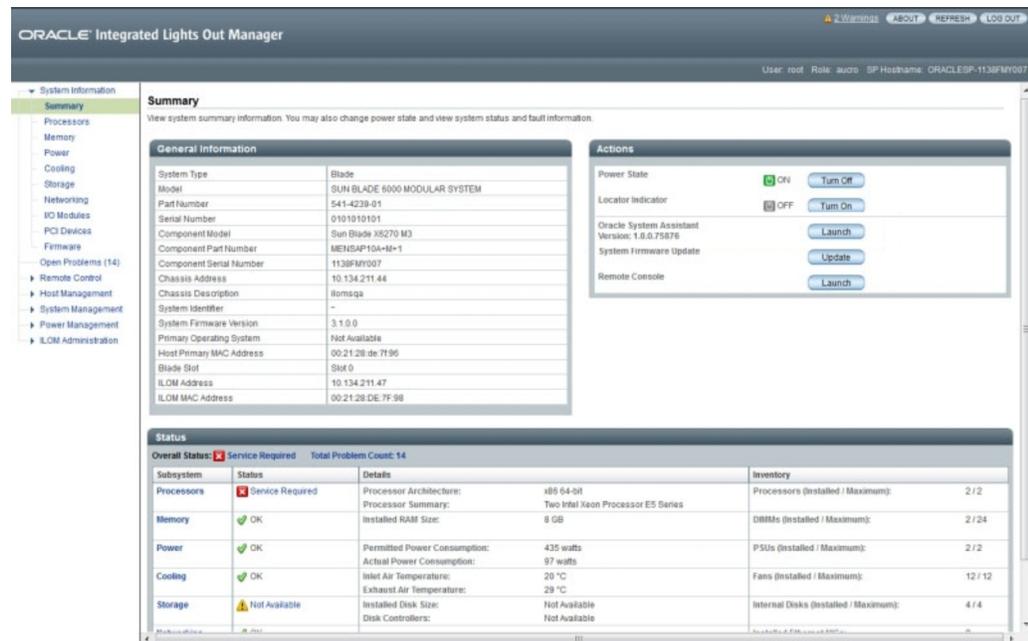
Oracle System Assistant 1.2 では Oracle System Assistant 1.1 のすべての機能がサポートされているほか、次の新機能も含まれています。新機能については、テキスト内で Oracle System Assistant 1.2 でのみ使用可能という表記で示しています。

Oracle System Assistant 1.2 に含まれている新機能は、次のとおりです。

- ローカルメディアからリリースをダウンロードしてインストールする機能。
- RAID 5 のサポート。
- Oracle System Assistant を使用して複数のバージョンのソフトウェアリリースを取得する機能。
- DHCP 更新機能。
- ネットワークサーバー上のメディアから Linux OS をインストールする機能。
- 使用ログの外部メディアへのエクスポート。

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) の概要

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) は、サーバーやブレードシャーシに AC 電力が供給されたあとに動作し始める、埋め込み式のシステム管理ファームウェアです。



システムがスタンバイモードまたは全電源モードのときに、サポートされているユーザーインタフェースを使用すると、ローカルまたはリモートから Oracle ILOM にアクセスできます。

Oracle ILOM にはシステム管理を支援する広範な標準機能が用意されています。それらの機能の簡単なサマリーを次に示します。

機能	説明
システムの健全性ステータス	システム全体の健全性ステータスや合計問題数を表示したり、サブコンポーネントの健全性詳細にドリルダウンしたりします。
ハードウェアのインベントリやステータス	サーバーまたはブレードシャーシに関連付けられたハードウェアをひと目で識別できます。モデル番号、パーツ番号、ファームウェアバージョン、プライマリオペレーティングシステム、ネットワークアドレスなど、システムの詳細情報を収集します。
消費電力管理	サーバーまたはブレードシャーシの消費電力をモニターします。システムの電力使用の制御が容易になるように消費電力ポリシーを構成することを選択します。
障害管理とアラート通知。	システム上で発生したハードウェアエラーを特定します。問題のトラブルシューティングや解決を行うには、ログファイルに格納されたイベントメッセージを表示したり、ナレッジ記事に移動したりします。また、システムでのエラー発生時にその旨をユーザーやほかの関係者に知らせる電子メール通知を設定することを選択することもできます。
ホストサーバー管理アクション	サーバーを管理するために次のタイプのアクションを実行します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 次のブートデバイスを選択します。

機能	説明
	<ul style="list-style-type: none"> ■ ホストの電源状態を管理します。 ■ Oracle System Assistant を起動します。 ■ サーバー識別ラベルを割り当てます。 ■ 診断を構成します。 ■ BIOS とサービスプロセッサ (SP) の構成のバックアップコピーを取ります。 ■ バックアップされた構成プロパティを復元します。
<p>ホストサーバーリダイレクション用の KVMs コンソール</p>	<p>Oracle ILOM リモートコンソール (または Oracle ILOM リモートコンソールプラス) を起動し、ホストサーバーのオペレーティングシステムデスクトップや、キーボード、ビデオ、マウス、ストレージデバイス (KVMs) などの周辺デバイスを完全に制御できるようにします。</p> <p>テキストベースのシリアルコンソール経由でホストサーバーへのコマンド行アクセスを取得します。</p>
<p>ファームウェアの更新</p>	<p>バグ修正や機能拡張を利用してシステム全体の品質やセキュリティを改善するため、システム BIOS と Oracle ILOM で使用可能な最新のファームウェアイメージに更新します。</p> <p>ラックマウントサーバーまたはブレードサーバーモジュールのサービスプロセッサ (SP) と BIOS のファームウェアを更新することを選択するか、あるいはブレードシャーシ内に取り付けられた 1 つ以上のアップグレード可能デバイスのファームウェア更新を実行することを選択します。</p>
<p>ユーザーインターフェースの選択肢</p>	<p>サポートされている次のいずれかの Oracle ILOM ユーザーインターフェースからシステムをリモート管理します。Web ブラウザインターフェース、コマンド行インターフェース (CLI)、SNMP インターフェース、IPMI インターフェース。</p>
<p>SP と CMM の構成済みの管理デフォルト</p>	<p>サーバーサービスプロセッサ (SP) およびシャーシモニタリングモジュール (CMM) 上の Oracle ILOM には、デフォルトプロパティが事前に構成されています。Oracle ILOM に出荷時に設定されたデフォルトプロパティを使用するか、あるいはデータセンターの配備要件に合わせてそれらを必要に応じて変更するかを選択を行います。</p>
<p>ネットワーク管理接続の選択肢</p>	<p>システムをはじめて設定する際には、サポートされている次のいずれかの方法を使って Oracle ILOM への物理ネットワーク管理接続を確立することを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ サーバーまたはブレードシャーシ上に物理的に存在する専用ネットワーク管理ポート (NET MGT) ■ サーバーまたはブレードシャーシ上に物理的に存在する共有ネットワーク管理ポート (NET) ■ サーバーまたはブレードシャーシ上に物理的に存在するローカルシリアル管理ポート (SER MGT) ■ サーバーサービスプロセッサ (SP) とホストオペレーティングシステムクライアント間の内部的な専用 USB over LAN 管理リンク
<p>役割に基づくユーザー管理アカウント</p>	<p>役割に基づくユーザーアカウントを使って、ユーザーの認証と、Oracle ILOM 機能へのユーザーアクセスの承認を行います。サーバーサービスプロセッサ (SP) またはシャーシモニタリングモジュール (CMM) 上で最大 10 個のローカルアカウントを作成して格納することを選択します。あるいは、追加のユーザーアカウントが使用できるように、集中管理された認証サービスを構成することを選択します。</p>
<p>コマンド行インターフェース (CLI) の埋め込みヘルプと Web インターフェースのページレベルヘルプ (Oracle ILOM 3.2.1 以降のみ)</p>	<p>Oracle ILOM 機能に関する質問に対する回答を得るには、コマンドや大部分のプロパティに対する埋め込み CLI ヘルプにアクセスするか、Oracle ILOM の各 Web ページに関連付けられたヘルプページにアクセスします。</p>

機能	説明
	埋め込み CLI ヘルプを表示するには次のコマンドを発行します。show /help <target>。あるいは、Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムで Web ベースのヘルプにアクセスするには、各 Web ページ上にある「More details」リンクをクリックします。

標準機能

■ システムの健全性ステータス

システム全体の健全性ステータスや合計問題数を表示したり、サブコンポーネントの健全性詳細にドリルダウンしたりします。

■ ハードウェアのインベントリやステータス

サーバーまたはブレードシャーシに関連付けられたハードウェアをひと目で識別できます。モデル番号、パーツ番号、ファームウェアバージョン、プライマリオペレーティングシステム、ネットワークアドレスなど、システムの詳細情報を収集します。

■ 消費電力管理

サーバーまたはブレードシャーシの消費電力をモニターします。システムの電力使用の制御が容易になるように消費電力ポリシーを構成することを選択します。

■ 障害管理とアラート通知。

システム上で発生したハードウェアエラーを特定します。問題のトラブルシューティングや解決を行うには、ログファイルに格納されたイベントメッセージを表示したり、ナレッジ記事に移動したりします。また、システムでのエラー発生時にその旨をユーザーやほかの関係者に知らせる電子メール通知を設定することを選択することもできます。

■ ホストサーバー管理アクション

次回のブートデバイスの選択、ホスト電源状態の管理、Oracle System Assistant (OSA) の起動、診断の構成、サーバー識別ラベルの割り当て、BIOS およびサービスプロセッサ (SP) 構成プロパティのバックアップコピーの作成、バックアップされた構成プロパティの必要に応じた復元、を行います。

■ ホストサーバーリダイレクション用の KVMS コンソール。

Oracle ILOM リモートコンソール (または Oracle ILOM リモートコンソールプラス) を起動し、ホストサーバーのオペレーティングシステムデスクトップや、キーボード、ビデオ、マウス、ストレージデバイス (KVMS) などの周辺デバイスを完全に制御できるようにします。あるいは、テキストベースのシリアルコンソール経由でホストサーバーへのコマンド行アクセスを取得します。

■ ファームウェアの更新

バグ修正や機能拡張を利用してシステム全体の品質やセキュリティーを改善するため、システム BIOS と Oracle ILOM で使用可能な最新のファームウェアイメージに更新します。ラックマウントサーバーまたはブレードサーバーモジュールのサービスプロセッサ (SP) と BIOS のファームウェアを更新することを選択するか、あるいはブレードシャーシ内に取り付けられた 1 つ以上のアップグレード可能デバイスのファームウェア更新を実行することを選択します。

■ ユーザーインターフェースの選択肢

サポートされている次のいずれかの Oracle ILOM ユーザーインターフェースからシステムをリモート管理します。Web ブラウザインターフェース、コマンド行インターフェース (CLI)、SNMP インターフェース、IPMI インターフェース。

■ SP と CMM の構成済みの管理デフォルト

サーバーサービスプロセッサ (SP) およびシャーシモニタリングモジュール (CMM) 上の Oracle ILOM には、デフォルト管理プロパティが事前に構成されています。Oracle ILOM に出荷時に設定されたデフォルトプロパティを使用するか、あるいはデータセンターの配備要件に合わせてそれらを必要に応じて変更するかの選択を行います。

■ ネットワーク管理接続の選択肢

システムをはじめて設定する際には、サポートされている次のいずれかの方法を使って Oracle ILOM への物理ネットワーク管理接続を確立することを選択します。

■ サーバーまたはブレードシャーシ上に物理的に存在する専用ネットワーク管理ポート (NET MGT)

■ サーバーまたはブレードシャーシ上に物理的に存在する共有ネットワーク管理ポート (NET)

■ サーバーまたはブレードシャーシ上に物理的に存在するローカルシリアル管理ポート (SER MGT)

■ サーバーサービスプロセッサ (SP) とホストオペレーティングシステムクライアント間の内部的な専用 USB over LAN 管理リンク

■ 役割に基づくユーザー管理アカウント

役割に基づくユーザーアカウントを使って、ユーザーの認証と、Oracle ILOM 機能へのユーザーアクセスの承認を行います。サーバーサービスプロセッサ (SP) またはシャーシモニタリングモジュール (CMM) 上で最大 10 個のローカルアカウントを作成して格納することを選択します。あるいは、追加のユーザーアカウントが使用できるように、集中管理された認証サービスを構成することを選択します。

■ コマンド行インターフェース (CLI) の埋め込みヘルプと Web インターフェースのページレベルヘルプ

Oracle ILOM 機能に関する質問に対する回答を得るには、コマンドや大部分のプロパティに対する埋め込み CLI ヘルプにアクセスするか、Oracle ILOM の各 Web ページに関連付けられたヘルプページにアクセスします。

埋め込み CLI ヘルプを表示するには次のコマンドを発行します。show /help <target>。あるいは、Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムで Web ベースのヘルプにアクセスするには、各 Web ページ上にある「More details」リンクをクリックします。

このガイドで定義されている Oracle ILOM タスク

このガイドでは、Oracle ILOM タスクのサブセットに対する手順を示しています。次のタスクが含まれます。

- 44 ページの「Oracle ILOM への初回管理接続を確立する」
- 46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」
- 47 ページの「KVMS のための Oracle ILOM リモートリダイレクションセッションの起動」
- 61 ページの「サーバーの電源を投入および切断する (Oracle ILOM)」
- 65 ページの「次のブートデバイスを設定する (Oracle ILOM)」
- 94 ページの「システム識別情報を割り当てる (Oracle ILOM)」
- 108 ページの「SP のクロックプロパティを設定する (Oracle ILOM)」
- 99 ページの「SP または CMM のネットワーク設定を構成する (Oracle ILOM)」
- 105 ページの「SP または CMM のローカルユーザーアカウントを追加する (Oracle ILOM)」
- 117 ページの「システム全体の電源管理設定の設定 (Oracle ILOM)」
- 139 ページの「サーバーまたはブレードシステムの情報およびインベントリを表示する (Oracle ILOM)」
- 141 ページの「未解決の問題を表示して解決する (Oracle ILOM)」
- 142 ページの「イベントログのエントリを表示する (Oracle ILOM)」
- 147 ページの「BIOS ファームウェア構成のバックアップ、復元、またはレプリケート (Oracle ILOM)」
- 148 ページの「現在の BIOS ファームウェア構成をバックアップする (Oracle ILOM)」
- 149 ページの「バックアップした BIOS 構成を復元するか、出荷時デフォルトにリセットする (Oracle ILOM)」
- 150 ページの「ホスト BIOS ファームウェア構成を同期する (Oracle ILOM)」

- 149 ページの「バックアップした BIOS 構成を復元するか、出荷時デフォルトにリセットする (Oracle ILOM)」
- 154 ページの「バックアップした Oracle ILOM 構成を復元するか、構成を出荷時デフォルトにリセットする (Oracle ILOM)」

すべての Oracle ILOM タスクの完全な手順については、次の Oracle ILOM ドキュメントライブラリを参照してください。

<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs>

Oracle Hardware Management Pack (HMP) の概要

Oracle Hardware Management Pack (HMP) は、サーバー管理用のコマンド行インタフェース (CLI) ツール群と、SNMP モニタリングエージェントを提供します。

- Oracle Server CLI ツールを使用すると、Oracle サーバーを構成できます。CLI ツールはサポートされているほとんどのオペレーティングシステムで動作します。これらをスクリプト内で使用すれば、サーバーの種類が同じであるかぎり、複数のサーバーをサポートできます。
- Hardware Management Agent SNMP プラグインがあれば、SNMP を使用することにより、Oracle サーバーやサーバーモジュールを単一のホスト IP アドレスを使ってオペレーティングシステムからモニターできます。このため、2 つの管理ポイント (Oracle ILOM とホスト) に接続する必要がなくなります。

Hardware Management Agent は Oracle ILOM との間で情報のフェッチやプッシュを行います。SNMP プラグインは業界標準の SNMP ユーザーインタフェースを提供します。

- `itpconfig` を使用して Oracle ILOM を構成し、SNMP トラップをホストに送信できます。

次のリンクは、サポートされるシステムやツールの一覧を提供します。

<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/servermgmt/tech/hardware-management-pack/support-matrix-423358.html>

関連情報

- 次にある Oracle Hardware Management Pack のドキュメントライブラリ。

<http://www.oracle.com/goto/OHMP/docs>

- 次にある Oracle Enterprise Manager のドキュメント。

http://docs.oracle.com/cd/E27363_01/index.htm

Oracle Hardware Management Pack のユーティリティ

次の表では、Oracle Hardware Management Pack のユーティリティを一覧表示して説明します。

注記 - Oracle Hardware Management Pack に追加機能が含まれている場合があります。最新情報については、Oracle Hardware Management Pack のドキュメントを参照してください。

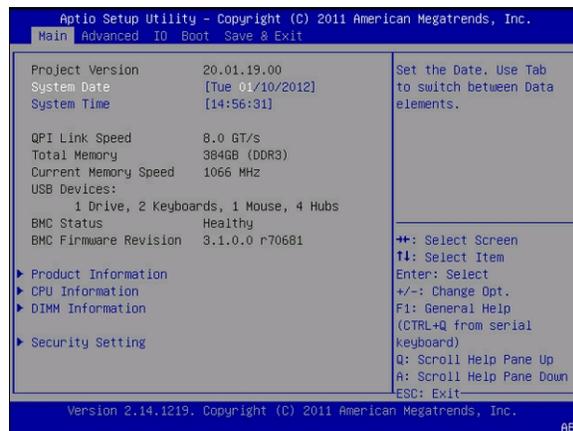
タスク	CLI ツール
BIOS 設定と一部のサービスプロセッサ設定を保持します。	ubiosconfig
Oracle ILOM と BIOS を更新します。サポートされる SAS ストレージデバイス、組み込み SAS ストレージコントローラ、SAS ストレージエクステンダ、ストレージドライブ、InfiniBand コントローラ、およびファイバチャネルコントローラのファームウェアバージョンを照会、更新、検証します。	fwupdate
RAID コントローラに接続されたストレージドライブ上の RAID ボリュームを表示または作成する。	raidconfig
Oracle ILOM の構成設定を復元、設定、表示するほかに、ネットワーク管理、クロック設定、ユーザー管理に関連のある Oracle ILOM プロパティを表示および設定する。	ilomconfig
システムの健全性をモニターします。	hwtmgmtcli
必要なドライバのロードが完了すると、Oracle HMP を使ってセンサーデータリポジトリ (SDR) データの読み取りやサーバーに関するその他の情報の表示を行えるようになります。また、LAN 構成パラメータの取得/設定やシャーン電力制御操作の実行も行えます。	ipmitool
システムイベントログからサーバーのインジケータとセンサー測定値に関する情報を読み取り、位置インジケータを設定します。	snmpwalk
SNMPトラップをホストに送信するよう Oracle ILOM を構成します。	itpconfig

BIOS 設定ユーティリティの概要

BIOS 設定ユーティリティでは、ブートリストの表示や、Unified Extensible Firmware Interface (UEFI) ブートモードまたはレガシーブートモードの選択などのシステム機能を構成で

きます。これにアクセスするには、システムのブート中に F2 キーを押してブートプロセスを中断し、BIOS 設定画面を表示します。

- BIOS 設定ユーティリティにアクセスする方法については、[56 ページの「BIOS 設定ユーティリティへのアクセス」](#)を参照してください。
- BIOS 設定ユーティリティの詳細については、「[BIOS の設定と構成](#)」を参照してください。



UEFI ブートモードとレガシー BIOS ブートモード

システムには、レガシー BIOS の多くの制限を回避した UEFI BIOS が搭載されています。ただし、一部のオペレーティングシステムは UEFI BIOS ではブートできないため、UEFI BIOS ではレガシーブートモードを選択できるようになっています。

デフォルトはレガシーブートモードです。UEFI ブートモードをサポートするオペレーティングシステムのリストについては、サーバーのプロダクトノートを参照してください。UEFI およびレガシーブートモードの詳細については、[213 ページの「Legacy ブートモードと UEFI ブートモード」](#)を参照してください。

製品ドキュメント

製品ドキュメントは、Web 上と Oracle System Assistant から入手可能となっています。

- 製品ドキュメントは、次からオンラインで入手できます。

<http://www.oracle.com/technology/documentation/index.html>

リストを下方方向にスクロールして製品を見つけてください。

- Oracle System Assistant にはシステムドキュメント一式が含まれていますが、それらに Oracle System Assistant からアクセスする方法については、[170 ページの「プラットフォームドキュメントを表示する」](#)を参照してください。

システム管理ツールへのアクセス

このセクションでは、次のシステム管理ツールにアクセスする手順について説明します。これらには次が含まれます。

- [161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)
- [44 ページの「Oracle ILOM へのアクセス」](#)
- [55 ページの「Oracle Hardware Management Pack へのアクセス」](#)
- [56 ページの「BIOS 設定ユーティリティへのアクセス」](#)

Accessing Oracle System Assistant

新しいシステムの運用の準備を行い、ソフトウェアやファームウェアのアップグレードなどの保守タスクを実行するには、Oracle System Assistant を使用します。

Oracle System Assistant を使用するには、システムをリブートしてアクセスする必要があります。

Oracle System Assistant を起動するには、次のいずれかの方法を使用します。

アクセス方法	リンク
起動時に Oracle System Assistant にアクセスします。	40 ページの「起動時に Oracle System Assistant を起動する」
Oracle ILOM を使用して Oracle System Assistant にアクセスします。	41 ページの「Oracle System Assistant を起動する (Oracle ILOM)」

Oracle System Assistant はデフォルトで有効になっていますが、無効にできます。詳細は、[189 ページの「Oracle System Assistant を有効または無効にする \(BIOS\)」](#)を参照してください。

▼ 起動時に Oracle System Assistant を起動する



システムのブート中に、Oracle System Assistant を起動するには、次の手順を使用します。

始める前に ■ [189 ページの「Oracle System Assistant を有効または無効にする \(BIOS\)」](#)。

1. サーバーがスタンバイモードまたは全電力モードであることを確認します。
2. モニター、キーボード、およびマウスが、サーバーにローカル接続されている、またはリモート KVM セッションを通じて接続されていることを検証します。

詳細は、[49 ページの「リモートシステムコンソールリダイレクションセッションの起動」](#)を参照してください。

3. サーバーをブートします。

ブートメッセージがモニターに表示されます。



4. プromptが表示されたら F9 ファンクションキーを押します。

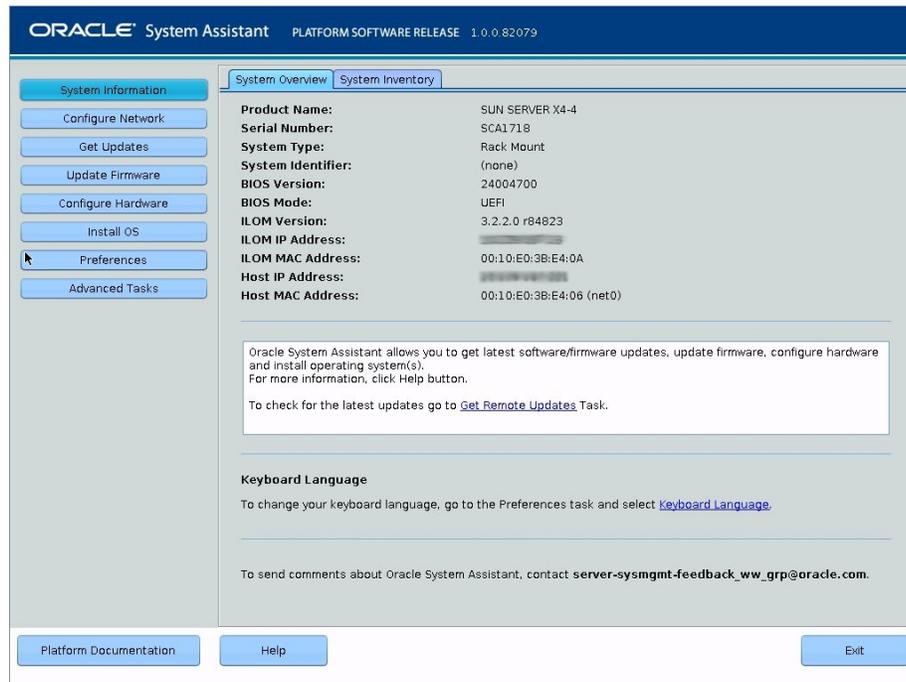
シリアルキーボードの CTRL-O を押すこともできます。

ヒント - Oracle ILOM リモートコンソールを使用してサーバーにアクセスする場合は、遅延のためにサーバーが信号の受信に失敗する可能性があるため、F9 キーを数回押します。

テキスト [Oracle System Assistant Selected] を含む、チェックポイントメッセージが表示されます。

「Software License Agreement (SLA)」ダイアログボックスが表示されたら、「SLA」ダイアログボックスの「Accept」をクリックして続行します。

「Launching Oracle System Assistant」画面が「System Overview」タブが選択された状態で表示されます。



- 参照
- [211 ページの「BIOS のキーマッピング」](#)
 - [「Oracle System Assistant のトラブルシューティング」](#)
 - [59 ページの「サーバーの電源投入と電源切断」](#)

▼ Oracle System Assistant を起動する (Oracle ILOM)



サーバーに対して確立されたリモート KVM セッションを通じて、Oracle ILOM から Oracle System Assistant を起動するには、次の手順を使用します。

- 始める前に
- root ユーザーとして、または Admin (a) および Console (c) の役割特権を持つユーザーとして、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) にログインします。
root ユーザーとして Oracle ILOM にログインする手順については、[44 ページの「Oracle ILOM へのアクセス」](#)を参照してください。
 - この手順を行う前に、管理対象のサーバー上のホストオペレーティングシステムの電源を切ってください。そうしないと、Oracle ILOM から、Oracle System Assistant を起動する前にホストオペレーティングシステムの電源を切るように求めるプロンプトが表示されません。
 - Oracle ILOM リモートシステムコンソールを起動および使用するための要件を満たしていることを確認します。
これらの要件の詳細については、[49 ページの「リモートシステムコンソールリダイレクションセッションの起動」](#)を参照してください。

次に、Oracle ILOM SP でのリモート KVM セッションから Oracle System Assistant にアクセスする手順について説明します。

- **Oracle System Assistant を起動するには、望ましい Oracle ILOM ユーザーインターフェースに応じた次の手順を実行します。**

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「System Information」>「Summary」の順にクリックします。 2. Oracle System Assistant の「Launch」ボタンをクリックします。 ヒント - 「Launch」ボタンは、ページの右側に表示される「Actions」パネルに置かれています。 注記 - Oracle System Assistant ウィンドウではなく「Software License Agreement (SLA)」ダイアログボックスが表示された場合は、「SLA」ダイアログボックスで「Accept」をクリックして、Oracle System Assistant の起動を続行します。 3. Oracle System Assistant ウィンドウからサーバー設定タスクを実行する方法の詳細については、Oracle System Assistant の個々のページで「Help」ボタンをクリックします。 	Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「More details」リンクをクリックします。

インタフェース	手順	詳細
CLI	<p>1. 次のように入力します。</p> <pre>/HOST/provisioning/start system-assistant</pre> <p>Oracle System Assistant を起動するように求めるメッセージが表示されます。</p> <p>2. 49 ページの「リモートシステムコンソールリダイレクションセッションの起動」の説明に従って、Oracle ILOM リモートコンソールを起動します。</p> <p>3. y と入力して Oracle System Assistant を起動します (または、n と入力して操作を取り消します)。</p> <p>Oracle System Assistant ウィンドウが表示されます。</p> <p>注記 - Oracle System Assistant ウィンドウではなく「Software License Agreement (SLA)」ダイアログボックスが表示された場合は、「SLA」ダイアログボックスで「Accept」をクリックして、Oracle System Assistant の起動を続行します。</p> <p>4. Oracle System Assistant ウィンドウからサーバー設定タスクを実行する方法の詳細については、Oracle System Assistant の個々のページで「Help」ボタンをクリックします。</p>	<p>次のように入力します。</p> <pre>help /HOST/provisioning/system-assistant</pre>

- 参照
- [59 ページの「サーバーの電源投入と電源切断」](#)
 - [49 ページの「リモートシステムコンソールリダイレクションセッションの起動」](#)

▼ Oracle System Assistant を終了する



1. Oracle System Assistant から「Exit」ボタンをクリックして、アプリケーションセッションを終了します。
2. システムをリブートするか、電源を切断するかを選択します。

Oracle System Assistant が終了します。選択したオプションに応じて、システムがリブートするか、電源が切れます。

Oracle ILOM へのアクセス

システムを構成したり、システムの健全性をモニターしたりするには、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) にアクセスします。Oracle ILOM には、Web インタフェースからでもコマンド行インタフェース (CLI) からでもアクセスできます。詳細は、次のセクションを参照してください。

- [44 ページの「Oracle ILOM への初回管理接続を確立する」](#)
- [46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」](#)
- [47 ページの「KVMS のための Oracle ILOM リモートリダイレクションセッションの起動」](#)

▼ Oracle ILOM への初回管理接続を確立する



Oracle ILOM にはじめてアクセスする前に、Oracle ILOM への物理ネットワーク接続か、ローカルのシリアル管理接続を確立する必要があります。次の手順を参照してください。

注記 - シャーシモニタリングモジュール (CMM) は、各ブレード上のサーバープロセッサ (SP) と連携して完全なシャーシ管理システムを構成するホットプラグ可能なモニタリングモジュールです。

- Oracle ILOM へのローカルまたはリモート管理接続を確立するには、次のいずれかを行います。

望ましい接続	手順
専用リモートネットワーク管理接続 注記 - 一般的なネットワークから切り離すには、サービスプロセッサ (SP) 専用の内部ネットワークを使用します。Oracle ILOM のもっとも信頼性が高くセキュアな環境を維持するために、サーバー上の専用のネット	<ol style="list-style-type: none"> 1. ネットワークスイッチと、サーバーまたはブレードシャーシの NET MGT ポートをイーサネットケーブルで接続します。 デフォルトでは、サーバーのサービスプロセッサ (SP) またはシャーシモニタリングモジュール (CMM) の動的 IP アドレスは、DCHP ルーターによって割り当てられます。 2. サーバー SP または CMM に割り当てられている IP アドレスを確認します。

望ましい接続	手順
ワーク管理ポートは常に、内部の信頼できるネットワークや専用のセキュアな管理/プライベートネットワークに接続している必要があります。	<p>Oracle ILOM で動的 IP アドレスを確認するには、Oracle ILOM へのシリアル接続を確立し、CLI の show コマンドを使用して、SP または CMM の /network および /network/ipv6 ターゲットの下でプロパティを表示します。</p> <p>3. SP または CMM に割り当てられた IP アドレスを使用して、Oracle ILOM へのネットワーク接続を確立します。</p> <p>詳しい手順は、46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」を参照してください。</p>
専用のローカルシリアル管理接続	<p>1. コンソール (ワークステーションまたは端末) と、サーバーまたはブレードシャーシの SER MGT ポートをシリアルケーブルで接続します。</p> <p>物理的接続で、サーバーのサービスプロセッサ (SP) またはシャーシモニタリングモジュール (CMM) との最初の通信が行われます。端末デバイス通信プロパティを、9600 ボー、8 ビット、パリティなし、1 ストップビットに設定する必要があります。</p> <p>2. Oracle ILOM へのローカル接続を作成するには、Return キーを押します。</p> <p>Oracle ILOM プロンプト (>) が表示されます。詳しい手順は、46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」を参照してください。</p>
専用の相互接続 SP 管理接続 (内蔵 USB over LAN とも呼ばれます)	<p>サーバーサービスプロセッサ (SP) とホストオペレーティングシステムクライアント間の専用のローカル相互接続を自動構成するか手動で構成するかを選択します。</p> <p>手順については、ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『<i>Oracle ILOM 構成および保守ガイド</i>』の「専用の相互接続 SP 管理接続」を参照してください。</p>
共有サイドバンドネットワーク接続 注記 - サイドバンド管理を使用すると、2 つの別個のネットワーク接続を確立せずに済むため、ケーブル管理とネットワーク構成が簡素化されます。ただし、サイドバンド管理ポートが信頼できるネットワークに接続されていない場合、Oracle ILOM トラフィックが信頼できないネット	<p>サーバーシャーシに装備された標準データポートから Oracle ILOM に接続することを選択します。</p> <p>注記 - Oracle ILOM へのサイドバンド管理接続を実装すると、ホストおよび管理トラフィックのために 2 つの別個のネットワーク接続をサポートする必要がなくなります。ただし、このアプローチは、(1) Oracle ILOM への接続のパフォーマンスが低下する可能性があり、(2) Oracle ILOM のトラフィックが信頼されていないネットワークに転送される恐れがあります。</p> <p>手順については、ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『<i>Oracle ILOM 構成および保守ガイド</i>』の「サイドバンドネットワーク管理接続」を参照してください。</p>

望ましい接続	手順
	ワークを介して送信される可能性があることも意味します。

▼ Oracle ILOM を起動しログインする



始める前に 次に、ローカルまたはネットワークのいずれかの管理接続から Oracle ILOM を起動しログインするための、Web とコマンド行インタフェース (CLI) の手順を示します。

はじめてサーバーで Oracle ILOM を設定する場合は、デフォルトの管理 root アカウントを使用してログインします。それ以外の場合は、すべてのユーザーは、割り当てられた各自のユーザーアカウント名とパスワードを使用してログインする必要があります。

注記 - Oracle ILOM への初回ログインおよびアクセスを有効にするために、デフォルトの管理者アカウントとそのパスワードがシステムに用意されています。セキュアな環境を構築し、Oracle ILOM でユーザー認証および承認を実施するには、はじめて Oracle ILOM にログインしたあと、デフォルトの管理者アカウント (root) のデフォルトのパスワード (changeme) を変更する必要があります。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

1. Oracle ILOM への物理的管理接続が確立されていることを確認します。
Oracle ILOM への物理的管理接続を確立する手順については、[44 ページの「Oracle ILOM への初回管理接続を確立する」](#)を参照してください。
2. Oracle ILOM を起動してログインするには、Oracle ILOM に対して確立された物理的管理接続に基づいて次の手順のいずれかを実行します。

管理接続	Oracle ILOM インタフェース	手順
リモート管理接続	Web	<ol style="list-style-type: none"> 1. <code>http:// ILOM_SP_or CMM_ipaddress</code> に移動します。 Oracle ILOM のログインページが表示されます。 2. ユーザー名とパスワードを入力し、「Log In」をクリックします。

管理接続	Oracle ILOM インタフェース	手順
		<p>注記 - 今回はじめて Oracle ILOM にアクセスする場合は、ユーザー名には root を、パスワードには changeme を入力します。</p> <p>注記 - Oracle ILOM への初回ログインおよびアクセスを有効にするために、デフォルトの管理者アカウントとそのパスワードがシステムに用意されています。セキュアな環境を構築し、Oracle ILOM でユーザー認証および承認を実施するには、はじめて Oracle ILOM にログインしたあと、デフォルトの管理者アカウント (root) のデフォルトのパスワード (changeme) を変更する必要があります。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。</p> <p>注記 - Oracle ILOM への不正アクセスを防止するため、ユーザーごとにユーザーアカウントを作成します。詳細は、102 ページの「Oracle ILOM ユーザーアカウントの追加」を参照してください。</p>
リモート管理接続	CLI	<ol style="list-style-type: none"> 1. 端末を開きます。 2. 次のように入力します。 <pre>ssh username@ILOM_SP_or_CMM_ipaddress</pre> 3. Return キーを押して、求められたらパスワードを入力します。 <p>注記 - 今回はじめて Oracle ILOM にアクセスする場合は、ユーザー名には root を、パスワードには changme を入力します。</p> <p>注記 - Oracle ILOM への不正アクセスを防止するため、ユーザーごとにユーザーアカウントを作成します。詳細は、102 ページの「Oracle ILOM ユーザーアカウントの追加」を参照してください。</p>
ローカルシリアル管理接続	CLI	<p>■ Oracle ILOM のプロンプト (>) で、ユーザー名を入力し、求められたらパスワードを入力します。</p> <p>注記 - 今回はじめて Oracle ILOM にアクセスする場合は、ユーザー名には root を、パスワードには changeme を入力します。</p> <p>注記 - Oracle ILOM への不正アクセスを防止するため、ユーザーごとにユーザーアカウントを作成します。詳細は、102 ページの「Oracle ILOM ユーザーアカウントの追加」を参照してください。</p>

KVMS のための Oracle ILOM リモートリダイレクションセッションの起動

サーバーのリモート管理を支援するため Oracle ILOM では、サーバーのキーボード、ビデオ、マウス、またはストレージ (KVMS) デバイスをホストシリアルコンソールリダイレクション、リモートシステムコンソールリダイレクション、およびリモート仮想ストレージデバイスリダイレクションという方法でリダイレクトできます。

Oracle ILOM からリモートリダイレクションセッションを確立する方法の詳細は、次を参照してください。

- 48 ページの「ホストシリアルコンソールリダイレクションセッションの起動」
- 49 ページの「リモートシステムコンソールリダイレクションセッションの起動」
- 53 ページの「中央リポジトリからの仮想ストレージデバイスリダイレクションセッションの構成」

▼ ホストシリアルコンソールリダイレクションセッションの起動



ホストサーバーへのホストシリアルコンソールリダイレクションセッションの開始および停止を行うには、Oracle ILOM CLI を使用します。Oracle ILOM では CLI から複数のホストシリアルコンソールリダイレクションセッションを起動できますが、読み取りおよび書き込み権限を付与されるのは SP 上の 1 つのホストシリアルコンソールセッションユーザー (最初にログインしたセッションユーザー) のみです。ログインしたその他すべての SP 上のホストシリアルコンソールセッションユーザーには、読み取り専用権限が付与されます。読み取りおよび書き込みのフル権限を持つセッションユーザーがセッションをクローズし、読み取りおよび書き込み権のフル権限で新しいシリアルセッションがオープンされたときに、読み取りセッション権限と書き込みセッション権限の再割り当てが行われます。

始める前に ホストシリアルコンソールリダイレクションセッションを起動する前に、次の前提条件が満たされていることを確認します。

- Oracle ILOM でホストサーバーのオペレーティングシステムに対するシリアルリダイレクションセッションを開始するには、Console (c) の役割が必要です。
- ホストシリアルリダイレクションセッションは、Oracle ILOM SP CLI からのみ開始できません。

Oracle ILOM SP CLI からホストシリアルコンソールリダイレクションを起動するには、次の手順に従います。

1. Oracle ILOM SP CLI からホストシリアルコンソールリダイレクションを開始するには、次のいずれかを実行します。
 - 単一システム SP の場合、`start /host/console` と入力します。

- 複数ドメインサーバー SP の場合、`start /Servers/Pdomains/PDomain_n/host/console` と入力します。

ユーザーの資格を求めるメッセージが表示されます。

2. ホストサーバーのオペレーティングシステムにアクセスするために必要なユーザー資格を入力します。

これで、ホストシリアルコンソールを介してホストサーバーのオペレーティングシステムにログインしました。

注記 - 標準の Oracle ILOM CLI コマンドを実行するには、最初にホストシリアルコンソールを終了する必要があります。

3. ホストシリアルコンソールリダイレクションセッションを終了するには、次の手順を実行します。
 - a. ホストサーバーのオペレーティングシステムからログアウトします。
 - b. ホストシリアルコンソールと Oracle ILOM 間の接続を終了するには、Esc と (のキーを同時に押します

注記 - ホストにブレイクを送信するには、Esc キーを押して大文字の B を入力します。

参照 ファームウェア 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』のシリアルホストコンソールの開始。

▼ リモートシステムコンソールリダイレクションセッションの起動



Oracle ILOM Web インタフェースから Oracle ILOM リモートシステムコンソール (プラス) アプリケーションを使用して、リモートコンソールリダイレクションセッションを起動します。このアプリケーションを使用すると、リモートからサーバーにソフトウェアをインストールしたり、シリアルまたはビデオリダイレクションセッションを通してサーバーをリモートから管理したりできます。

Oracle X4-2 ラックマウントサーバーおよびブレードサーバーの場合、Oracle ILOM リモートシステムコンソールアプリケーションのオリジナルのバージョンが提供されます。このアプリケーションでは、Oracle ILOM Web インタフェースから複数の KVMS リダイレクションセッションを起動する機能のほか、ストレージデバイスをリダイレクトするための個別のコマンド行インタフェース (CLI) もサポートされています。Web インタフェースからの Oracle ILOM リモートシステムコンソール KVMS セッションの起動についての詳細は、「始める前に」とこのトピックのあとに示す手順を参照してください。Oracle ILOM のストレージリダイレクション CLI 機能の設定および使用の詳細は、ファームウェアリリース 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』の「Oracle ILOM Storage Redirection CLI」の情報を参照してください。

注記 - Oracle X4-2 ラックマウントサーバーまたはブレードサーバーを使用している場合、Oracle ILOM リモートシステムコンソールで Web インタフェースからシリアルリダイレクションセッションを起動できません。Oracle ILOM からシリアルリダイレクションセッションを起動する方法の詳細は、[48 ページの「ホストシリアルコンソールリダイレクションセッションの起動」](#)を参照してください。

Oracle X4-4 以降の X4 シリーズのラックマウントサーバーおよびブレードサーバーの場合、Oracle ILOM リモートシステムコンソールプラスアプリケーションが提供されます。このアプリケーションでは、最大で 4 つのビデオリモートコンソールセッションと 1 つのシリアルリモートコンソールセッションを Oracle ILOM Web インタフェースから起動できます。SP にログインした最初の (プライマリ) リダイレクションセッションユーザーには、フルリダイレクション制御権限が付与されます。SP にログインしたその他のリダイレクションセッションユーザーには、表示専用リダイレクション制御権限が付与されます。プライマリユーザーがリダイレクションセッションのフル制御を放棄するには、ビデオまたはシリアルセッションウィンドウを閉じるか、ビデオセッションウィンドウの KVMS メニューで「*Relinquish Full-Control*」を選択します。表示専用ユーザーが放棄されたフル制御リダイレクションセッションを取得するには、セッションウィンドウを一度閉じて再起動するか、ビデオセッションウィンドウの KVMS メニューで「*Take Full-Control*」を選択します。

始める前に Oracle ILOM からリモートコンソールリダイレクションセッションを起動する前に、次の前提条件が満たされていることを確認します。

- 適切な Java Runtime Environment (JRE) がインストールされていることを確認します。

Oracle X4-2 ラックマウントサーバーおよびブレードサーバーの場合、Oracle ILOM リモートシステムコンソールで JRE 1.5 以降が必要になります。また、Windows Internet Explorer (IE) Web ブラウザユーザーの場合、Oracle ILOM リモートシステムコンソールを起動する前に、管理クライアント上の 32 ビット JDK ファイルを登録する必要があります。

Oracle X4-4 以降の X4 シリーズのラックマウントサーバーおよびブレードサーバーの場合、Oracle ILOM リモートシステムコンソールプラスで JRE 1.6 以降が必要になります。

- はじめてリモートシステムコンソールセッションを起動する場合は、適切な KVMS プロパティが Oracle ILOM SP に設定されていることを確認します。KVMS プロパティを表示または設定するには、Oracle ILOM Web インタフェースで「Remote Control」>「KVMS」をクリックします。

Oracle ILOM リモートシステムコンソールを使用するには「KVMS State」が有効になっている必要があります (デフォルトで有効)。オプションで、KVMS ページで「Host Lock」プロパティを設定すると、リモートコンソールセッションからの切断時にホストオペレーティングシステムデスクトップを自動的にロックできます。また、KVMS ページでは、Solaris ベースおよび Linux ベースのオペレーティングシステムのマウスモードプロパティ (「Absolute」または「Relative」) を構成できます。リモートホストで Windows、Oracle Solaris、または Absolute Mouse モードのドライバサポートを含む Linux バージョンを実行している場合は、Absolute Mouse モードを使用します。それ以外の場合、リモートホストで Absolute Mouse モードのドライバサポートが含まれていない Linux バージョンを実行している場合は、Relative Mouse モードを使用します。

- Oracle ILOM で有効な Console (c) 役割特権を持っていることを確認します。Oracle ILOM リモートシステムコンソールセッションを使用する場合、この役割は必須です。
- リダイレクトされたホストオペレーティングシステムデスクトップにログインする前に、ホストサーバーのオペレーティングシステムユーザー資格を持っていることを確認します。

- Oracle ILOM SP Web インタフェースからリモートシステムコンソールセッションを起動するには、使用しているサーバーに応じて、次に示す適切なリモートシステムコンソール手順を実行します。

リモートシステムコンソール	手順	詳細
Oracle ILOM リモートシステムコンソール (Oracle X4-2 ラックマウントサーバーおよびブレードサーバーで使用可能)	<ol style="list-style-type: none"> 1. Oracle ILOM Web インタフェースで、「Remote Control」>「Redirection」の順にクリックします。 2. 「Redirection」ページで「Launch Remote Console」をクリックします。 「Oracle ILOM Remote System Console」セッションウィンドウが表示されます。 	ファームウェアリリース 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』の「Oracle ILOM リモートシステムコンソール」の情報を参照してください。

リモートシステムコンソール	手順	詳細
	<p>ヒント - リモートクライアントとローカルデスクトップの間でキーボードまたはマウス入力を切り替えるには、Alt+M (マウスの場合) または Alt+K (キーボードの場合) を押します。</p> <p>ヒント - または、Oracle ILOM SP CLI で ストレージリダイレクション CLI 機能を使用して、ストレージデバイスをリダイレクトできます。詳細は、ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』の Storage Redirection CLI に関する情報を参照してください。</p>	
<p>Oracle ILOM リモートシステムコンソールプラス</p> <p>(Oracle X4-4 以降の X4 シリーズのラックマウントサーバーおよびブレードサーバーで使用可能)</p>	<ol style="list-style-type: none"> Oracle ILOM Web インタフェースで、「Remote Control」>「Redirection」の順にクリックします。 「Redirection」ページでシリアルまたはビデオリダイレクションのいずれかのオプションをクリックし、「Launch Remote Console」をクリックします。 <p>シリアルリダイレクションの場合、テキストベースの Oracle ILOM リモートシステムコンソールプラスのホストセッションウィンドウが表示されます。</p> <p>ビデオリダイレクションの場合、グラフィックベースの KVMS Oracle ILOM リモートシステムコンソールプラスのホストセッションウィンドウが表示されます。</p> <p>ヒント - SP にログインした最初の (プライマリ) リダイレクションセッションユーザーには、フルリダイレクション制御特権が付与されます。SP にログインしたその他のリダイレクションセッションユーザーには、表示専用リダイレクション制御が付与されます。フルリダイレクション制御セッションを終了すると、フルリダイレクション制御特権が自動的に放棄され、SP 上のほかのセッションユーザーがフ</p>	<p>「Redirection」Web ページで「More Details」リンクをクリックします。</p>

リモートシステムコンソール	手順	詳細
	ルリダイレクション制御特権を取得できるようにします。	

- 参照
- ファームウェアリリース 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』の「Oracle ILOM リモートシステムコンソール」
 - ファームウェアリリース 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』の「Oracle ILOM リモートシステムコンソールプラス」

▼ 中央リポジトリからの仮想ストレージデバイスリダイレクションセッションの構成



Oracle ILOM の仮想リモートストレージデバイス機能を使用すると、ストレージのイメージファイルを中央の NFS または SAMBA リポジトリにマウントし、そのイメージファイルをホストサーバーにリダイレクトできます。このイメージはホストサーバーからは接続されているストレージデバイスのように見えます。

どの Oracle ILOM KVMS ユーザーインターフェースからでも 1 回にリダイレクトできるのは、1 つのリモート仮想ストレージイメージファイルのみです。SP 上で別のストレージリダイレクションセッションが進行しているときにイメージファイルのリダイレクトを試みると、そのストレージリダイレクションは失敗し、エラーメッセージが表示されます。

注記 - Oracle ILOM の仮想リモートストレージデバイス機能は、Oracle X4-4 以降の X4 シリーズのラックマウントサーバーおよびブレードサーバーでサポートされています。Oracle ILOM の仮想リモートストレージデバイス機能は Oracle X4-2 のラックマウントサーバーおよびブレードサーバーではサポートされていません。

始める前に 仮想リモートストレージデバイス機能では、次を実行できます。

- リモートサーバーに保存されている単一の (ISO) イメージファイルから複数の Oracle サーバーをブートします。
- リモートサーバーに保存されている単一の (VFAT) イメージファイルを使用して複数の Oracle サーバーを更新します。

中央リポジトリから仮想ストレージデバイスリダイレクションセッションを作成する前に、次の前提条件が満たされていることを確認します。

- インストールされていることを確認します。Oracle ILOM ファームウェアバージョン 3.2.2 以降がインストールされています。

注記 - 仮想リモートストレージデバイス機能は Oracle X4-4 以降の X4 シリーズのラックマウントサーバーおよびブレードサーバーで使用できます。この機能は、Oracle X4-2 ラックマウントおよびブレードシリーズのサーバーではサポートされていません。

- Admin (a) 役割特権が Oracle ILOM で有効であることを確認します。Oracle ILOM でストレージイメージファイルのマウントとリダイレクトのためのプロパティを構成するには、この役割は必須です。
 - 必要であれば、イメージファイルのマウントおよびリダイレクトを行う NFS または SAMBA 中央リポジトリサーバーのユーザー資格を持っていることを確認します。
- Oracle ILOM で仮想リモートストレージリダイレクションプロパティを構成するには、使用する Oracle ILOM ユーザーインターフェイスに応じた手順を実行します。

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 1. Oracle ILOM Web インタフェースで、「Remote Control」>「Remote Device」の順にクリックします。 2. 「Remote Device」Web ページで構成可能なプロパティの値を設定し、「Save」をクリックします。 3. 「Remote Device」ページで「Status」プロパティを表示し、仮想ストレージデバイスリダイレクションの現在のステータスを確認します。 	「Remote Device」Web ページで「More Details」リンクをクリックします。
CLI	<ol style="list-style-type: none"> 1. 構成可能な仮想デバイスリダイレクションプロパティの値を設定するには、次を入力します。 <pre>set /SP/services/kvms/remote_virtual_device servicestate=enabled target_URI= [NFS or Samba URI file location] username= [your_username] password= [your_password]</pre> 注記 - 一部のシステムでは、remote_virtual_device の代わりに host_storage_device を使用します。 2. 仮想デバイスリダイレクションの現在のステータスを表示するには、次を入力します。 	<p>次のように入力します。</p> <pre>help /SP/services/kvms/ remote_virtual_device</pre>

インタフェース	手順	詳細
	<pre>show /SP/services/kvms/remove_virtual_device status</pre>	

- 参照 ■ ファームウェアリリース 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、リモートイメージファイルのリダイレクト

Oracle Hardware Management Pack へのアクセス

Oracle Hardware Management Pack (HMP) には、オペレーティングシステムのコマンド行から、または Oracle System Assistant コマンドシェルからインバンドで使用できるツールが用意されています。

- サーバー上で BIOS、RAID ボリューム、および Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) サービスプロセッサを構成します。
- サーバーコンポーネントのファームウェアをアップグレードします。
- Oracle ILOM サービスプロセッサからホストと ILOM 間の接続を介してフォルトトラップを送信する、Simple Network Management Protocol (SNMP) フォルトトラッププロキシを構成します。
- Oracle Solaris を実行しているサポート対象のサーバーでゾーニングを構成します。
- ハードウェア構成情報と Oracle サーバーのステータスを表示します。
- IPMI プロトコルを使用してサーバーサービスプロセッサにアクセスし、管理タスクを実行します。
- SNMP を介した Oracle ハードウェアのインバンドモニタリングを有効にします。この情報を使用して、Oracle サーバーをデータセンター管理インフラストラクチャーに統合できます。

▼ Oracle Hardware Management Pack にアクセスする



始める前に <http://www.oracle.com/goto/OHMP/docs> にある Hardware Management Pack ドキュメントライブラリの説明に従って Oracle HMP がインストールされていることを確認します。

- オペレーティングシステムのコマンド行で Oracle HMP のコマンドを入力します。

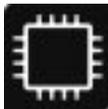
参照 ■ [34 ページの「Oracle Hardware Management Pack \(HMP\) の概要」](#)

BIOS 設定ユーティリティへのアクセス

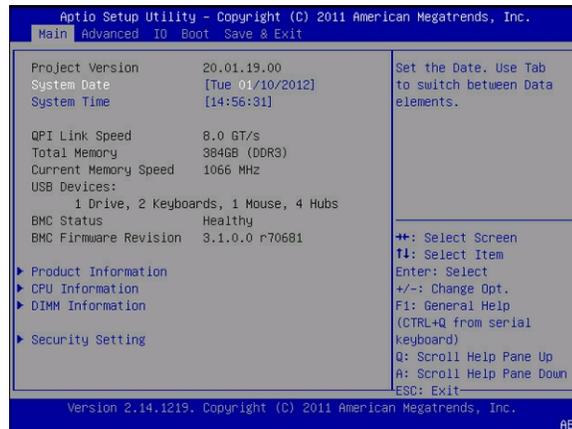
BIOS 設定ユーティリティを使用すると、ブートプロセスを中断してシステムを構成できます。実際の BIOS 設定画面は、システムによって若干異なる場合があります。BIOS 設定ユーティリティ画面の詳細については、ハードウェアのドキュメントを参照してください。

注記 - システムには UEFI BIOS が組み込まれており、Legacy ブートモードまたは UEFI ブートモードでブートするように構成できます。詳細は、[213 ページの「Legacy ブートモードと UEFI ブートモード」](#)を参照してください。

▼ BIOS 設定ユーティリティにアクセスする



1. システムをリセットします。詳細は、システムのドキュメントを参照してください。
POST シーケンスが開始されます。メッセージがモニターをスクロールして表示されます。
2. F2 キー (シリアルモニターからは Ctrl + E) を数回押します。
BIOS 設定ユーティリティのメインメニューが表示されます。



3. **メニュー間を移動するには、次のようにします。**

- メニュー間を移動するには、矢印キーを使用します。
- 項目を選択するには、+ キーと - キー、または Enter を使用します。
- サブメニューから戻るには、Esc キーを使用します。

4. **終了したら、F10 を押します。**

ユーティリティから、変更内容を保存するか、変更内容を破棄して終了するかを求められます。

- 参照
- [「BIOS の設定と構成」](#)
 - [208 ページの「BIOS 設定ユーティリティを終了する」](#)

サーバーの電源の制御

この章では、サーバーの電源を投入および切断する方法について説明します。説明項目は次のとおりです。

- 60 ページの「[電源ボタンを使用してサーバーの電源を切断する](#)」
- 61 ページの「[電源ボタンを使用してサーバーの電源を投入する](#)」
- 61 ページの「[サーバーの電源を投入および切断する \(Oracle ILOM\)](#)」

注記 - 電源ポリシーを構成するには、「[システムおよび管理電源ポリシーの設定 \(Oracle ILOM\)](#)」を参照してください。

サーバーの電源投入と電源切断

サーバーの電源状態には電源切断、スタンバイ電源、フル電源の 3 つがあります。

電源状態	説明
電源切断	サーバーの電源が完全に切断されるのは、AC 電源コードを抜いた場合だけです。 サーバーモジュールの電源が完全に切断されるのは、それらがシャーシから切り離されている場合、またはシャーシへの AC 電源が切断されている場合です。
スタンバイ電源	スタンバイ電源モードでは、Oracle ILOM の電源は投入されますがホストの電源は切断されます。スタンバイ電源モードでは、フロントパネルの OK ステータスインジケータが点滅します。
フル電源	ホストの電源を投入すると、サーバーはフル電源モードに入ります。 フル電源モードでは、OK ステータスインジケータが常に点灯しています。 ホストの電源を正常に切断することも、すぐに切断することもできます。 サーバーの電源を正常に切断すると、Advanced Configuration and Power Interface (ACPI) に対応したオペレーティングシステムでは、シャットダウンされる前にオペレーティングシステムの準備が行われます。サーバーの電源を即時に切断すると、そのような試みは行われません。

電源状態	説明
	注意 - データ損失: データの損失を防ぐには、電源の即時切断を実行する前に、シャットダウンに向けてオペレーティングシステムの準備を行なってください。

システムの電源を制御するには、埋め込み式の電源ボタン、Oracle ILOM Web インタフェース、Oracle ILOM コマンド行インタフェース (CLI)、のいずれかを使用します。

- 電源ボタンを使用する場合は、60 ページの「電源ボタンを使用してサーバーの電源を切断する」および61 ページの「電源ボタンを使用してサーバーの電源を投入する」を参照してください。
- Oracle ILOM を使用する場合は、61 ページの「サーバーの電源を投入および切断する (Oracle ILOM)」を参照してください。

▼ 電源ボタンを使用してサーバーの電源を切断する

1. サーバーのフロントパネルにある埋め込み式の電源ボタンの位置を確認します。
位置については設置マニュアルを参照してください。

注記 - ほとんどのシステムでは、電源ボタンは埋め込み式になっています。

2. スタイラスやその他の先のとがった不導体を使って電源ボタンを押します。

- **正常なシャットダウンを実行する場合:** 電源ボタンを押して離します。

ACPI に対応したオペレーティングシステムでは正常なシャットダウンが実行されます。ACPI に対応したオペレーティングシステムを実行していないシステムでは、このイベントが無視され、ホストのシャットダウンが失敗する可能性があります。

システムがスタンバイ電源モードであることを示すため、フロントパネルの OK ステータスインジケータが点滅します。

- **即時シャットダウンを実行する場合:** 電源ボタンを 5 秒以上押し続けます。

システムがスタンバイ電源モードであることを示すため、フロントパネルの OK ステータスインジケータが点滅します。



注意 - データの損失: 即時停止すると、すべてのアプリケーションとファイルは、変更が保存されずに突然終了されます。



注意 - サーバーの電源を完全に切断するには、サーバーのバックパネルから電源コードを取り外す必要があります。

▼ 電源ボタンを使用してサーバーの電源を投入する

1. 電源装置が電源に接続されており、OK ステータスインジケータが点滅していることを確認します。
2. サーバーがスタンバイモードであることを確認します。
3. フロントパネルにある電源ボタンの位置を確認します。

注記 - ほとんどのシステムでは、電源ボタンは埋め込み式になっています。

正確な位置については、インストールガイドを参照してください。

4. スタイラスやその他の先のとがった不導体を使って電源ボタンを押します。
ホストがブートし、サーバーがフル電源モードに入ります。ホストが完全にブートされると、OK ステータスインジケータが常時点灯状態になります。

▼ サーバーの電源を投入および切断する (Oracle ILOM)



Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) を使えば、サーバーの電源の投入や切断をリモートから行えます。

始める前に 次に、サーバーサービスプロセッサ (SP) に対する Web の手順とコマンド行インタフェース (CLI) の手順の両方を記します。

- Oracle ILOM にログインします。Oracle ILOM にログインする手順については、[44 ページの「Oracle ILOM へのアクセス」](#)を参照してください。
- Oracle ILOM で Admin (a) 役割特権を持っていることを確認します。



注意 - データの損失: 即時停止すると、すべてのアプリケーションとファイルは、変更が保存されずに突然終了されます。

- ホストサーバーの電源を投入、切断、またはリセットするには、望ましい Oracle ILOM ユーザーインターフェイスで次の手順を実行します。



注意 - サーバーの電源を完全に切断するには、サーバーのバックパネルから電源コードを取り外す必要があります。

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 「Host Management」>「Power Control」をクリックします。 「Settings」ドロップダウンメニューから、次のいずれかを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Reset: 電源を切断せずにサーバーをリセットします。 ■ Immediate Power-Off: システムの電源をただちに切断します。 ■ Graceful Shutdown and Power Off: ホストを正常にシャットダウンし、システムの電源を切断します。 ■ Power On: システムの電源を全投入します。 ■ Power Cycle: システムの電源をただちに切断した後、電源を再投入します。 「Save」をクリックします。 	Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「Power Control」ページで「More details」リンクをクリックします。
CLI	<p>次のいずれかのコマンドを入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ reset /SYSTEM: 電源を切断せずにサーバーをリセットします。 ■ stop /SYSTEM: ホストを正常にシャットダウンし、システムの電源を切断します。 ■ stop -f /SYSTEM: システムの電源をただちに切断します。 ■ start /System: システムの電源を全投入します 	<p>次のように入力します。</p> <p>help reset</p>

- 参照 ■ ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、「ホスト電源の制御」。

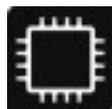
ブート順序の変更

このセクションでは、サーバーのブート方法を変更する手順について説明します。

ブート順序リストには、サーバーのブート元のデバイスが定められています。ブート順序リストを並べ替えることも、ブート順序リストでデバイスを選択して、次回のブート時にそのデバイスからブートすることもできます。

タスク	リンク
ブート順序リストの変更	63 ページの「ブート順序を変更する (BIOS)」
次のブートデバイスの選択	65 ページの「次のブートデバイスを設定する (Oracle ILOM)」

▼ ブート順序を変更する (BIOS)



ブート順序リスト内のデバイスの順序を変更するには、このタスクを使用します。

始める前に このタスクを実行するために、キーボードからコンソールにアクセスできることを確認してください。

1. **BIOS 設定ユーティリティにアクセスします。**
 - a. **システムをブートします。**

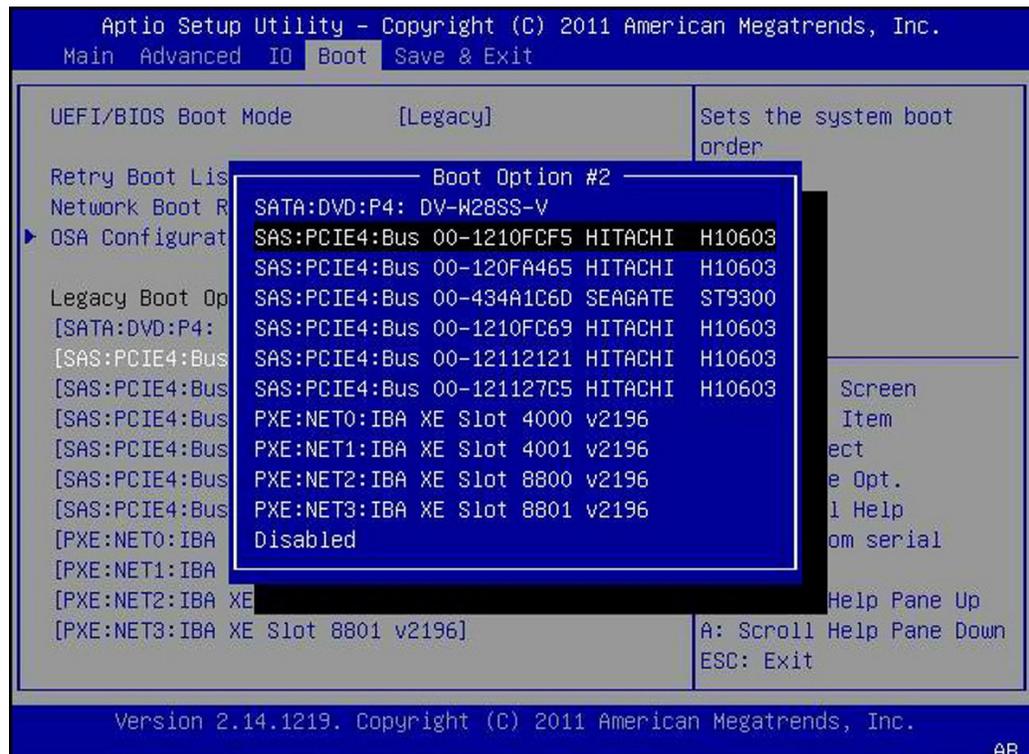
ブートメッセージがコンソール画面をスクロールして表示されます。
 - b. **F2 キー (またはシリアル端末からは Ctrl + E) を連続して押します。**

BIOS 設定ユーティリティのメイン画面が表示されます。

2. デバイスを移動するスロット番号を選択します。

たとえば、デバイスを 2 番目のスロットに移動させる場合は、リストの 2 番目の項目を選択します。

ダイアログボックスが表示されます。

**3. ダイアログボックスで、手順 2 で選択したスロットに移動させるデバイスを選択して、Enter を押します。**

ダイアログボックスが閉じます。選択したデバイスが指定されたスロットに移動し、BIOS は、その変更に対応するように残りのリストの順序を変更します。

4. F10 を押して変更内容を保存します。

ユーティリティから、変更内容を保存するか、変更内容を破棄して終了するかを求められます。

▼ 次のブートデバイスを設定する (Oracle ILOM)



サーバーで次のブートデバイスを設定する場合、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) を使用できます。Oracle ILOM で次のブートデバイスを設定すると、サーバーは、次回電源をリセットしたときに、選択したデバイスからブートします。それ以降の電源のリセットでは、サーバーは自動的にブート順序リストどおりのブートに戻ります。

次に、サーバーサービスプロセッサ (SP) に対する Web での手順とコマンド行インタフェースの手順の両方を記します。

- 始める前に
- Oracle ILOM にログインします。Oracle ILOM にアクセスしてログインする手順については、[46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」](#)を参照してください。
 - Oracle ILOM で Reset and Host Control (r) 役割特権を持っていることを確認します。
- **次回電源をリセットしたときのブートデバイスを設定するには、選択した Oracle ILOM ユーザーインタフェースに応じて、次の手順を実行します。**

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 「Host Management」>「Host Console」の順にクリックし、続いてブートデバイスを選択します。 「Save」をクリックします。 「Host Management」>「Power Control」の順にクリックし、「Power-Cycle」を選択します。 「Save」をクリックします。 	Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「Host Console」ページで「More details」リンクをクリックします。
CLI	<ol style="list-style-type: none"> 次のように入力します。 <code>set /HOST/boot_device=boot_device</code> ここで、<i>boot_device</i> は、<i>disk</i>、<i>floppy</i>、<i>bios</i>、<i>cdrom</i>、<i>pxe</i>、<i>diagnostics</i>、<i>default</i> のいずれかです。 次のように入力します。 <code>reset /System</code> 	<p>次のように入力します。</p> <p><code>help /HOST</code></p>

- 参照 ■ ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『*Oracle ILOM 構成および保守ガイド*、「x86 ホストサーバーの次回のブートデバイスの設定」。

ストレージリソースの構成

このセクションでは、RAID および iSCSI 仮想ドライブのプロパティを構成する手順について説明します。

- [67 ページの「RAID 構成オプション」](#)
- [80 ページの「UEFI ブートモードで iSCSI 仮想ドライブプロパティを変更する \(BIOS\)」](#)

RAID 構成オプション

RAID を構成する前に、ドライブスロットの装着と仮想ドライブの作成に関する Oracle の推奨事項を確認してください。詳細は、サーバーのドキュメントを参照してください。

このセクションでは、RAID アレイの構成に使用されるいくつかのツールについて説明します。

説明	リンク
Oracle System Assistant を使用して RAID を構成します。	68 ページの「RAID 用にハードウェアを構成する (Oracle System Assistant)」 オペレーティングシステムをインストールする前に、ブートドライブなどのドライブの準備に使用します。
Oracle HMP を使用して RAID を構成します。	71 ページの「RAID を構成する (Oracle HMP)」 ブートドライブでないかぎり、オペレーティングシステムをインストールしたあとで、サーバーに RAID ボリュームを作成し管理するために使用できます。
BIOS を使用して RAID を構成します。	72 ページの「RAID を構成する (BIOS)」

その他の RAID オプション

RAID には多くの種類があり、その構成に使用するツールが存在します。このセクションではその一部について説明します。その他の方法には次のものがあります。

- **LSI SAS2 2008 RAID 管理ユーティリティ** – SGX-SAS6-REM-Z などの一部の HBA に対して、sas2icru コマンドを使用します。

このツールは次からダウンロードできます。

http://www.lsi.com/sep/Pages/oracle/sg_x_sas6-rem-z.aspx

- **LSI MegaCLI or MegaRAID Storage Manager** – これらのユーティリティのどちらかを使用して、SGX-SAS6-R-REM-Z (名前に「R」があるので上記の HBA とは異なります) などの HBA 用の RAID ボリュームを作成および管理します。

これらのツールは次からダウンロードできます。

http://www.lsi.com/sep/Pages/oracle/sg_x_sas6-r-rem-z.aspx

関連項目:

- RAID の詳細については、HBA とハードウェアのドキュメントを参照してください。

▼ RAID 用にハードウェアを構成する (Oracle System Assistant)



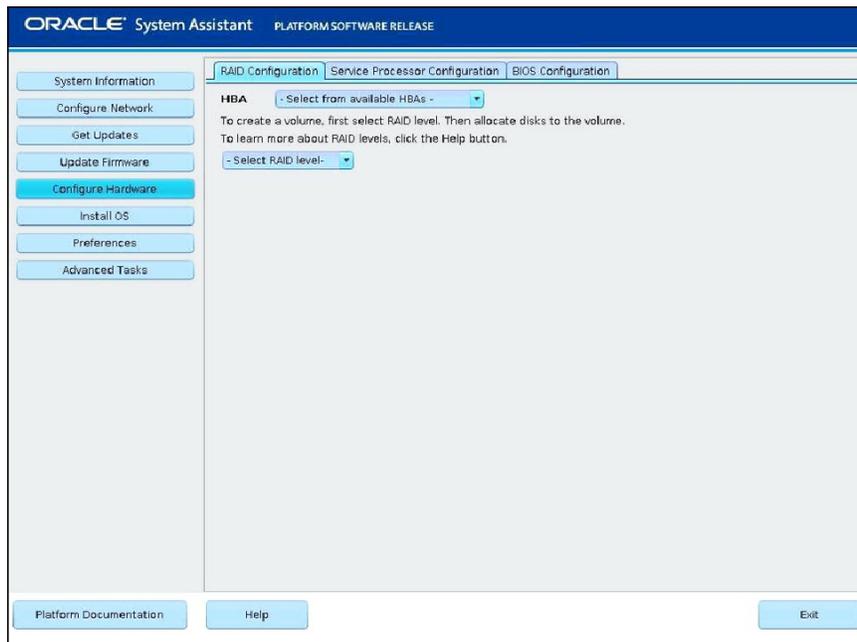
Oracle System Assistant の「RAID Configuration」画面では、サーバストレージドライブ用に RAID 0、RAID 1、RAID 5、または RAID 10 を構成できます。

注記 - このタスクは、オペレーティングシステムをインストールする前に実行します。

RAID ボリュームを構成するときは、ディスクが同じサイズで同じタイプ (SAS、SATA など) である必要があります。

始める前に ドライブのスロット装着と仮想ドライブの作成に関する Oracle の推奨事項を確認します。詳細は、サーバーのドキュメントを参照してください。

1. Oracle System Assistant にアクセスします。
詳細は、161 ページの「[Accessing Oracle System Assistant](#)」を参照してください。
2. 「Configure Hardware」をクリックし、「RAID Configuration」タブをクリックします。
「RAID Configuration」画面が表示されます。



3. 「HBA」リストボックスで、HBA ディスクコントローラが正しいことを検証します。
たとえば、サーバーは、SGX-SAS6-REM-Z Express Module や SGX-SAS6-R-REM-Z Express Module をサポートできます (ブート可能なボリュームを作成する場合)。これらの HBA の詳細については、サーバーハードウェアのドキュメントを参照してください。

注記 - HBA を選択したあと、「View Info」ボタンをクリックしてコントローラの詳細を確認します。この機能は Oracle System Assistant 1.1 では使用できません。

4. 「Select RAID Level」リストボックスで、RAID 0、RAID 1、RAID 5、または RAID 10 のいずれかの RAID レベルを選択します。

注記 - Oracle System Assistant を使用する場合は、これらの RAID レベルのみを設定できます。その他の RAID レベルを設定するには、HBA 設定ユーティリティーを使用します。

1 つのアレイで許可されるディスクの数は、コントローラによって異なります。次に例を示します。

- SGX-SAS6-REM-Z HBA は、2 台以上のディスクが必要であり、構成ユーティリティーを使用して構成されます。
- SGX-SAS6-R-REM-Z HBA は、1 台以上のディスクが必要であり、WebBIOS を使用して構成されます。

「Available Disks」テーブルが表示されます。

5. **「Available Disks」テーブルで、RAID 構成に追加するストレージドライブを選択します。**
ボリュームがすでにディスク上に存在する場合は、「Created Volumes」セクションに表示されます。必要に応じて、既存のボリュームを強調表示して削除します。

注記 - ディスクは、同じサイズおよびタイプ (SAS または SATA) でなければなりません。

6. **「Create Volume」ボタンをクリックします。**
「Creating RAID Volume」メッセージが表示されます。
7. **必要に応じて、ボリューム名を入力し、ストライプサイズを選択します。**
選択した場合、ボリューム名を空のままにして、あとから追加できます。
8. **「Create」ボタンをクリックします。**
ボリュームが作成されます。「Volume Details」ダイアログボックスに、強調表示されているボリュームに関する情報が表示されます。
9. **まだボリューム名を入力していない場合は「Volume Details」ボックスに入力し、「Save Changes」ボタンをクリックします。**
「RAID Configuration」画面が表示されます。これで RAID の構成が完了します。
10. **RAID ボリュームを削除するには、「RAID Configuration」画面でボリュームを選択してから、「Delete Volume」ボタンをクリックします。**
このアクションでは、既存のボリューム上のデータがすべて削除されます。
11. **ブート可能なボリュームを作成するには、次の手順を実行します。**

注記 - 使用しているディスクコントローラで、この機能がサポートされていないことがあります。

- a. 「RAID Configuration」画面で、ボリュームを選択します。
- b. そのボリュームに対して「Details」ボタンをクリックします。
- c. 「Set as Bootable」にチェックマークを付けます。
「RAID Configuration」画面には、ボリュームがブート可能であることが示されます。これでこのボリュームは、HBA のブートデバイスになりました。

12. 「Save Settings」をクリックします。

参照 ■ [161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)

▼ RAID を構成する (Oracle HMP)



Oracle Hardware Management Pack の `raidconfig` ツールでは、オペレーティングシステムのコマンド行から帯域内で RAID を構成できます。

- 始める前に
- HBA がサーバーでサポートされていることを検証し、ドライブスロット装着および仮想ドライブの作成に関する Oracle の推奨事項を確認します。詳細は、サーバーのドキュメントを参照してください。
 - UNIX ベースのプラットフォームのルート権限か Windows の管理者特権を持っていることを確認します。
 - Oracle Solaris では、`raidconfig` に `raidctl` CLI ツールとの互換性はありません。`raidconfig` では SAS2 がサポートされますが、`raidctl` ツールはサポートされません。
 - Oracle Solaris OS が動作しているサーバーの場合、任意のデバイスのホットプラグを行ったあとに、`devfsadm -c` コマンドを実行してシステムのすべてのデバイスノードを再列挙してから、`raidconfig` コマンドを実行します。

このコマンドは、一部の構成をサポートしていません。詳細は、次を参照してください。

<http://www.oracle.com/goto/OHMP/docs>

● コマンド行から、次を入力します。

```
raidconfig subcommand
```

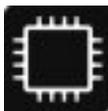
ここで、*subcommand* は、次のいずれかになります。

- list: コントローラ、RAID ボリューム、およびディスクについての情報を一覧表示します。
RAID ボリュームに属さないディスクも含みます。特定のデバイスを選択して表示できます。
- create: RAID ボリュームを作成します。
- delete: RAID ボリュームを削除します。
- add: 指定されたディスクまたはスペアを追加します。
- remove: 指定されたディスクまたはスペアを削除します。
- modify: RAID ボリュームまたはディスクを変更します。
- start: 保守タスクを開始します。
- stop: 保守タスクを停止します。
- restore: ディスクに保存されている RAID 構成を検索し、復元します。
- clear: 定義されたコントローラのディスクに保存されている RAID 構成をクリアします。
- export: RAID の構成から XML ファイルを生成します。
- import: RAID の構成を読み取って、RAID ボリュームとスペアを作成します。

詳細は、次を参照してください。

<http://www.oracle.com/goto/OHMP/docs>

▼ RAID を構成する (BIOS)



BIOS 設定ユーティリティから RAID を構成するには、このタスクを使用します。

詳細は、ハードウェアのドキュメントおよびオペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。

始める前に HBA がサーバーでサポートされていることを検証し、ドライブスロット装着および仮想ドライブの作成に関する Oracle の推奨事項を確認します。詳細は、サーバーのドキュメントを参照してください。

1. BIOS 設定ユーティリティにアクセスします。
 - a. システムをブートします。

ブートメッセージがコンソール画面をスクロールして表示されます。
 - b. F2 キー (またはシリアル端末からは Ctrl + E) を連続して押します。

BIOS 設定ユーティリティのメイン画面が表示されます。
2. 「IDE Configuration」メニューに移動します。
3. 「SATA Options」を選択し、「RAID」を選択してから F10 を押します。

システムがリブートします。
4. Ctrl+I を押します。

「Intel Matrix Storage Manager option ROM」ダイアログボックスが表示されます。
5. 必要に応じて RAID ボリュームを作成するか構成し、「EXIT」を選択します。

確認ダイアログボックスが表示されたあと、RAID ボリュームが構成されます。
6. F10 を選択して、変更内容を保存して終了します。

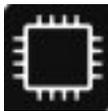
iSCSI 仮想ドライブプロパティーの変更

このセクションでは、BIOS 設定ユーティリティの iSCSI 画面を使用して iSCSI 仮想ドライブを構成する方法について説明します。Legacy ブートモードを使用するように構成されたシステムと UEFI ブートモードを使用するように構成されたシステムの個別の手順が含まれます。

- [74 ページの「Legacy ブートモードで iSCSI 仮想ドライブプロパティーを変更する \(BIOS\)」](#)
- [80 ページの「UEFI ブートモードで iSCSI 仮想ドライブプロパティーを変更する \(BIOS\)」](#)

iSCSI 仮想ドライブは、ローカルサーバーホストオペレーティングシステムとして機能する、外部サーバーに搭載されたサポート対象オペレーティングシステムを実行するために主に使用されません。

▼ Legacy ブートモードで iSCSI 仮想ドライブプロパティを変更する (BIOS)



- 始める前に
- iSCSI 動作理論と iSCSI サーバーの設定手順を理解しておいてください。
 - オペレーティングシステムのドキュメントを参照して、iSCSI ターゲットをクライアントでマウントできることを検証してください。
 - サポート対象のオペレーティングシステムで実行している外部 iSCSI サーバーにアクセスできることを確認してください。
 - サーバーは、UEFI ブートモードではなく Legacy ブートモードである必要があります。UEFI ブートモードのサーバーの場合は、[80 ページの「UEFI ブートモードで iSCSI 仮想ドライブプロパティを変更する \(BIOS\)」](#)を使用してください。
 - iSCSI ターゲットパラメータを用意します。次の表に例を示します。

項目	例
ターゲット名	iqn.1988-12.com.oracle:platform-target
iSCSI イニシエータ名	iqn.1988-12.com.oracle:0010E02E458F
注記 - iSCSI では、イニシエータおよびターゲットの名前は iSCSI 修飾名 (iqn) 形式で指定する必要があります。	
論理ユニット番号	LUN 0
iSCSI サーバーの IP アドレス	192.167.1.24 (IPv4)
ポート番号	3260

1. BIOS 設定ユーティリティにアクセスします。
 - a. システムをブートします。

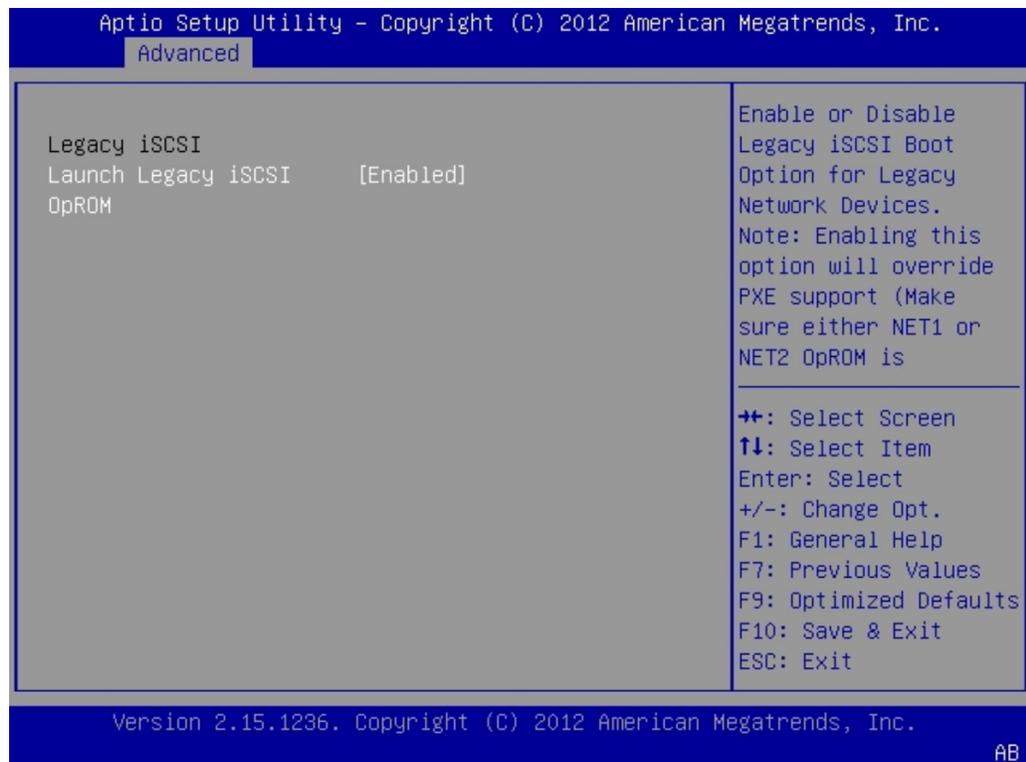
ブートメッセージがコンソール画面をスクロールして表示されます。

- b. F2 キー (またはシリアル端末からは Ctrl + E) を連続して押します。

BIOS 設定ユーティリティのメイン画面が表示されます。

2. 「Advanced」を選択してから、「Legacy iSCSI」を選択します。

「Launch Legacy iSCSI」ウィンドウが表示されます。



3. 「Launch Legacy iSCSI OpROM」を選択し、「Enable」を選択します。

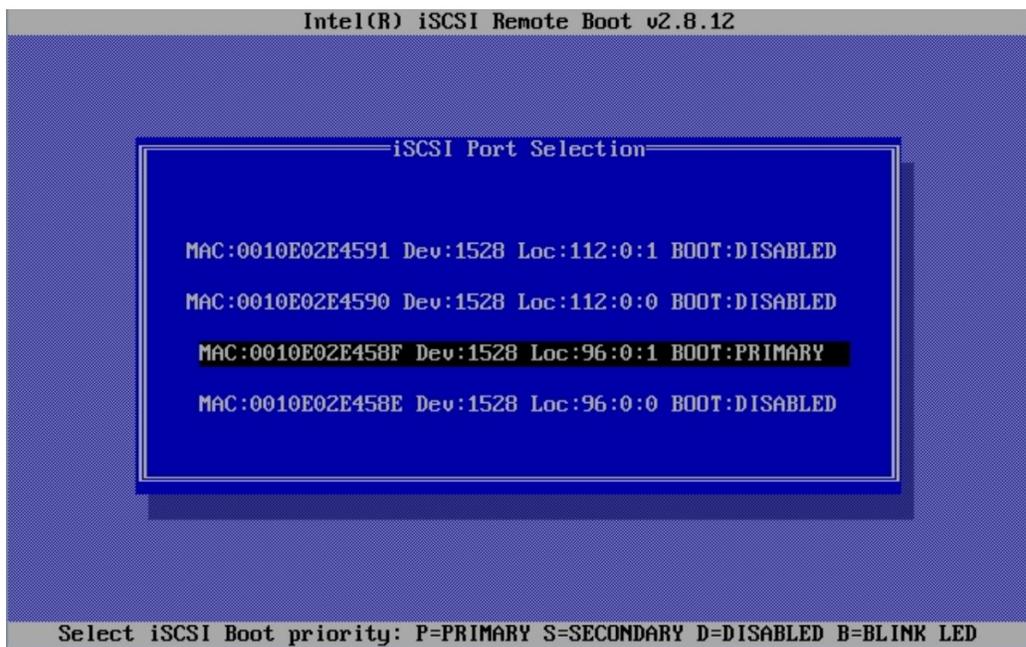
4. F10 を押します。

システムがブートします。POST メッセージが表示されます。

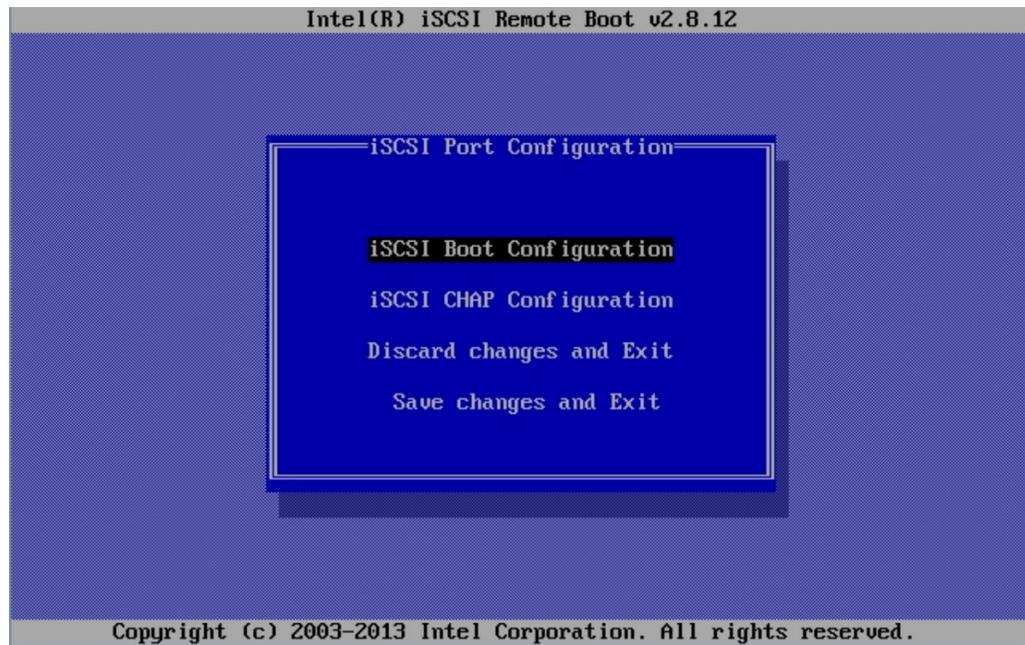
5. 次のメッセージが表示されたら、Ctrl+D を数回押して、iSCSI オプション ROM にアクセスします。

```
Intel(R) iSCSI Remote Boot version 2.8.12
Copyright (c) 2003-2013 Intel Corporation. All rights reserved.
Press ESC key to skip iSCSI boot initialization.
Press <Ctrl-D> to run setup..._
```

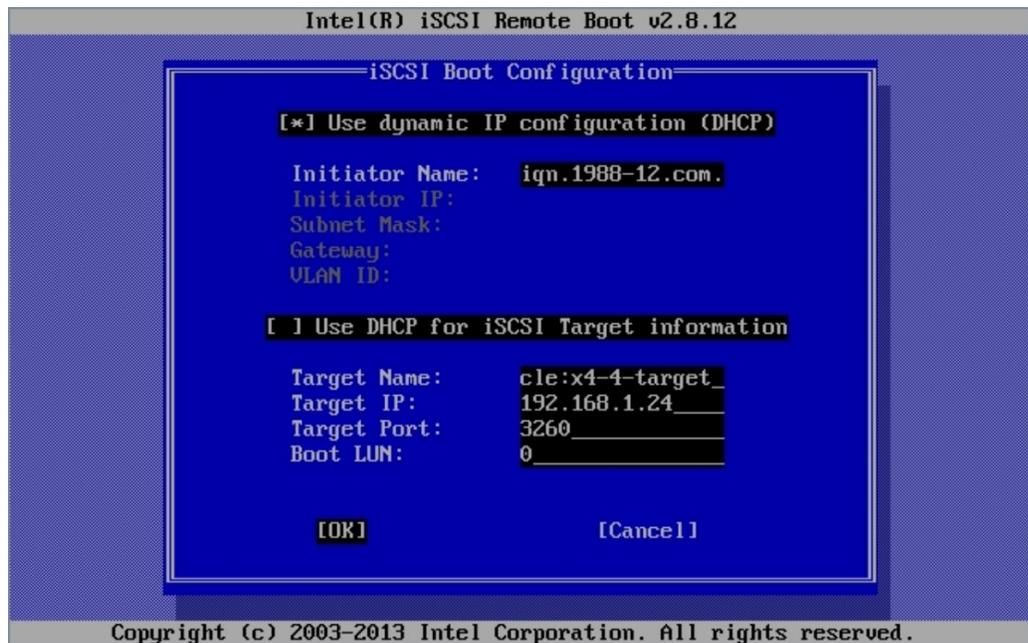
「iSCSI Port Selection」画面が表示されます。次の図に例を示します。



6. iSCSI サーバーで構成されたネットワークアダプタの MAC アドレスを選択し、「P」と入力してその状態を「Boot:PRIMARY」に変更します。
7. Return を押して、iSCSI 構成用のネットワークアダプタの MAC アドレスを入力します。
「iSCSI Port Configuration」ウィンドウが表示されます。

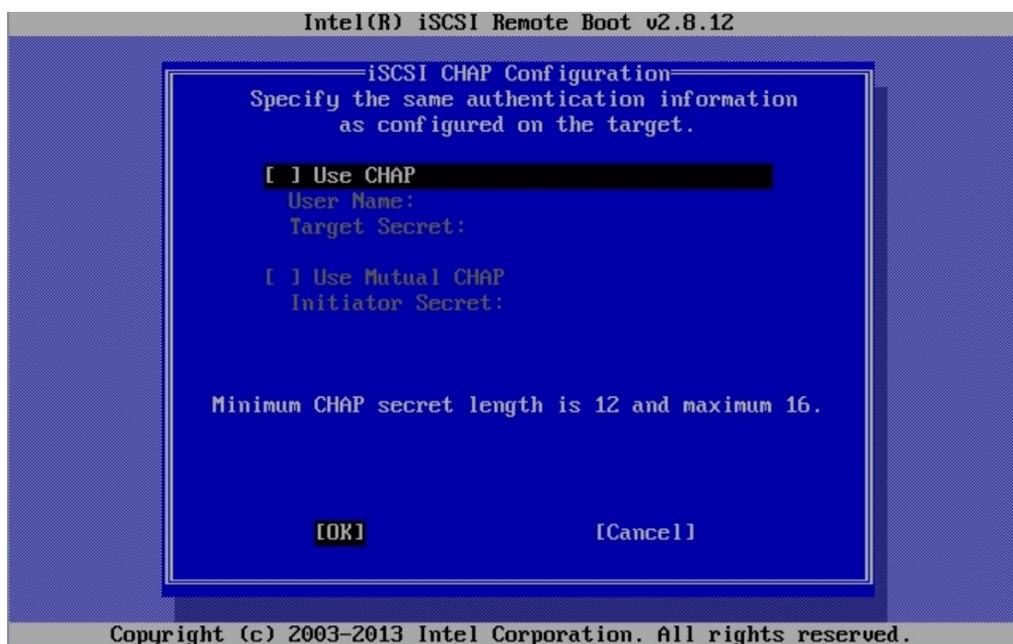


8. 「iSCSI Boot Configuration」を選択します。
「iSCSI Boot Configuration」ウィンドウが表示されます。



9. 次の手順を実行します。
 - a. 「Use dynamic IP Configuration (DHCP)」を選択または選択解除することによって、DHCP を使用する (または使用しない) ようにイニシエータを構成します。
 - b. イニシエータ名は iSCSI 修飾名 (iqn) 形式で入力します。次に例を示します。
`iqn.1988-12.com.oracle:0010e02e458f`
 - c. イニシエータが DHCP を使用しない場合、ほかのネットワーク情報を入力します。
イニシエータが DHCP を使用する場合は、これらの選択は利用できません。
 - d. DHCP で iSCSI ターゲットパラメータを提供する場合は、「Use DHCP for iSCSI Target information」を選択します。
これ以外の場合は、「Target IP」、「Target Port」、および「Boot LUN」に入力します。
 - e. ターゲット名を iSCSI 修飾名 (iqn) 形式で入力します。

- f. ターゲットが DHCP を使用しない場合、「Target IP」、「Target Port」、および「Boot LUN」に入力します。
 - g. 「OK」を選択します。
「iSCSI Port Configuration」ウィンドウが表示されます。
10. 「iSCSI CHAP Configuration」を選択します。
「iSCSI CHAP Configuration」ウィンドウが表示されます。



11. 次の項目を入力します。
- a. 次のいずれかの CHAP オプションを選択します。
 - CHAP を使用する場合は、「User Name」と「Target Secret」に入力します。
 - 相互 CHAP を使用する場合は、「Initiator Secret」に入力します。
 - CHAP サービスを利用できない場合は、「Cancel」を選択します。

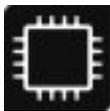
b. 「OK」を選択します。

「iSCSI Port Configuration」ウィンドウが表示されます。

12. 「Save changes and Exit」を選択します。

- 参照
- 206 ページの「BIOS 設定ユーティリティーのメニューにアクセスする」
 - 216 ページの「UEFI または Legacy ブートモード (BIOS) を選択する」

▼ UEFI ブートモードで iSCSI 仮想ドライブプロパティを変更する (BIOS)



UEFI ブートモードを使用するように構成されたシステムで、iSCSI BIOS 設定ユーティリティーの画面を使用して iSCSI 仮想ドライブを構成するには、このタスクを使用します。

iSCSI 仮想ドライブは、ローカルサーバーホストオペレーティングシステムとして機能する、外部サーバーに搭載されたサポート対象オペレーティングシステムを実行するために主に使用されます。

iSCSI 仮想ドライブは、UEFI BIOS 設定ユーティリティーの iSCSI 画面で構成する必要があります。

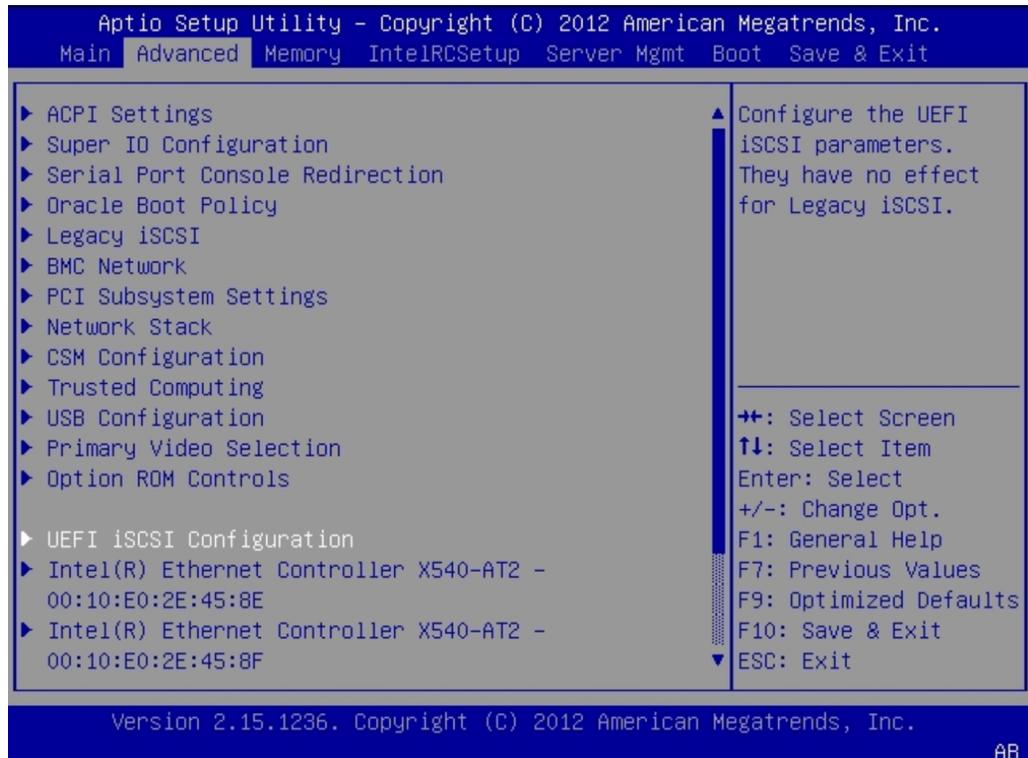
- 始める前に
- iSCSI 動作理論と iSCSI サーバーの設定手順を理解しておいてください。
 - オペレーティングシステムのドキュメントを参照して、iSCSI ターゲットをクライアントでマウントできることを検証してください。
 - サポート対象のオペレーティングシステムで実行している外部 iSCSI サーバーにアクセスする必要があります。
 - サーバーは、Legacy ブートモードではなく UEFI ブートモードである必要があります。216 ページの「UEFI または Legacy ブートモード (BIOS) を選択する」を参照してください。
 - iSCSI ターゲットパラメータを指定する必要があります。次の表に例を示します。

項目	例
ターゲット名	iqn.1988-12.com.oracle:platform-target
iSCSI イニシエータ名	iqn.1988-12.com.oracle:0010E02E458F
注記 - iSCSI では、イニシエータおよびターゲットの名前は iSCSI 修飾名 (iqn) 形式で指定する必要があります。	
論理ユニット番号	LUN 0
iSCSI サーバーの IP アドレス	192.167.1.24 (IPv4)
ポート番号	3260

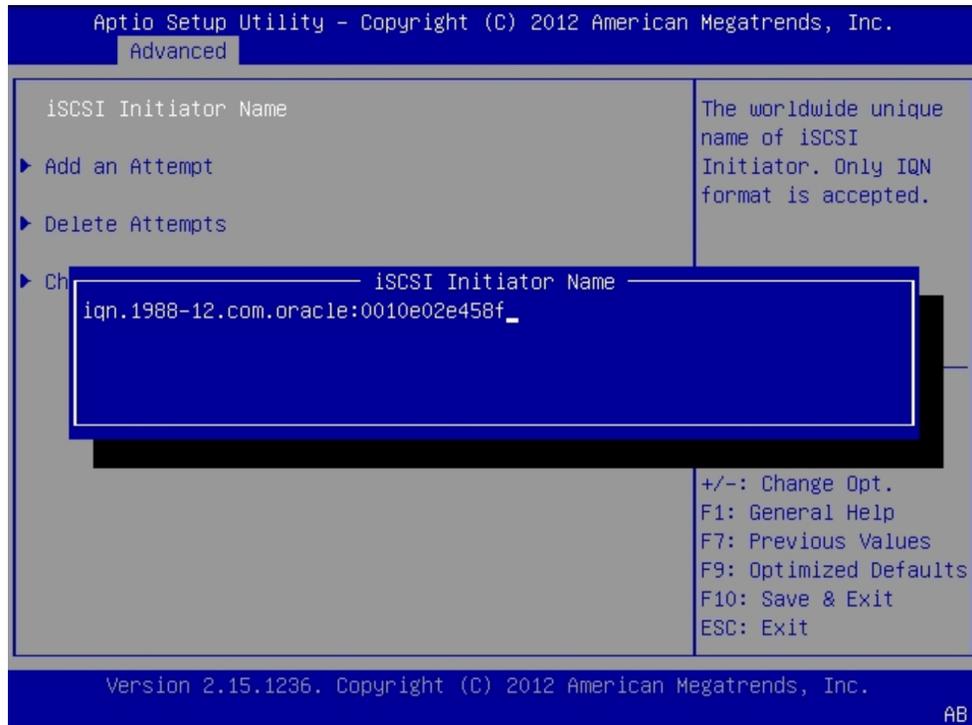
1. BIOS 設定ユーティリティにアクセスします。
 - a. システムをブートします。
ブートメッセージがコンソール画面をスクロールして表示されます。
 - b. F2 キー (またはシリアル端末からは Ctrl + E) を連続して押します。
BIOS 設定ユーティリティのメイン画面が表示されます。
2. BIOS 設定ユーティリティのメニューで「Advanced」を選択します。

注記 - Legacy ブートモードが有効になっていないことを確認します。

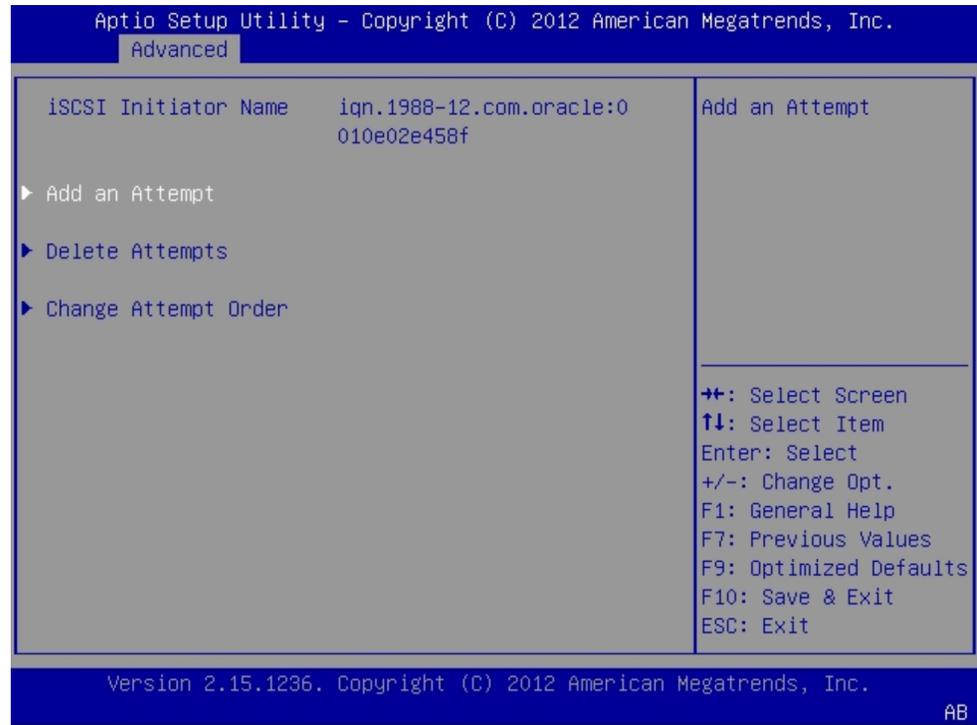
制御可能なすべてのデバイスを記したリストが表示されます。



3. iSCSI 画面にアクセスするには、「UEFI iSCSI Configuration」を選択します。
「UEFI Driver Control」画面が表示されます。
4. iSCSI イニシエータ名を入力します。
 - a. 「iSCSI Initiator Name」を選択します。
「iSCSI Initiator Name」ダイアログボックスが表示されます。



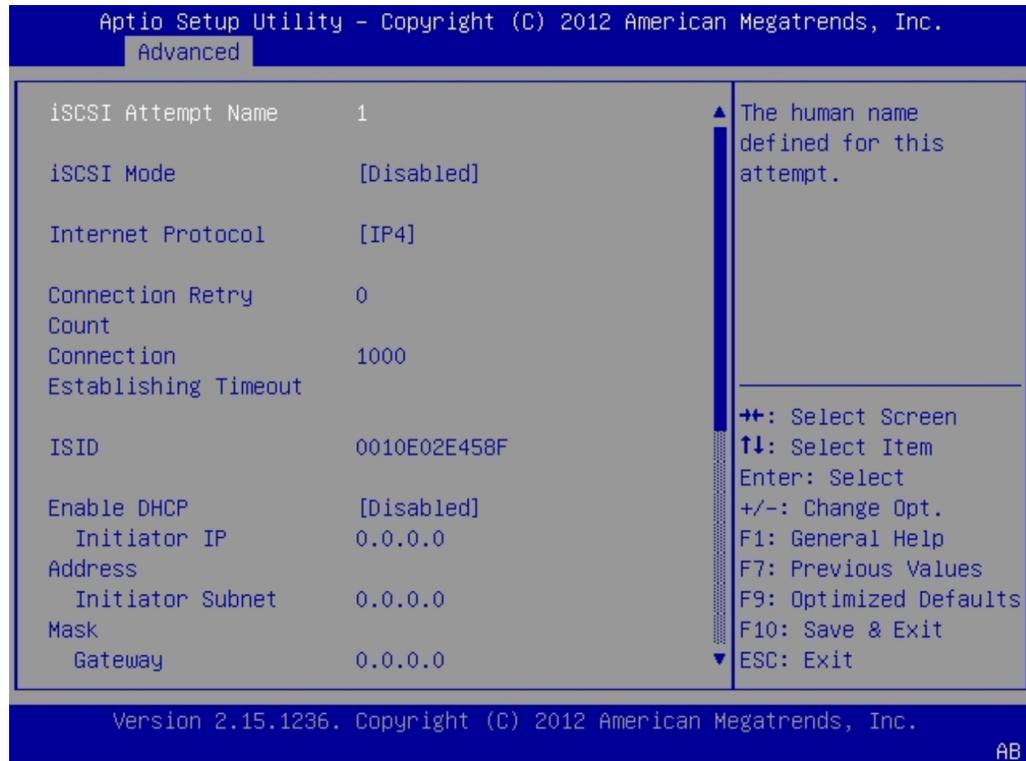
- b. イニシエータ名は iSCSI 修飾名 (iqn) 形式で入力します。次に例を示します。
`iqn.1988-12.com.oracle:0010e02e458f`
5. 「Add an Attempt」を選択し、続いて次の手順を実行します。
 - a. 最初の iSCSI NIC ポートの MAC アドレスを選択します。



6. iSCSI ドライブに接続するには、たとえば次のように、適切な NIC ポートの MAC アドレスを選択します。

0010e02e458f

ポート構成画面が表示されます。



7. 次の値を設定します。

- a. 「iSCSI Mode」を「Enabled」に設定します。
- b. 「Internet Protocol」を「IPv4」に設定します。
- c. 「Connection Retry Count」を 1 に設定します。
- d. 必要に応じて、「Enable DHCP」の値を「Enabled」または「Disabled」に設定します。
「Enabled」を推奨します。

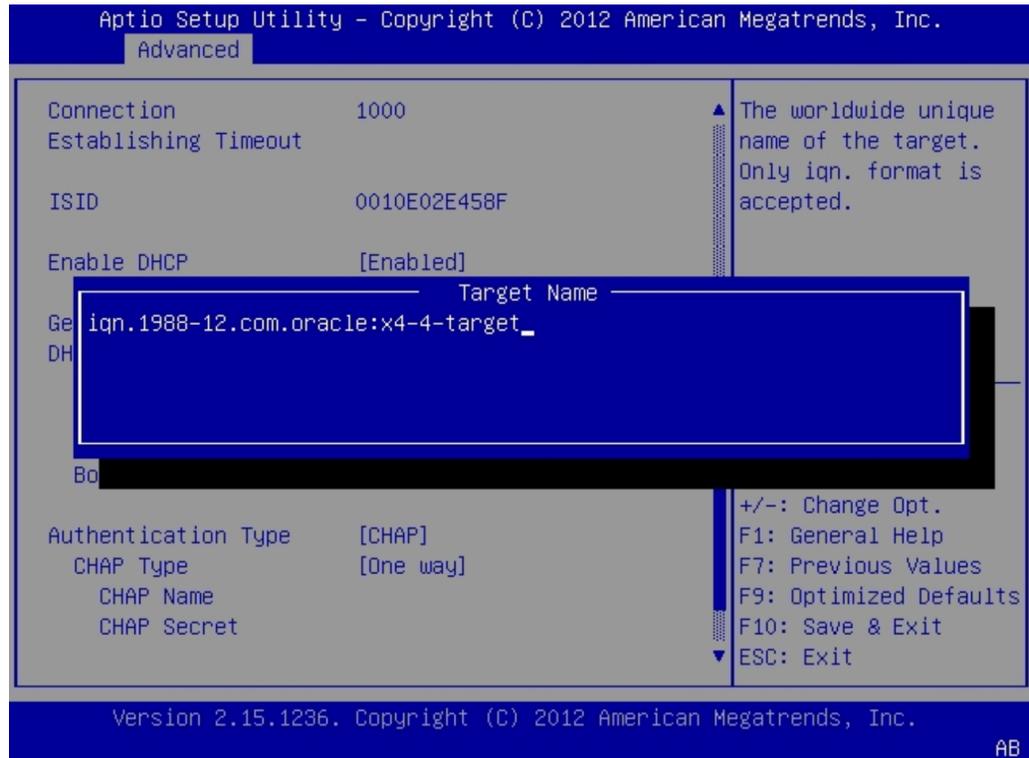
DHCP が有効な場合、イニシエータ IP アドレス、イニシエータサブネットマスク、ゲートウェイの設定は削除されます。

- e. DHCP を無効に設定した場合、次の手順を実行します。

- イニシエータ IP アドレスを入力します。
- イニシエータサブネットマスクを入力します。
- ゲートウェイを入力します。

注記 - 同じサブネットを使用してください。

8. ターゲット名を設定します。



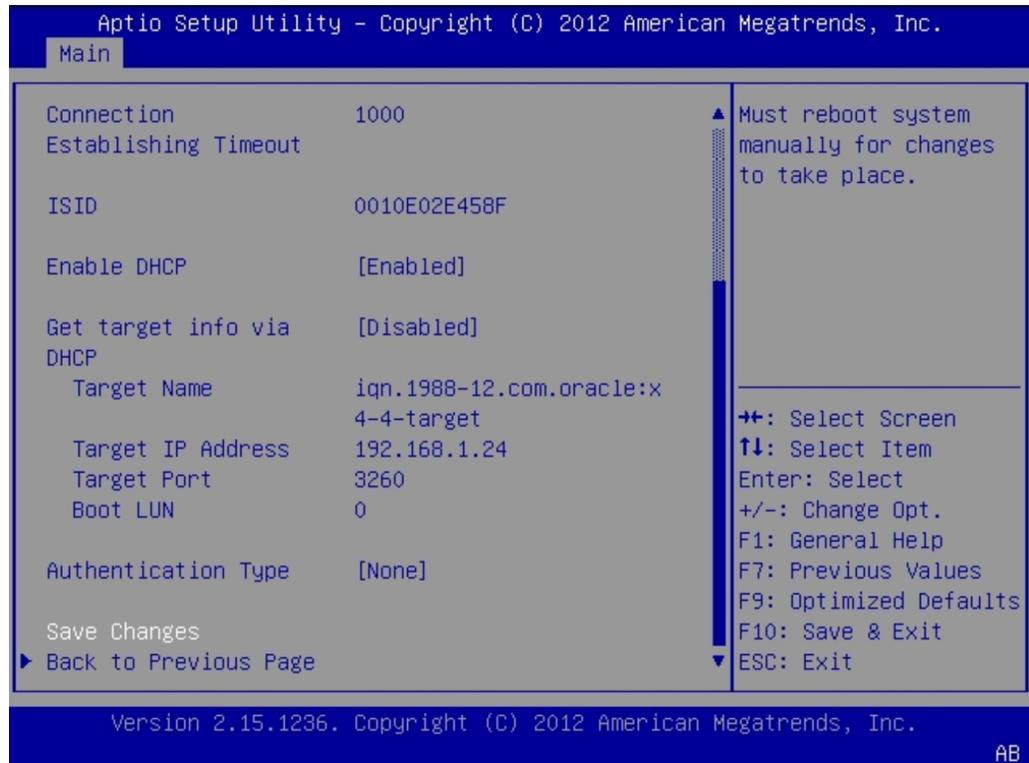
- a. 「Target Name」を選択します。
「Target Name」ダイアログボックスが表示されます。
- b. ターゲットの iSCSI 修飾名 (iqn) を入力します。次に例を示します。

`iqn.1988-12.com.oracle:platform-target`

9. iSCSI サーバーの IP アドレスを設定します。
 - a. 「Target IP address」を選択します。
「Target IP address」ダイアログボックスが表示されます。
 - b. iSCSI サーバーのターゲット IP アドレスをドット区切りの 10 進表記で、たとえば次のように入力します。
`192.168.1.24.`
10. ターゲットポートを設定します。
 - a. 「Target port」を選択します。
 - b. iSCSI サーバーのターゲットポートを、たとえば次のように入力します。
`3260.`

注記 - ネットワークポートで iSCSI が有効にされると、そのポートで PXE は無効になります。

11. 論理ユニット番号を設定します。
 - a. 「Boot LUN」を選択します。
「Boot LUN」ダイアログボックスが表示されます。
 - b. 論理ユニット番号を入力します。例: `0`
12. 設定が iSCSI サーバーの iSCSI ターゲット情報と一致することを検証します。



13. 「Authentication Type」を「CHAP」または「None」に設定します。
14. 変更を保存し、BIOS 設定ユーティリティを終了します。
15. サーバーを再起動します。
16. BIOS による電源投入時自己診断 (POST) チェックポイントの実行中にプロンプトが表示されたら、F8 キー (シリアル接続からは Ctrl+P) を押します。
「Please Select Boot Device」ダイアログボックスが表示されます。
17. iSCSI ターゲットエントリがブートリストに表示されることを検証します。
18. iSCSI ドライブにオペレーティングシステムをインストールする手順については、サポート対象のオペレーティングシステムのインストールドキュメントを参照してください。

参照 ■ [206 ページの「BIOS 設定ユーティリティのメニューにアクセスする」](#)

- [216 ページの「UEFI または Legacy ブートモード \(BIOS\) を選択する」](#)

サーバー管理のための初期設定アクションの実行

このセクションでは、サーバー管理ツールを構成するための手順を示します。説明項目は次のとおりです。

セクション	タスクおよびツール
92 ページの「システム識別情報の割り当て」	93 ページの「システム識別情報を割り当てる (Oracle System Assistant)」 94 ページの「システム識別情報を割り当てる (Oracle ILOM)」 96 ページの「システム識別情報を割り当てる (Oracle HMP)」
ネットワークインタフェースの設定を構成します。 注記 - このタスクが別のセクションにあるのは、Oracle System Assistant をネットワーク更新向けに準備するために使用されるからです。	181 ページの「ネットワークインタフェース設定を構成する (Oracle System Assistant)」
96 ページの「Oracle ILOM のネットワーク設定の構成」	96 ページの「SP のネットワーク設定を構成する (Oracle System Assistant)」 99 ページの「SP または CMM のネットワーク設定を構成する (Oracle ILOM)」 101 ページの「SP のネットワークアドレスを構成する (BIOS)」
102 ページの「Oracle ILOM ユーザーアカウントの追加」	103 ページの「Oracle ILOM ユーザーアカウントを追加、変更、または削除する (Oracle System Assistant)」 105 ページの「SP または CMM のローカルユーザーアカウントを追加する (Oracle ILOM)」
106 ページの「SP のクロックプロパティの設定」	106 ページの「SP のクロックプロパティを設定する (Oracle System Assistant)」 108 ページの「SP のクロックプロパティを設定する (Oracle ILOM)」

セクション	タスクおよびツール
109 ページの「SP の DNS を構成する (Oracle System Assistant)」	該当なし
111 ページの「構成管理 (Oracle System Assistant)」	該当なし
113 ページの「Oracle HMP のダウンロード」	113 ページの「Oracle HMP をダウンロードする (Oracle System Assistant)」 113 ページの「My Oracle Support から Oracle HMP をダウンロードする (MOS)」
114 ページの「TPM プロパティを構成する (BIOS)」	該当なし

次の各タスクは、Oracle System Assistant の「Service Processor Configuration」ページ上の単一のドロップダウンリストを使って完了させることができます。

- 93 ページの「システム識別情報を割り当てる (Oracle System Assistant)」
- 96 ページの「SP のネットワーク設定を構成する (Oracle System Assistant)」
- 103 ページの「Oracle ILOM ユーザーアカウントを追加、変更、または削除する (Oracle System Assistant)」
- 106 ページの「SP のクロックプロパティを設定する (Oracle System Assistant)」
- 109 ページの「SP の DNS を構成する (Oracle System Assistant)」
- 111 ページの「構成管理 (Oracle System Assistant)」
- 113 ページの「Oracle HMP をダウンロードする (Oracle System Assistant)」

システム識別情報の割り当て

システム識別情報は、Oracle ILOM 内に格納されますが、システム全体の側面を識別する目的で使用されます。説明項目は次のとおりです。

- ホスト名 – Oracle ILOM に割り当てられる名前
- システム識別子 – システムに関する追加情報
- システムの連絡先 – システムに関する問題の連絡先となる人
- システムの場所 – システムの物理的な場所を記述する文字列

これらの項目を変更するには、Oracle System Assistant、Oracle ILOM、Oracle HMP のいずれかを使用します。

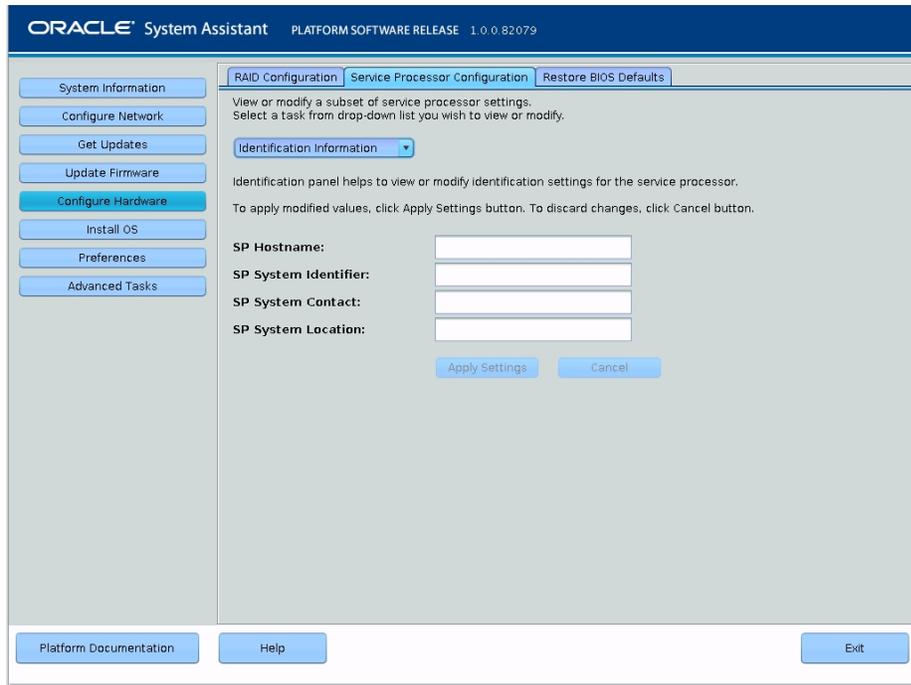
- [93 ページの「システム識別情報を割り当てる \(Oracle System Assistant\)」](#)
- [94 ページの「システム識別情報を割り当てる \(Oracle ILOM\)」](#)
- [96 ページの「システム識別情報を割り当てる \(Oracle HMP\)」](#)

▼ システム識別情報を割り当てる (Oracle System Assistant)



サーバーの識別情報を変更するには、Oracle System Assistant を使用します。

1. **Oracle System Assistant にアクセスします。**
詳細は、[161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)を参照してください。
2. 「Configure Hardware」を選択し、「Service Processor Configuration」タブをクリックします。
3. ドロップダウンリストから「Identification Information」をクリックします。
「Identification Information」ビューが表示されます。



4. 次の情報を必要に応じて変更します。

- SP Hostname
- System Identifier
- SP System Contact
- SP System Location

5. 「Apply Settings」をクリックします。

▼ システム識別情報を割り当てる (Oracle ILOM)



Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) を使って Oracle システムの配備や管理を行う際に、オプションでシステムに識別ラベルを割り当てることができます。このタスクの詳細については、次の手順を参照してください。

始める前に

- Oracle ILOM を起動します。Oracle ILOM を起動する手順については、44 ページの「[Oracle ILOM へのアクセス](#)」を参照してください。
- ホスト名、システム識別子、システム連絡先、およびシステムの場合の構成に必要な情報を収集します。
- この手順では、Oracle ILOM の管理者 (a) 役割特権が必要となります。

次の手順では、サーバーサービスプロセッサ (SP) とシャーシモニタリングモジュール (CMM) の両方に対する Web インタフェース手順とコマンド行インタフェース (CLI) 手順を示します。

- **サーバー識別ラベルを設定するには、望ましい Oracle ILOM ユーザーインタフェースで次の手順に従います。**

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 「ILOM Administration」>「Identification」をクリックします。 適切な識別ラベルを設定したあと、「Save」をクリックします。 	Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「Identification」ページで「 <i>More details</i> 」リンクをクリックします。
CLI	<ol style="list-style-type: none"> 識別ラベルを表示するには、次を入力します。 <code>show /[SP/CMM]</code> <code>set</code> コマンドを発行してシステム識別ラベルを設定します。 次に例を示します。 <code>set /[SP/CMM] hostname=[hostname]</code> <code>system_identifier=[id] system_contact=[name]</code> <code>system_location=[building_floor_lab]</code> 	次のように入力します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ <code>help /[SP/CMM] hostname</code> ■ <code>help /[SP/CMM] system_identifier</code> ■ <code>help /[SP/CMM] system_contact</code> ■ <code>help /[SP/CMM] system_location</code>

- 参照
- ファームウェア 3.1 の *Oracle ILOM クイックスタートガイド* または ファームウェア 3.2 の『*Oracle ILOM スタートガイド*』の識別ラベルの設定

▼ システム識別情報を割り当てる (Oracle HMP)



オペレーティングシステムのコマンド行からシステム識別情報を変更するには、Oracle HMP を使用します。

- **ilomconfig modify identification** コマンドを使って次のパラメータを変更します。
 - SP Hostname
 - System Identifier
 - SP System Contact
 - SP System Location

参照 詳細は、<http://www.oracle.com/goto/OHMP/docs> にある Oracle Hardware Management Pack ドキュメントライブラリを参照してください。

Oracle ILOM のネットワーク設定の構成

次の各タスクでは、Oracle ILOM でネットワークにアクセスする際に使用されるネットワーク設定を構成します。これらは次のとおりです。

- 96 ページの「SP のネットワーク設定を構成する (Oracle System Assistant)」
- 99 ページの「SP または CMM のネットワーク設定を構成する (Oracle ILOM)」
- 101 ページの「SP のネットワークアドレスを構成する (BIOS)」

▼ SP のネットワーク設定を構成する (Oracle System Assistant)



始める前に Oracle ILOM のネットワーク情報 (DHCP 設定や IP アドレスなど) を取得します。

1. Oracle System Assistant にアクセスします。

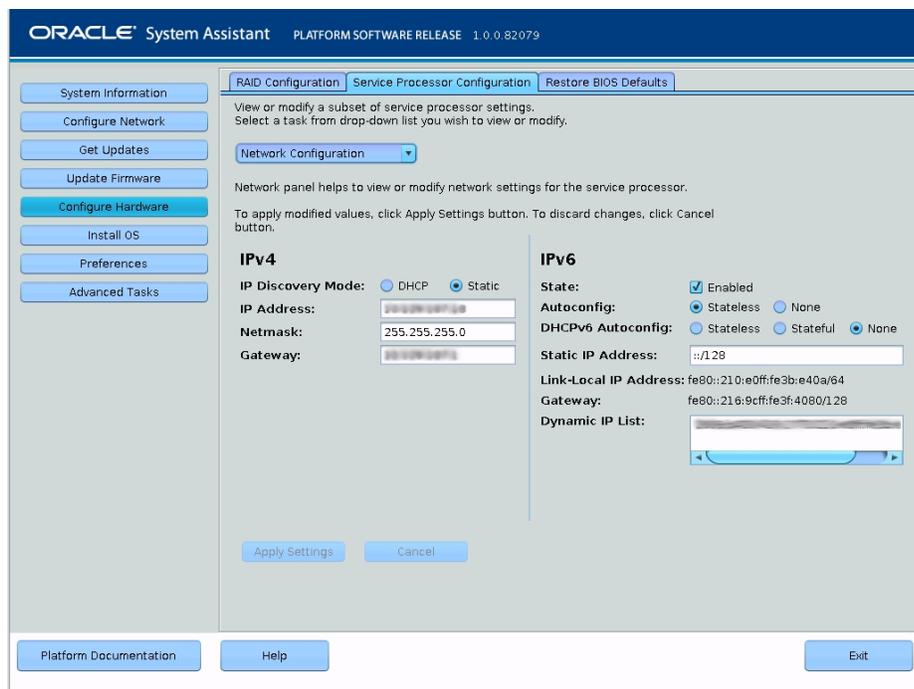
詳細は、161 ページの「[Accessing Oracle System Assistant](#)」を参照してください。

2. 「Configure Hardware」をクリックし、「Service Processor Configuration」タブをクリックします。

「Service Processor Configuration」画面が表示されます。

3. ドロップダウンリストから「Network Configuration」を選択します。

「Network Configuration」が表示されます。



4. ネットワーク設定を必要な値に設定します。

■ IPv4 では次の値を入力します。

a. IP Discovery Mode

動的ホスト構成プロトコル (DHCP) と静的 IP の割り当てのどちらをシステムで使用するのを選択します。

b. IP Address

静的 IP の割り当てを選択した場合は、SP の IP アドレスを指定します。

c. Netmask

静的 IP の割り当てを選択した場合は、SP のネットマスクを指定します。

d. Gateway

静的 IP の割り当てを選択した場合は、SP のゲートウェイアドレスを指定します。

■ **IPv6 では次の値を入力します。**

a. State

「Enabled」チェックボックスをクリックすると、IPv6 ネットワーク設定が有効になります。

b. Autoconfig

有効にすると、IPv6 ステートレス自動構成により、IPv6 アドレスが学習されます。

c. DHCPv6Autoconfig

有効にすると、DHCPv6 ステートレス自動構成により、DNS とドメイン情報が学習されます。

有効にすると、DHCPv6 ステートフル自動構成により、IPv6 アドレスと DNS 情報が学習されます。

有効にすると、「None」状態により、Oracle ILOM のリンクローカルアドレスのみが設定されます。

d. Static IP Address

これは、SP の静的 IP アドレスです。

e. Link-Local IP Address

これはルーティングの宛先とならないアドレスであり、同じネットワーク上の別の IPv6 対応ノードから SP に接続するために使用できます。

f. **Gateway**

これは、IPv6 のゲートウェイアドレスです。

g. **Dynamic IP List**

このフィールドは読み取り専用です。Oracle System Assistant では、これらの値を Oracle ILOM から取得します。

5. 完了したら、「Apply Settings」をクリックします。

一部の変更はすぐに適用されます。その他は次のブートまで適用できません。

▼ SP または CMM のネットワーク設定を構成する (Oracle ILOM)



Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) を使って Oracle システムの配備や管理を行う際に、オプションで、サービスプロセッサ (SP) またはシャーシモニタリングモジュール (CMM) で提供されるデフォルトのネットワーク設定を変更することができます。CMM はサーバーモジュール (ブレード) でのみ使用されます。

このタスクの詳細については、次の手順を参照してください。

始める前に

- Oracle ILOM を起動します。詳細については、[44 ページの「Oracle ILOM へのアクセス」](#)を参照してください。
- Oracle ILOM の管理者 (a) ユーザー役割特権を持っていることを確認します。
- IPv4 ネットワーク環境では、IP 発見モードプロパティはデフォルトで DHCP に設定されています。

- IPv6 ネットワーク環境では、自動構成プロパティはデフォルトでステートレスに設定されています。

次の手順では、サーバーサービスプロセッサ (SP) とシャーシモニタリングモジュール (CMM) の両方に対する Web インタフェース手順とコマンド行インタフェース (CLI) 手順を示します。

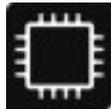
- デフォルトのネットワーク設定を変更するには、望ましい Oracle ILOM ユーザーインタフェースで次の手順に従います。

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「ILOM Administration」>「Connectivity」>「Network」をクリックします。 2. 「Network Settings」ページの設定を必要に応じて変更したあと、「Save」をクリックします。 	<p>Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「Network Settings」ページで「More details」リンクをクリックします。</p>
CLI	<ol style="list-style-type: none"> 1. 割り当てられたネットワーク設定を表示するには、次のように入力します。 <pre>show /[SP/CMM]/network show /[SP/CMM]/network/ipv6</pre> 2. IPv4 ネットワークプロパティを変更するには、set コマンドを発行します。 次に例を示します。 <pre>set /[SP/CMM]/network state=[enabled disabled] pendingipdiscovery=[static dhcp] pendingipaddress=[address] pendingipgateway=[address] pendingipnetmask=[address] commit_pending=true</pre> 3. IPv6 ネットワークプロパティを変更するには、set コマンドを発行します。 次に例を示します。 <pre>set /[SP/CMM]/network/ipv6 state=[enabled disabled] autoconfig=[disabled stateless dhcpv6_stateful dhcpv6_stateless] dhcpv6_server_duid=[address] link_local_ipaddress=[address] static_ipaddress=[address] ipgateway=[address]</pre> 	<p>次のように入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ <code>help /[SP/CMM]/network</code> ■ <code>help /[SP/CMM]/network/ipv6</code>

インタフェース	手順 詳細
	set /[SP/CMM]/network commit_pending=true

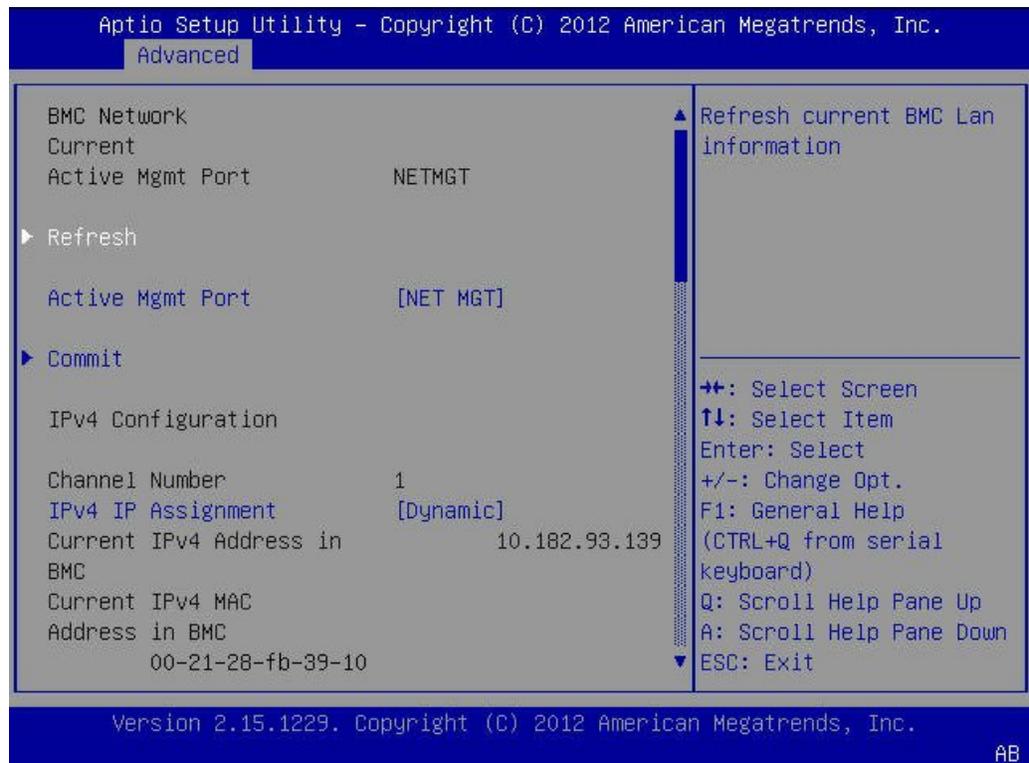
- 参照 ■ ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、「デフォルト接続構成プロパティの変更」。

▼ SP のネットワークアドレスを構成する (BIOS)



BIOS 設定ユーティリティを使ってサーバー SP のネットワーク設定を変更するには、次の手順を使用します。

1. BIOS 設定ユーティリティにアクセスします。
 - a. システムをブートします。
ブートメッセージがコンソール画面をスクロールして表示されます。
 - b. F2 キー (またはシリアル端末からは Ctrl + E) を連続して押します。
BIOS 設定ユーティリティのメイン画面が表示されます。
2. 「Advanced」メニューに移動します。
3. 「BMC Network」を選択します。
4. 「Dynamic」、「Static」のいずれかを選択します。
5. 「IPv4」、「IPv6」のいずれかを選択します。
画面が拡張され、IPv4 または IPv6 アドレス設定が表示されます。
(たとえば) 動的 IP 割り当てを選択した場合には、いくつかの選択肢がグレー表示になります。



6. 構成設定を最新の値に更新するには、「Refresh」を選択します。
7. 最新の値に変更を加えるには、「Commit」を選択します。
8. 変更を保存して BIOS 設定ユーティリティを終了するには、F10 キーを押します。

参照 ■ [109 ページの「SP の DNS を構成する \(Oracle System Assistant\)」](#)

Oracle ILOM ユーザーアカウントの追加

システムにログインするユーザーを認証したり、個々の Oracle ILOM 機能へのユーザーアクセスを承認したりするには、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) のユーザーアカウントを使用します。ローカルで最大 10 個のユーザーアカウントを構成できるほか、別の認証サーバーを使えば追加のユーザーアカウントをリモートで構成できます。

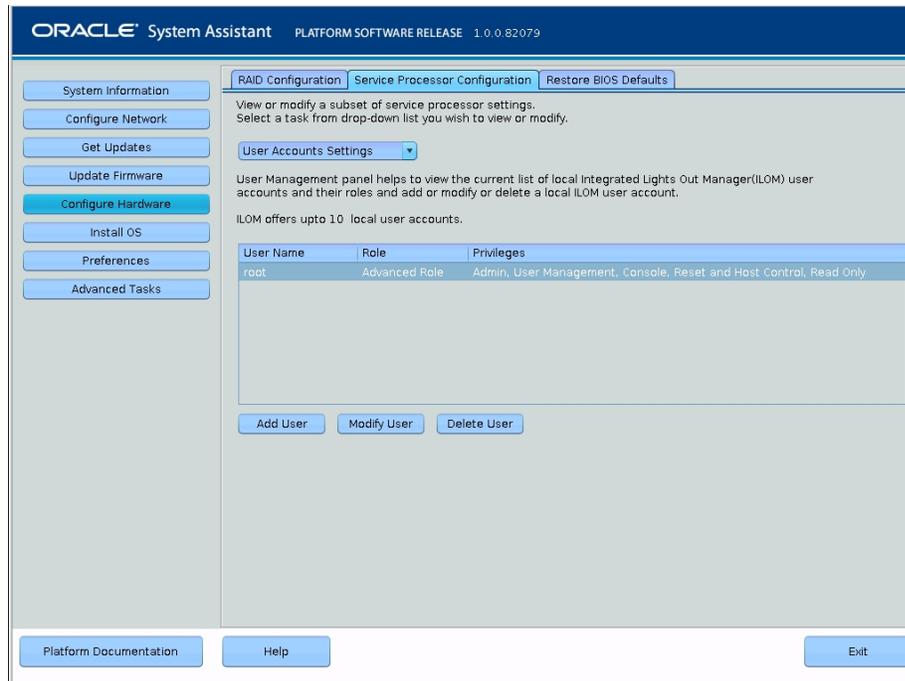
ローカルの Oracle ILOM ユーザーアカウントを作成する際には、ユーザー名とパスワードの割り当てと、1 つ以上のユーザー役割の割り当てが行われます。Oracle ILOM のコマンド行インタフェース (CLI) または Web インタフェースを使えば、サーバーサービスプロセッサ (SP) またはシャーシモニタリングモジュール (CMM) のローカルユーザーアカウントを作成できます。また、Oracle System Assistant を使って SP のローカル Oracle ILOM ユーザーアカウントを作成することもできます。詳細については、次の手順を参照してください。

- [103 ページの「Oracle ILOM ユーザーアカウントを追加、変更、または削除する \(Oracle System Assistant\)」](#)
- [105 ページの「SP または CMM のローカルユーザーアカウントを追加する \(Oracle ILOM\)」](#)

▼ Oracle ILOM ユーザーアカウントを追加、変更、または削除する (Oracle System Assistant)



1. Oracle System Assistant にアクセスします。
詳細は、[161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)を参照してください。
2. 「Configure Hardware」をクリックし、「Service Processor Configuration」タブをクリックします。
「Service Processor Configuration」画面が表示されます。
3. ドロップダウンリストから「User Accounts Settings」を選択します。
「User Accounts Settings」画面が表示されます。



4. 必要なアクションをクリックします。

- 「Add User」をクリックした場合、空の構成ウィンドウが表示されます。情報を入力し、「Add User」をクリックします。

注記 - Oracle System Assistant は、「user」というユーザー名のユーザーアカウントの作成をサポートしていません。ところが、Oracle ILOM ではそのような名前のアカウントの作成がサポートされています。Oracle System Assistant では、そのようなアカウントを表示することはできませんが、変更や削除は行えません。このアカウントの作成や管理が必要な場合は、Oracle ILOM を使用してください。

- ユーザーを選択してから「Modify User」をクリックした場合、ウィンドウにユーザー構成情報が表示されます。それを変更したあと、「Modify User」をクリックします。
- ユーザーを選択してから「Delete User」をクリックした場合、ユーザーの確認を求めるダイアログボックスが表示されます。確定させる場合は「Yes」を選択し、変更しないで終了する場合は「No」を選択します。

5. 完了したら、「Apply Settings」をクリックします。

Oracle System Assistant は、変更を適用するか、あるいは次回のブートまで変更を適用できないことを示すメッセージを表示します。

▼ SP または CMM のローカルユーザーアカウントを追加する (Oracle ILOM)



始める前に

- root ユーザーとして、あるいはユーザー管理 (u) 役割特権を持つユーザーとして、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) にログインします。root ユーザーとして Oracle ILOM にログインする手順については、[46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」](#)を参照してください。

次の手順では、サーバーサービスプロセッサ (SP) とシャーシモニタリングモジュール (CMM) の両方に対する Web 手順と CLI 手順を示します。

- 新しいローカル Oracle ILOM ユーザーアカウントを定義し、そのアカウントのユーザー役割を設定するには、望ましい Oracle ILOM ユーザーインタフェースで次の手順を実行します。

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「ILOM Administration」>「User Management」>「User Accounts」をクリックします。 2. 「Users」テーブルで「Add」をクリックします。 3. 「User Account」ダイアログボックスで、ローカルアカウントのユーザー名とパスワードを指定したあと、ユーザープロファイルを割り当てます。 4. 「Save」をクリックします。 	Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「User Account Settings」ページで「More details」リンクをクリックします。
CLI	<ol style="list-style-type: none"> 1. 新しいローカルアカウントにユーザー名とパスワードを割り当てるには、次を入力します。 <pre>set /[SP/CMM]/users/[username] password=[password]</pre>	<p>次のように入力します。</p> <pre>help /[SP/CMM]/users/[username]</pre>

インタフェース	手順	詳細
	2. ステップ 1 で指定されたユーザー名に個々のユーザー役割または定義済みのユーザープロファイルを割り当てるには、次を入力します。	
		<code>set /[SP/CMM]/users/[username] role=[a u c r o s Operator Administrator]</code>

- 参照
- ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、「ユーザー資格の管理」。
 - ファームウェア 3.1 の Oracle ILOM クイックスタートガイドまたはファームウェア 3.2 の『Oracle ILOM スタートガイド』の Oracle ILOM への新規ユーザーの追加

SP のクロックプロパティの設定

サービスプロセッサのクロックプロパティを設定するには、Oracle System Assistant を使用するか、あるいは Oracle ILOM を使用します。

- [106 ページの「SP のクロックプロパティを設定する \(Oracle System Assistant\)」](#)
- [108 ページの「SP のクロックプロパティを設定する \(Oracle ILOM\)」](#)

▼ SP のクロックプロパティを設定する (Oracle System Assistant)



システムの構成時に SP のクロックプロパティを設定するには、Oracle System Assistant を使用します。

1. Oracle System Assistant にアクセスします。

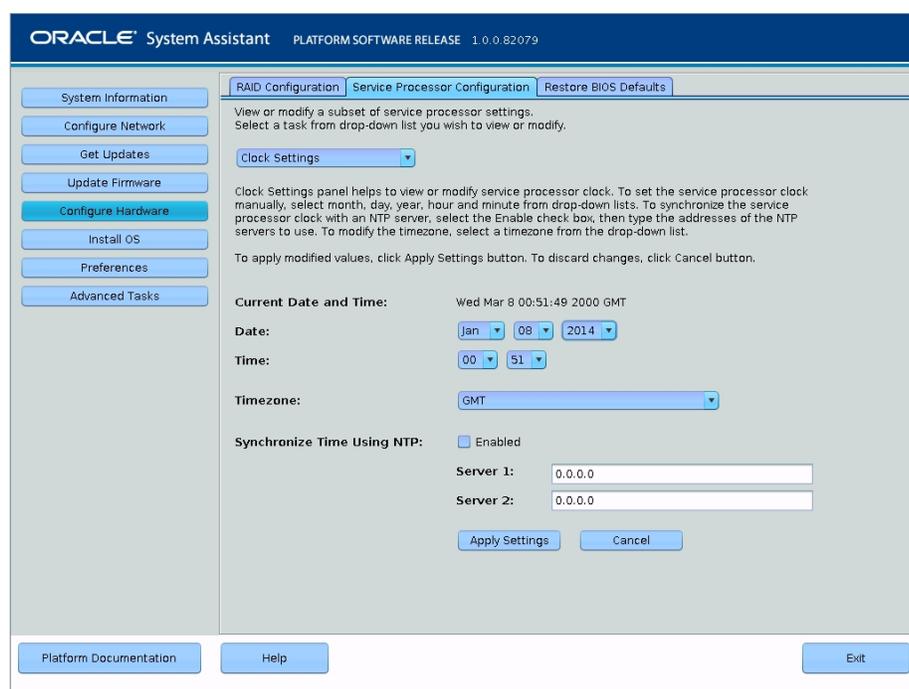
詳細は、[161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)を参照してください。

2. 「Configure Hardware」をクリックし、「Service Processor Configuration」タブをクリックします。

「Service Processor Configuration」画面が表示されます。

3. ドロップダウンリストから「Clock Settings」を選択します。

「Clock Settings」画面が表示されます。



4. 次のクロック設定を表示または変更します。

- a. **Date**

ドロップダウンリストを使用して、月、日、年を選択します。

- b. **Time**

ドロップダウンリストを使用して、24 時間形式で時間を設定します。

- c. **Timezone**

ドロップダウンリストを使用してタイムゾーンを選択します。

d. **Synchronize Time Using NTP**

チェックボックスをクリックすると、時間情報プロトコル (NTP) サーバーとの同期が有効になります。

e. **NTP を使用した時間同期を選択した場合は、NTP サーバー 1 および 2 の IP アドレスを追加します。**

5. **完了したら、「Apply Settings」をクリックします。**

Oracle System Assistant は、変更を適用するか、あるいは次回のブートまで変更を適用できないことを示すメッセージを表示します。

▼ SP のクロックプロパティを設定する (Oracle ILOM)



Oracle ILOM のクロックを構成する際には、Oracle ILOM のクロックを NTP サーバーに同期させる方法と、ローカルホストタイムゾーンに基づいて日付と時間を設定する方法のいずれかを選択します。

始める前に Oracle ILOM を起動します。手順については、[44 ページの「Oracle ILOM へのアクセス」](#)を参照してください。

Oracle ILOM でクロックプロパティを変更するには、管理者 (a) 役割が必要になります。

次の手順では、サーバー SP と CMM の両方に対する Web 手順と CLI 手順を示します。

- **SP または CMM のクロックプロパティを変更するには、望ましい Oracle ILOM ユーザーインターフェイスで次の手順を実行します。**

インタフェース	手順	詳細
Web	1. 次のいずれかを実行します。	Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「Date and Time」

インタフェース	手順	詳細
	<ul style="list-style-type: none"> ■ ホストオペレーティングシステムのクロックに関連付けられたローカルの日付と時間を表すようにクロックプロパティを構成するには、日付と時間のプロパティを構成したあと、タイムゾーンプロパティを構成します。これを行うには、「ILOM Administration」→「Date and Time」→「Clock」または「Timezone」の順にクリックします。 ■ NTP サーバーに関連付けられた日付と時間に同期するように Oracle ILOM のクロックを構成するには、NTP サーバーとの同期用のプロパティを有効にしてから、NTP サーバーの IP アドレスまたはホスト名を指定します。これを行うには、「ILOM Administration」→「Date and Time」→「Clock」の順にクリックします。 <p>2. 「Save」をクリックして変更を適用します。</p>	ページまたは「Timezone」ページで「More details」リンクをクリックします。
CLI	<p>1. ローカルホストタイムゾーンを使って日付と時間を設定するには、次を入力します。</p> <pre>set /SP/CMM/clock datetime= MMDDhhmmYYYY timezones= 3_to_4_characters</pre> <p>2. Oracle ILOM のクロックを NTP サーバーの日付や時間と同期させるには、次を入力します。</p> <pre>set /SP/CMM/clock usntpserver=enabled</pre> <pre>set /SP/CMM /clients/ntp/ server 1/2=ip_address_or_hostname</pre>	<p>次のように入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ help SP/CMM clock ■ help SP/CMMclients/ntp/ server

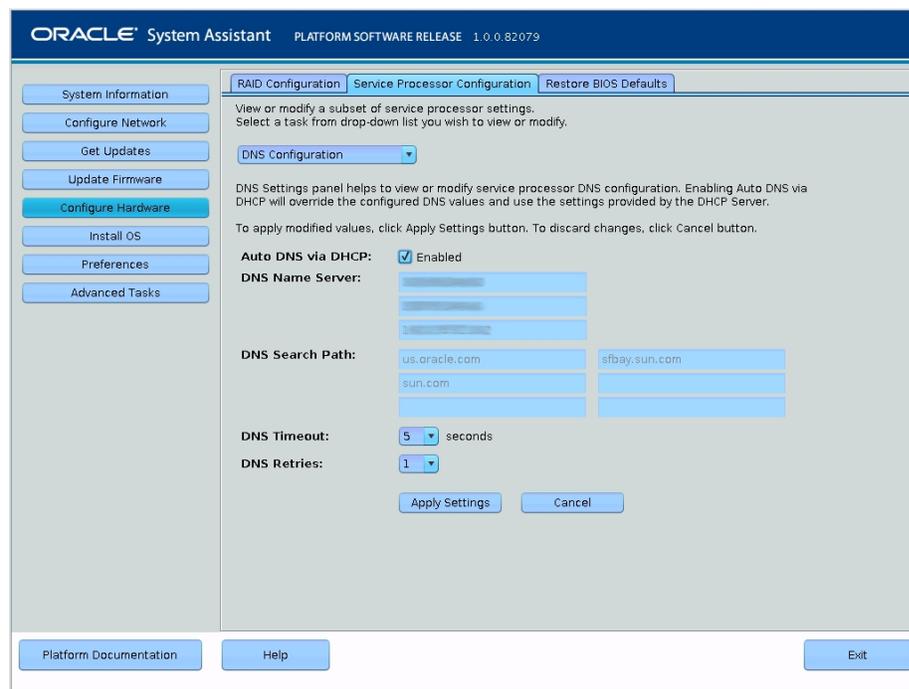
参照 ■ ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、SP または CMM クロックのプロパティの設定。

▼ SP の DNS を構成する (Oracle System Assistant)



Oracle System Assistant を使って Oracle ILOM のネットワーク設定を構成するには、次の手順を使用します。

1. **Oracle System Assistant にアクセスします。**
詳細は、[161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)を参照してください。
2. **「Configure Hardware」をクリックし、「Service Processor Configuration」タブをクリックします。**
「Service Processor Configuration」画面が表示されます。
3. **ドロップダウンリストから「DNS Configuration」を選択します。**
「DNS Configuration」画面が表示されます。



4. **Oracle ILOM の次の DNS 設定を入力または選択します。**
自動 DNS を有効にした場合、DNS ネームサーバーや DNS 検索パスは使用できません。
 - Auto DNS via DHCP

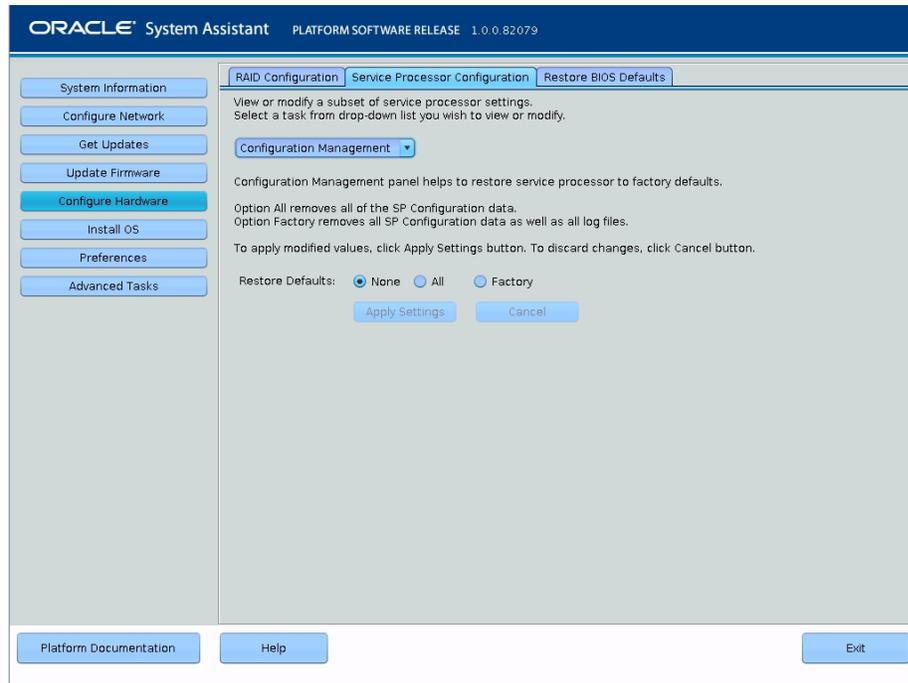
- DNS Name Server
 - DNS Search Path
 - DNS Timeout および DNS Retries
5. 「Auto DNS via DHCP」を選択しなかった場合は、DNS ネームサーバーと DNS 検索パスの情報を入力します。
 6. 完了したら、「Apply Settings」をクリックします。
Oracle System Assistant が変更を適用します。

▼ 構成管理 (Oracle System Assistant)



Oracle ILOM 設定に対するグローバルな変更を実施するには、「Configuration Management」画面を使用します。

1. Oracle System Assistant にアクセスします。
詳細は、[161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)を参照してください。
2. 「Configure Hardware」をクリックし、「Service Processor Configuration」タブをクリックします。
「Service Processor Configuration」画面が表示されます。
3. ドロップダウンリストから「Configuration Management」を選択します。
「Configuration Management」画面が表示されます。



4. 次のいずれかのオプションを選択します。

「Factory」と「All」の選択はシステムのリポート時に適用されます。



注意 - サービスの損失: 「Factory」または「All」を選択すると、Oracle ILOM の現在の構成が消去され、構成が出荷時のデフォルトに戻ります。この場合、構成を再度行うまで Oracle ILOM が使用できなくなる可能性があります。

- Factory – SP のすべての設定を出荷時のデフォルトに戻し、すべてのログファイルをクリアします。
- All – SP のすべての設定を出荷時のデフォルトに戻しますが、ログファイルは維持します。
- None – 保留中の「All」または「Factory」選択が存在する場合 (システムがリポートされていない場合) にこれを選択すると、それが取り消されます。

5. 完了したら、「Apply Settings」をクリックします。

Oracle System Assistant は次回のリポート時に選択を適用します。

Oracle HMP のダウンロード

このセクションでは HMP をダウンロードする手順を示します。説明項目は次のとおりです。

- [113 ページの「Oracle HMP をダウンロードする \(Oracle System Assistant\)」](#)
- [113 ページの「My Oracle Support から Oracle HMP をダウンロードする \(MOS\)」](#)

▼ Oracle HMP をダウンロードする (Oracle System Assistant)



1. Oracle System Assistant にアクセスします。
詳細は、[55 ページの「Oracle Hardware Management Pack へのアクセス」](#)を参照してください。
2. [223 ページの「プラットフォームソフトウェア、ドライバ、およびファームウェアの更新をダウンロードする \(Oracle System Assistant\)」](#)の説明に従ってソフトウェア更新をダウンロードします。
ソフトウェア更新には最新版の Oracle HMP が含まれているはずですが。
 - オペレーティングシステムがすでにインストールされている場合は、<http://www.oracle.com/goto/OHMP/docs>にある Oracle Hardware Management Pack ドキュメントライブラリの説明に従って新しいバージョンの Oracle HMP をインストールします。
Oracle System Assistant を使って新しいオペレーティングシステムをインストールする場合、ダウンロードされた最新版の Oracle HMP が Oracle System Assistant によって自動的にインストールします。

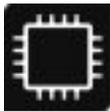
▼ My Oracle Support から Oracle HMP をダウンロードする (MOS)

1. My Oracle Support にアクセスし、目的の製品に移動します。

詳細については、232 ページの「[My Oracle Support を使用してファームウェアとソフトウェアをダウンロードする](#)」を参照してください。

2. 「Release」フィールドのドロップダウンリストからソフトウェアリリースを選択します。
3. 「Search」をクリックします。
画面上にダウンロード (パッチ) の一覧が表示されます。
4. ダウンロードするすべてのパッチの横にあるボックスをクリックしたあと、「Download」をクリックします。
自動的にダウンロードが開始されます。

▼ TPM プロパティを構成する (BIOS)



Windows Server 2008 の Trusted Platform Module (TPM) 機能セットを使用する場合は、この機能をサポートするようにサーバーを構成する必要があります。

TPM を使用すると、サーバーの TPM セキュリティーハードウェアを管理できます。この機能の実装の詳細は、Microsoft が提供する Windows Trusted Platform Module Management のドキュメントを参照してください。

1. BIOS 設定ユーティリティーにアクセスします。
 - a. システムをブートします。
ブートメッセージがコンソール画面をスクロールして表示されます。
 - b. F2 キー (またはシリアル端末からは Ctrl + E) を連続して押します。
BIOS 設定ユーティリティーのメイン画面が表示されます。
2. 「Advanced」>「Trusted Computing」画面に移動します。
「TPM Support」プロパティが「Enable」、「Disable」のいずれかに設定されています。

3. 状態を変更するには、「TPM Support」を選択し、ダイアログボックスで選択を行います。
4. 選択が適用されたことを確認するには:
 - a. サーバーの電源を切り、電源を入れます。
 - b. 「Advanced」>「Trusted Computing」に再度移動します。
 - c. 選択が適用されたことを確認します。

システムおよび管理電源ポリシーの設定 (Oracle ILOM)

データセンターの Oracle サーバースステムの電源要件や冷却要件を満たすには、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) でシステム管理ポリシーを設定します。このセクションでは、Oracle サーバースステムのエネルギー消費の管理を可能にする方法をいくつか説明します。

- Oracle サーバースステムの電力要件を、そのパフォーマンスに影響を与えずに低減します。詳細については、[117 ページの「システム全体の電源管理設定の設定 \(Oracle ILOM\)」](#)を参照してください。
- ブート時のホスト電源の動作を実質上制御します。詳細については、[126 ページの「ブート時ホスト電源の SP ポリシーの設定 \(Oracle ILOM\)」](#)を参照してください。
- PCIe カードの冷却動作要件を満たしたり、ホストをシャットダウンする前の冷却期間を有効にしたりします。詳細については、[127 ページの「サーバー冷却ポリシーの設定 \(Oracle ILOM\)」](#)を参照してください。
- ブレードシャーシの NEM が SAS2 対応リンクを低速で実行するように強制します。詳細については、[128 ページの「ブレードを強制的に SAS2 対応にする \(Oracle ILOM\)」](#)を参照してください。

システム全体の電源管理設定の設定 (Oracle ILOM)

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) でシステム全体の電源管理設定を変更すれば、次のことが行えます。

- 制限目標を設定してサーバーの消費電力を減らします。このプロパティの構成の詳細については、[118 ページの「サーバー SP に電力制限目標プロパティを設定する」](#)を参照してください。

- 電力上限ポリシーを適用することでサーバーの電力制限目標を達成します。このポリシーの構成の詳細については、[119 ページの「サーバー SP に電力上限ポリシーを設定する」](#)を参照してください。
- 電力許可制限を設定してブレードスロットの消費電力を減らします。このプロパティの構成の詳細については、[121 ページの「シャーシモニタリングモジュール \(CMM\) にブレードスロット許可制限プロパティを設定する」](#)を参照してください。
- 冗長性ポリシーを設定することで、Oracle ブレードシャーシシステムの電源が失われないようにします。このポリシーの構成の詳細については、[122 ページの「CMM に電源装置冗長性ポリシーを設定する」](#)を参照してください。
- 効率性ポリシーを設定することで、Oracle ブレードシャーシの電源装置でより高レベルの効率性を実現します。これらのポリシーの構成の詳細については、[123 ページの「CMM に電源装置軽負荷時効率性ポリシーを設定する」](#)を参照してください。
- ファン速度ポリシーを設定することで、Oracle ブレードシャーシ電源装置のファン速度を制御します。これらのポリシーの詳細については、[125 ページの「CMM に電源装置ファン速度ポリシーを設定する」](#)を参照してください。

▼ サーバー SP に電力制限目標プロパティを設定する



Oracle サーバーに許可される消費電力の量を制御するには、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) で電力制限目標プロパティを設定します。

始める前に

- Oracle ILOM にログインします。Oracle ILOM にログインする手順については、[46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」](#)を参照してください。
- Oracle ILOM で Admin (a) 役割特権を持っていることを確認します。

注記 - Oracle ILOM のサーバー電力制限目標プロパティは、デフォルトでは無効になっています。

次の手順では、サーバーサービスプロセッサ (SP) に対する Web インタフェース手順とコマンド行インタフェース (CLI) 手順の両方を示します。

- Oracle ILOM 管理対象サーバーに対する電力制限目標を定義するには、望ましい Oracle ILOM ユーザーインターフェースで次の手順を実行します。

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「Power Management」>「Limit」をクリックします。 2. 「Target Limit」をワット単位またはパーセントで入力します。 <p>注記 - 制限目標は、取り付けられているハードウェアコンポーネントによって取り込まれる最小電力と管理対象のサーバーが許容されている最大消費電力 (許容ピーク) の間に設定するようにしてください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 3. 「Power Limiting」チェックボックスを選択して電力制限を有効化します。 4. 「Save」をクリックして変更を適用します。 	<p>Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「Power Limit」ページで「More details」リンクをクリックします。</p>
CLI	<ol style="list-style-type: none"> 1. 電力制限を設定し、管理対象サーバー上で電力制限状態をアクティブにするには、次を入力します。 <pre>set /SP/powermgmt/budget pending_power_limit=[value] pendingactivation_state=enabled commit_pending=true</pre> <p>ここで、<i>value</i> は制限目標値 (ワット数またはパーセンテージ) を表します。</p> <p>注記 - 制限目標は、取り付けられているハードウェアコンポーネントによって取り込まれる最小電力と管理対象のサーバーが許容されている最大消費電力 (許容ピーク) の間に設定するようにしてください。</p>	<p>次のように入力します。</p> <pre>help /SP/powermgmt/budget</pre>

- 参照 ■ ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『*Oracle ILOM 構成および保守ガイド*』、「SP の「Power Target Limit」プロパティの設定」。

▼ サーバー SP に電力上限ポリシーを設定する



Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) で電力上限ポリシーを定義すれば、電力制限目標を適用することができます。

始める前に

- Oracle ILOM にログインします。Oracle ILOM にログインする手順については、[46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」](#)を参照してください。
- 電力上限ポリシーを設定する前に、管理対象サーバーに対する電力制限目標を設定します。手順については、[118 ページの「サーバー SP に電力制限目標プロパティを設定する」](#)を参照してください。
- Oracle ILOM の管理者 (a) ユーザー役割特権を持っていることを確認します。

注記 - 電力上限をサポートしていないシステムもあります。これらのシステムでは、コマンドまたは Web 要素 (あるいはその両方) が表示されません。

次の手順では、サーバーサービスプロセッサ (SP) に対する Web インタフェース手順とコマンド行インタフェース (CLI) 手順の両方を示します。

- **Oracle ILOM 管理対象サーバーに対する電力上限ポリシーを定義するには、望ましい Oracle ILOM ユーザーインタフェースで次の手順を実行します。**

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「Power Management」>「Limit」をクリックします。 2. 「Advanced Settings」パネルでいずれかの「Policy」オプション (Soft Cap (デフォルト)、Hard Cap のいずれか) を選択します 3. 「Violation Actions」リストボックスでポリシー違反アクション (None、Hard Power Off のいずれか) を選択します 4. 「Save」をクリックして変更を適用します。 	Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「Power Limit」ページで「 <i>More details</i> 」リンクをクリックします。
CLI	<ol style="list-style-type: none"> 1. 電力上限ポリシーを設定するには、次を入力します。 <pre>set /SP/powermgmt/budget pendingtimelimit=[default integer between 1 and 99999 0] pendingviolation_actions=[none hardpoweroff] commit_pending=true</pre> 	<p>次のように入力します。</p> <pre>help /SP/powermgmt/budget</pre>

- 参照 ■ ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、「詳細電力上限ポリシーを設定する」

▼ シャーシモニタリングモジュール (CMM) にブレードスロット許可制限プロパティを設定する



Oracle ブレードサーバーモジュールが消費する電力量を制御するには、シャーシモニタリングモジュール (CMM) にブレードスロット許可制限プロパティを設定します。

始める前に

- Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) にログインします。
Oracle ILOM にログインする手順については、[46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」](#)を参照してください。
- Oracle ILOM で Admin (a) 役割特権を持っていることを確認します。

注記 - Oracle ILOM のブレードスロット許可制限プロパティのデフォルトは、1200 ワット (最大スロット制限) です。

注記 - ブレードスロット許可制限には、すでに CMM によってブレードスロットに許可されているワット数より小さい値を設定しないようにしてください。ブレードスロット許可制限を 0 に設定すると、設置されたブレードサーバーモジュールの電源を投入できなくなります。

次の手順では、CMM に対する Web インタフェース手順とコマンド行インタフェース (CLI) 手順の両方を示します。

- Oracle ブレードシャーシシステムでブレードスロット許可制限を定義するには、望ましい Oracle ILOM ユーザーインタフェースで次の手順を実行します。

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 「Power Management」>「Allocation」の順にクリックします。 「Power Grants」テーブルでブレードサーバーモジュールを選択し、「Edit」をクリックします。 「Power Grant Limit Policy」で次のいずれかのオプションを有効にします: 「Slot Maximum」(デフォルト、1200 ワット) または 「Custom」 「Custom」が有効化された場合、シャードブレードスロットの許可制限値をワット数で入力します。 「Save」をクリックして変更を適用します。 	Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「Power Allocation Plan」ページで「 <i>More details</i> 」リンクをクリックします。
CLI	<ol style="list-style-type: none"> あるブレードスロットに対する電力許可制限を設定するには、次を入力します。 <pre>set /CMM/powermgmt/powerconf/ bladeslots/ BL n grant_limit=[watts]</pre> ここで、<i>watts</i> はブレードスロット電力制限を表します。 	次のように入力します。 <pre>help /CMM/powermgmt/powerconf/ bladeslots/BL n</pre>

- 参照
- ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、「CMM の「Blade Slot Grant Limit」プロパティの設定」。
 - [211 ページの「BIOS のキーマッピング」](#)

▼ CMM に電源装置冗長性ポリシーを設定する



電源装置の故障時に Oracle ブレードシャーシシステムが電源を失わないようにするには、電源装置冗長性ポリシーを設定します。

始める前に

- Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) にログインします。Oracle ILOM にログインする手順については、46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」を参照してください。

次の手順では、シャーシモニタリングモジュール (CMM) に対する Web インタフェース手順とコマンド行インタフェース (CLI) 手順の両方を示します。

- Oracle ブレードシャーシシステムで電源装置冗長性ポリシーを定義するには、望ましい Oracle ILOM ユーザーインタフェースで次の手順を実行します。

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「Power Management」>「Redundancy」の順にクリックします。 2. 電源装置冗長性ポリシーで次のいずれかのオプションを有効にします: N+N (デフォルト) または None 3. 「Save」をクリックして変更を適用します。 	Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「Redundancy」ページで「More details」リンクをクリックします。
CLI	<ol style="list-style-type: none"> 1. 次のように入力します。 <pre>set /CMM/powermgmt redundancy=[redundancy/ none]</pre>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 次のように入力します。 <pre>help /CMM/powermgmt</pre>

- 参照
- ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、「CMM 電源装置冗長性ポリシーの設定」。

▼ CMM に電源装置軽負荷時効率性ポリシーを設定する



電源装置の効率を高める目的で、電源装置で使用されている電力量をモニターし、電源装置ユニットの片側をシャットダウンすることができます。

始める前に

- Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) にログインします。Oracle ILOM にログインする手順については、46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」を参照してください。
- Oracle ILOM の軽負荷効率性ポリシーのデフォルト設定は、次のとおりです。
 - 軽負荷効率性モードはデフォルトでは無効になっています。
 - モニター電源 0 サイド 0 またはモニター電源 0 サイド 1 プロパティは、デフォルトで有効になっています。
 - モニター電源 1 サイド 0 またはモニター電源 1 サイド 1 プロパティは、デフォルトで有効になっています。
- Oracle ILOM で Admin (a) 役割特権を持っていることを確認します。

次の手順では、シャーシモニタリングモジュール (CMM) に対する Web インタフェース手順とコマンド行インタフェース (CLI) 手順の両方を示します。

- Oracle ブレードシャーシシステムに取り付けられた電源装置に対する軽負荷効率性ポリシーを定義するには、望ましい Oracle ILOM ユーザーインタフェースで次の手順を実行します。

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「System Management」>「Policy」をクリックします。 2. 「Chassis Monitoring Module Policies」テーブルで適切な電源装置ポリシー（「Load Efficiency」や「Monitor Power Supply Side」など）を選択したあと、「Actions」リストボックスで「Enable」、「Disable」のいずれかをクリックします。 	Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「Policy」ページで「More details」リンクをクリックします。
CLI	<ol style="list-style-type: none"> 1. 次のように入力します。 <pre>set /CMM/policy LIGHT_LOAD_EFFICIENCY_MODE=[enabled disabled] MONITOR_PS n _SIDE n =[enabled disabled]</pre> <p>ここで、<i>n</i> は電源装置のスロット位置 (0 または 1) とサイド (0 または 1) を表します。</p>	<p>次のように入力します。</p> <pre>help /CMM/policy</pre>

- 参照 ■ ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、「CMM から構成できるシステム管理電源ポリシー」。

▼ CMM に電源装置ファン速度ポリシーを設定する



必要であれば、ブレードシャーシの電源装置のファンの速度を強制的に高速または低速に変更できます。

始める前に

- Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) にログインします。Oracle ILOM にログインする手順については、[46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」](#)を参照してください。
- Oracle ILOM で Admin (a) 役割特権を持っていることを確認します。

注記 - Oracle ILOM の電源装置ファン速度ポリシーは、デフォルトで無効になっています。

次の手順では、シャーシモニタリングモジュール (CMM) に対する Web インタフェース手順とコマンド行インタフェース (CLI) 手順の両方を示します。

- **電源装置のファンの速度を変更するには、望ましい Oracle ILOM ユーザーインタフェースで次の手順を実行します。**

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「System Management」>「Policy」をクリックします。 2. 「Chassis Monitoring Modules」テーブルで適切な「Force Power Supply Fan」ポリシー (高速用または低速用) を選択したあと、「Actions」リストボックスで「Enable」、「Disable」のいずれかを選択します。 3. 「Save」をクリックして変更を適用します。 	Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「Policy」ページで「More details」リンクをクリックします。
CLI	<ol style="list-style-type: none"> 1. 電源装置のファンの速度を設定するには、次を入力します。 <pre>set /CMM/policy PS_FANS_[HIGH LOW]=[enabled disabled]</pre>	次のように入力します。 <pre>help /CMM/policy</pre>

- 参照 ■ ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『*Oracle ILOM 構成および保守ガイド*』、「CMM から構成できるシステム管理電源ポリシー」。

ブート時ホスト電源の SP ポリシーの設定 (Oracle ILOM)

ブート時のホスト電源の動作を制御するには、ホスト電源ポリシーを設定します。

始める前に

- Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) にログインします。Oracle ILOM にログインする手順については、[46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」](#)を参照してください。
- Oracle ILOM で Admin (a) 役割特権を持っていることを確認します。

注記 - Oracle ILOM でのブート時ホスト電源のポリシーは、デフォルトでは無効になっています。

次に、サーバーサービスプロセッサ (SP) に対する Web での手順とコマンド行インタフェースの手順の両方を記します。

▼ SP のブート時ホスト電源ポリシーを設定する



- ブート時のホスト電源を制御するポリシーを変更するには、望ましい Oracle ILOM ユーザーインタフェースで次の手順を実行します。

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none">1. 「System Management」>「Policy」をクリックします。2. 「Service Processor Policies」テーブルで適切なブート時ホスト電源プロパティをクリックし	Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「Policy Configuration」ページで「 <i>More details</i> 」リンクをクリックします。

インタフェース	手順	詳細
		たあと、「Actions」リストボックスで「Enable」、「Disable」のいずれかを選択します。
CLI	1. 次のように入力します。	次のように入力します。
	<pre>set /SP/policy HOST_AUTO_POWER_ON=[enabled/disabled] HOST_LAST_POWER_STATE=[enabled/disabled]</pre>	<pre>help /SP/policy</pre>

- 参照 ■ ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、SP から構成できる電力投入および冷却ポリシー。

サーバー冷却ポリシーの設定 (Oracle ILOM)

サーバーのクーラー動作要件を満たすには、ホスト、取り付けられた PCIe カードのいずれかに対する冷却ポリシーを設定します。

始める前に

- Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) にログインします。Oracle ILOM にログインする手順については、[46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」](#)を参照してください。
- Oracle ILOM で Admin (a) 役割特権を持っていることを確認します。

注記 - Oracle ILOM の冷却ポリシーはデフォルトでは無効になっています。

次に、サーバーサービスプロセッサ (SP) に対する Web での手順とコマンド行インタフェースの手順の両方を記します。

▼ SP 冷却ポリシーを設定する



- サーバー SP の冷却ポリシーを変更するには、望ましい Oracle ILOM ユーザーインタフェースで次の手順を実行します。

注記 - すべての Oracle サーバーで Oracle ILOM の冷却ポリシーがサポートされているわけではありません。これらのポリシーをサポートするサーバーでは、Web インタフェースの「System Management」>「Policy Configuration」ページでも、CLI の `/SP/policy` ターゲットの下でも、それらを構成できます。

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 「System Management」>「Policy」をクリックします。 「Service Processor Policies」テーブルで適切な冷却ポリシー (PCIe 用またはホスト用) をクリックしたあと、「Actions」リストボックスで「Enable」、「Disable」のいずれかをクリックします。 	Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「Policy Configuration」ページで「More details」リンクをクリックします。
CLI	<ol style="list-style-type: none"> 次のように入力します。 <pre>set /SP/policy ENHANCED_PCIE_COOLING_MODE=[enabled disabled] HOST_COOLDOWN=[enabled disabled]</pre> 	次のように入力します。 <pre>help /SP/policy</pre>

参照 ■ ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、SP から構成できる電力投入および冷却ポリシー。

ブレードを強制的に SAS2 対応にする (Oracle ILOM)

このアクションが必要となる例外的な場合に、NEM が SAS リンクを遅いレートで実行するように強制するには、このポリシーをブレードレベルで有効にします。

始める前に

- Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) にログインします。Oracle ILOM にログインする手順については、[46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」](#)を参照してください。
- Oracle ILOM で Admin (a) 役割特権を持っていることを確認します。

注記 - Oracle ILOM の SAS2 3G ビット/秒強制プロパティは、デフォルトでは無効になっています。

次の手順では、シャーシモニタリングモジュール (CMM) に対する Web インタフェース手順とコマンド行インタフェース (CLI) 手順の両方を示します。

▼ サーバーブレードを強制的に SAS2 対応にする



- Oracle ブレードシャーシシステム内で NEM がより低速 (3G ビット/秒) で SAS2 リンクを実行するように強制するには、望ましい Oracle ILOM ユーザーインタフェースで次の手順を実行します。

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 「System Management」>「Policy」をクリックします。 「Chassis Monitoring Module Policies」テーブルで適切なブレードサーバーモジュールの「Force server blade to be SAS2 capable at 3Gbps」を選択したあと、「Actions」リストボックスで「Enable」、「Disable」を選択します。 「Save」をクリックして変更を適用します。 	Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「Policy」ページで「More details」リンクをクリックします。
CLI	<ol style="list-style-type: none"> 次のように入力します。 <pre>set /CH/BLn/policy FORCE_SAS2_3GBPS= enabled disabled</pre> 	次のように入力します。 <pre>help /CMM/policy</pre>

- 参照 ■ ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、CMM ブレードスロット電力制限の設定。

オペレーティングシステムのインストール

このセクションでは、単一のサーバーにオペレーティングシステムをインストールする手順について説明します。オペレーティングシステムをインストールするための単一サーバーの準備手順についても説明します。

次のセクションを参照してください。

説明	リンク
オペレーティングシステムをインストールするため単一サーバーを準備します。	131 ページの「オペレーティングシステムのインストールの準備」
Oracle System Assistant を使用して、単一サーバーにオペレーティングシステムをインストールします。 注記 - このセクションでは、オペレーティングシステムをインストールするのに必要な基本的な手順について説明します。ただし、オペレーティングシステムは、それぞれ一意に異なります。詳細は、オペレーティングシステムのインストールガイドを参照してください。	132 ページの「オペレーティングシステムをインストールする (Oracle System Assistant)」

注記 - 複数のサーバーにオペレーティングシステムをインストールする場合は、<http://www.oracle.com/technetwork/oem/ops-center/index.html> にある Oracle Enterprise Manager Ops Center の製品情報のページを参照してください。

オペレーティングシステムのインストールの準備

オペレーティングシステムを実際にインストールする前に、サーバーを準備するさまざまなアクションを実行する必要があります。これらのアクションはすべて Oracle System Assistant (推奨) を使用して実行できますが、Oracle System Assistant がなくても実行できます。次の表では両方のオプションを一覧します。

アクション	Oracle System Assistant	Oracle System Assistant なし
Oracle System Assistant の更新準備をする	181 ページの「ネットワークインタフェース設定を構成する (Oracle System Assistant)」 184 ページの「Oracle System Assistant の更新を有効にするように MOS を構成する」	該当なし
Oracle ILOM を構成する。	96 ページの「Oracle ILOM のネットワーク設定の構成」	次の場所にある Oracle ILOM ドキュメントを参照してください。 http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs
プラットフォームソフトウェア、ドライバ、およびファームウェアの更新をダウンロードおよびインストールする	223 ページの「プラットフォームソフトウェア、ドライバ、およびファームウェアの更新をダウンロードする (Oracle System Assistant)」。 227 ページの「ソフトウェアおよびファームウェアを更新する (Oracle System Assistant)」。	232 ページの「MOS または PMR からのファームウェアおよびソフトウェアの取得」 229 ページの「サーバーまたはブレードシャーシファームウェアの更新 (Oracle ILOM)」
RAID を構成する 注記 - RAID はさまざまな方法で構成できます。このセクションでは、Oracle System Assistant を使用する場合の手順と、その他のオプションについて説明します。	67 ページの「RAID 構成オプション」	67 ページの「RAID 構成オプション」
オペレーティングシステムをインストールする。	132 ページの「オペレーティングシステムをインストールする (Oracle System Assistant)」	オペレーティングシステムのインストールガイドを参照してください。

▼ オペレーティングシステムをインストールする (Oracle System Assistant)



Oracle System Assistant は、システムの準備、オペレーティングシステムのインストール、およびドライバの更新を行うためのツール群を完備しているため、オペレーティングシステムやドライバをインストールするための推奨の方法です。

注記 - Oracle System Assistant のオペレーティングシステムインストールタスクは、**Solaris**、**Windows**、および **Linux** オペレーティングシステムと、**Oracle VM** ソフトウェアのサポート対象バージョンでのみ利用できます。Windows ではフルインストールオプションのみがサポートされます。(Server Core インストールオプションはサポートされない)。サポートされているオペレーティングシステムのインストールの詳細については、サーバーのオペレーティングシステム固有のインストールガイドを参照してください。

この手順を使用して、Oracle System Assistant を使ってサーバーにサポート対象のオペレーティングシステムをインストールします。

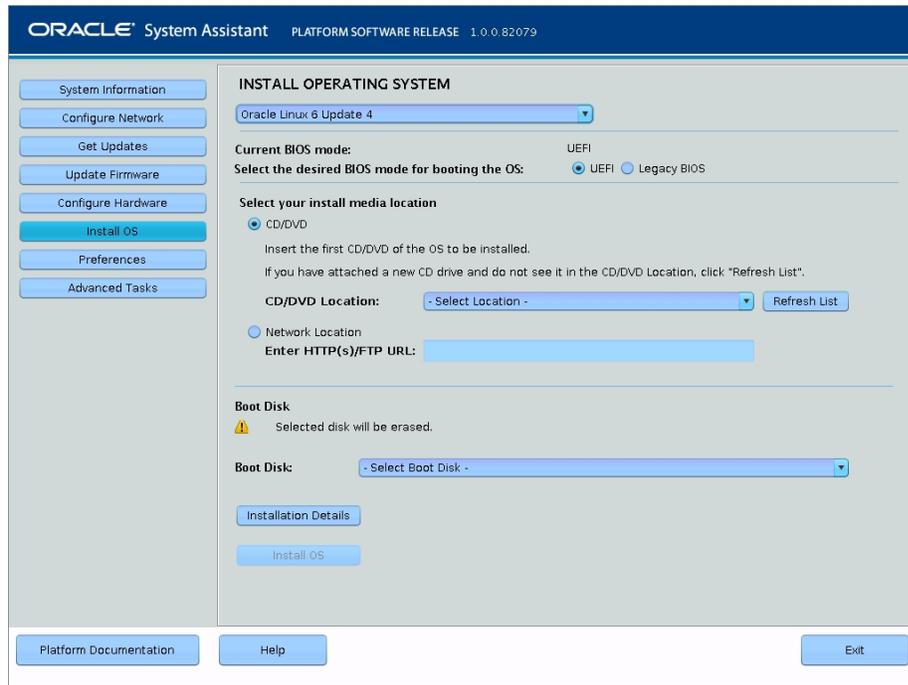
注記 - このセクションでは、オペレーティングシステムをインストールするのに必要な基本的な手順について説明します。ただし、オペレーティングシステムは、それぞれ一意に異なります。詳細は、オペレーティングシステムのインストールガイドを参照してください。

始める前に オペレーティングシステムのメディアまたはイメージを取得します。

131 ページの「[オペレーティングシステムのインストールの準備](#)」に記載されている準備事項を実行します。

1. 「Install OS」タスクボタンをクリックします。

「Install Operating System」画面が表示されます。



2. 「Supported OS」ドロップダウンリストから、インストールするオペレーティングシステムを選択します。
このリストには、サポートされているオペレーティングシステムのうち、OS のインストールタスクを使用できるものだけが含まれます。
3. 画面の「Select the desired BIOS mode for booting operating system」部分で、「UEFI」または「Legacy BIOS」モードを選択します。
BIOS モードの選択は、UEFI モードでのブートがターゲットオペレーティングシステムでサポートされている場合にのみ可能です。
[213 ページの「Legacy ブートモードと UEFI ブートモード」](#)を参照してください。
4. 画面の「Select your install media location」部分で、オペレーティングシステムインストールメディアの場所を選択します。
オプションは、物理的な CD/DVD、仮想 ISO イメージ、またはネットワーク場所です。ネットワーク場所は、Oracle System Assistant 1.2 以降を使用して Linux オペレーティングシステムをインストールする場合に使用できます。

「Refresh」ボタンをクリックすると、デバイスのリストが更新されます。

ヒント - Oracle Remote System Console を使用してリモートからオペレーティングシステムをインストールする場合は、KVM メニューの「Devices」を選択してから「CD-ROM Image」をクリックすると、リモートの CD-ROM が表示されます。次に、「Oracle System Assistant」画面で、「Refresh」をクリックし、CD/DVD の場所を選択します。

5. 画面の「Select the boot disk」部分で、「Boot disk」ドロップダウンリストからブートデバイスを選択します。

これは、オペレーティングシステムがインストールされるデバイスです。

- Linux ディストリビューションを選択した場合は、画面の「Select the boot disk」部分が表示されます。
- Windows ディストリビューションを選択した場合は、画面の「Select the boot disk」部分は表示されません。

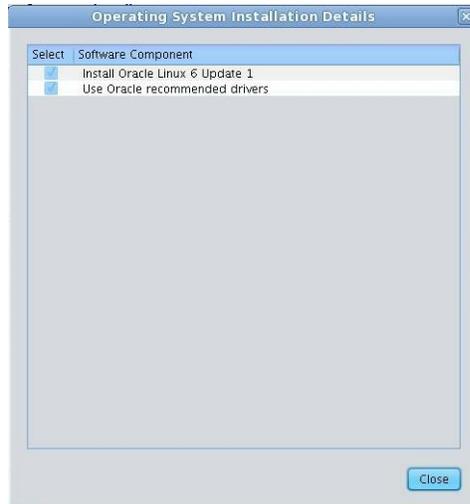
Oracle System Assistant は、オペレーティングシステムのインストールに必要なプリインストール環境やコンポーネントを使って、選択されたディスクの準備を整えます。



注意 - データの損失: オペレーティングシステムのインストールによって、ディスクの内容が消去されます。

6. ブートデバイスの選択を確認するには、「Yes」をクリックします。
7. 「View Installation Options」をクリックします。

「Operating System Installation Details」ダイアログボックスが表示されます。オペレーティングシステムやドライバソフトウェアのコンポーネントが一覧表示されます。インストールしないコンポーネントの選択を解除します。ほとんどのオペレーティングシステムでは、一覧表示されているコンポーネントはすべて必要です。



8. **ダイアログボックスを終了させるには、「Close」をクリックします。**
「Install Operating System」画面が表示されます。
9. 「Install OS」ボタンをクリックします。
10. **処理が完了するまでプロンプトに応答します。**
インストールが完了すると、サーバーがブートします。

- 参照
- [161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)
 - [216 ページの「UEFI または Legacy ブートモード \(BIOS\) を選択する」](#)
 - サーバーのオペレーティングシステムインストールドキュメントを参照してください。

サーバーのインベントリおよび健全性のモニタリング

このセクションでは、システムインベントリやエラーメッセージをモニタリングする手順を示すとともに、使用可能な診断の概要を説明します。説明項目は次のとおりです。

- [137 ページの「サーバーの情報やインベントリの表示」](#)
- [141 ページの「未解決の問題のモニタリングと解決」](#)
- [145 ページの「診断の概要」](#)

サーバーの情報やインベントリの表示

システムの情報やインベントリを表示するには、Oracle ILOM、Oracle System Assistant のいずれかを使用します。

- [137 ページの「サーバーの情報およびインベントリを表示する \(Oracle System Assistant\)」](#)
- [139 ページの「サーバーまたはブレードシステムの情報およびインベントリを表示する \(Oracle ILOM\)」](#)

▼ **サーバーの情報およびインベントリを表示する (Oracle System Assistant)**



「System Overview」および「System Inventory」画面ではシステムの内容に関する情報が提供されます。

始める前に Oracle System Assistant を開きます。詳細については、[161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)を参照してください。

1. **Oracle System Assistant にアクセスします。**

詳細は、[161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)を参照してください。

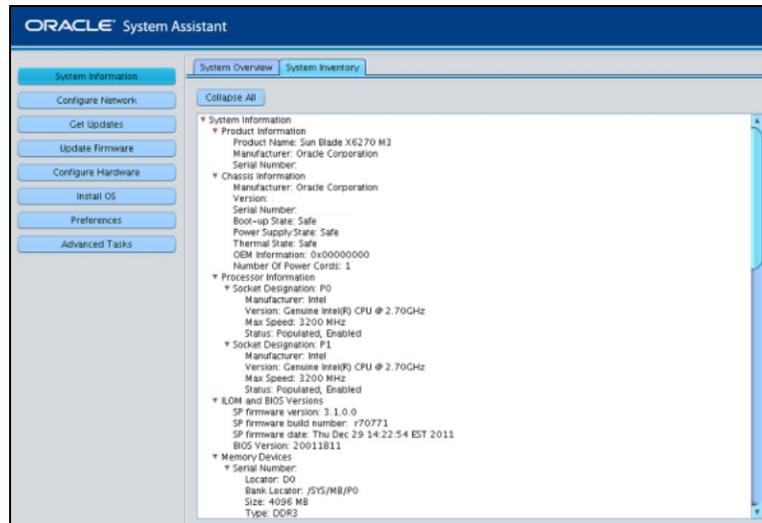
2. **「System Information」タスクボタンをクリックします。**

「System Overview」画面では、システムに関する次の情報が提供されます。

- 製品名
- シリアル番号
- システムタイプ
- システム識別子
- BIOS のバージョン
- ILOM のバージョン
- ILOM IP アドレス
- ILOM MAC アドレス
- ホスト IP アドレス
- ホスト MAC アドレス

3. **「System Inventory」タブをクリックします。**

「System Inventory」画面が表示されます。



4. 詳細情報を表示するには、エントリのいずれかをクリックします。
5. すべてのエントリの情報を展開したり折りたたんだりするには、「Expand All」または「Collapse all」をクリックします。

▼ サーバーまたはブレードシステムの情報およびインベントリを表示する (Oracle ILOM)



Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) を使ってラボ環境の Oracle サーバーまたはブレードシャーシシステムに関する情報を収集します。詳細については、次の手順に従ってください。

始める前に

- Oracle ILOM にログインします。詳細については、[46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」](#)を参照してください。

次の手順では、サーバーサービスプロセッサ (SP) とシャーシモニタリングモジュール (CMM) の両方に対する Web インタフェース手順とコマンド行インタフェース (CLI) 手順を示します。

- Oracle システムの基本的な構成情報やハードウェアインベントリ情報を収集するには、望ましい Oracle ILOM ユーザーインタフェースで次の手順を実行します。

インタフェース	手順	詳細
Web	<p>1. SP または CMM のナビゲーションペインで、情報を表示するサブシステムの名前をクリックします。例:</p> <p>サーバー SP のオプションには「Summary」、「Processors」、「Memory」、「Networking」、「PCI Devices」、「Firmware」が含まれます</p> <p>CMM のオプションには「Summary」、「Blades」、「Power」、「Cooling」、「Storage」、「I/O Modules」、「Firmware」が含まれます</p>	<p>Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、選択したシステム情報オプションのページで「More details」リンクをクリックします。</p>
CLI	<p>1. システムステータスのサマリーを表示するには、次を入力します。</p> <pre>show /System</pre> <p>2. コンポーネントレベルおよびファームウェアのインベントリやステータスを表示するには、次を行います。</p> <p>サーバー SP の場合、次のように入力します。</p> <pre>show /System/[Processors/Memory/Power/Cooling/Storage/PCI_Devices/Firmware]</pre> <p>CMM の場合、次のように入力します。</p> <pre>show /System [Power/Cooling/Storage/IO_Modules/Firmware/Blades]</pre>	<p>次のように入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ help System ■ help System/[subsystem]

- 参照
- ファームウェアリリース 3.1 または 3.2 の『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) ユーザーズガイド』、「システム情報の収集」
 - [141 ページの「未解決の問題を表示して解決する \(Oracle ILOM\)」](#)

未解決の問題のモニタリングと解決

不要な停止時間の発生を防ぐには、Oracle のシステム管理ツールを使ってシステムの健全性を早めにモニターし、問題発生時にユーザーに通知するようにします。システムの健全性ステータスを確認する方法や、検出されたハードウェアの問題を解決するための情報を特定する方法の詳細については、次を参照してください。

- [141 ページの「未解決の問題を表示して解決する \(Oracle ILOM\)」](#)
- [142 ページの「イベントログのエントリを表示する \(Oracle ILOM\)」](#)
- [143 ページの「未解決の問題をモニターする \(Oracle HMP\)」](#)
- [144 ページの「POST でエラーメッセージを表示して解決する」](#)

▼ 未解決の問題を表示して解決する (Oracle ILOM)



Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) の「Open Problems」テーブル経由で問題を発見して解決します。このテーブルでは、発生したハードウェアの問題を特定し、報告された問題を解決するための情報への URL を提供します。このタスクの詳細については、次の手順に従ってください。

始める前に

- Oracle ILOM にログインします。手順は、[46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」](#)を参照してください。

次の手順では、サーバーサービスプロセッサ (SP) とシャーシモニタリングモジュール (CMM) の両方に対する Web インタフェース手順とコマンド行インタフェース (CLI) 手順を示します。

- 未解決の問題を表示して解決するには、望ましい Oracle ILOM ユーザーインタフェースで次の手順を実行します。

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 「Open Problems」をクリックして報告された未解決の問題を表示します。 Web ブラウザで (各エントリの問題の説明に含まれる) 参照ドキュメント URL に移動し、提案された修正アクションを表示させます。 	Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「Open Problems」ページで「More details」リンクをクリックします。
CLI	<ol style="list-style-type: none"> 報告された問題を表示するには、次を入力します。 <code>show /System/Open_Problems</code> Web ブラウザで (各エントリの問題の説明に含まれる) 参照ドキュメント URL に移動し、提案された修正アクションを表示させます。 	次のように入力します。 <code>help /System/Open_Problems</code>

- 参照
- ファームウェアリリース 3.1 または 3.2 の『*Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) ユーザーズガイド*』、「未解決の問題の管理」
 - ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『*Oracle ILOM 構成および保守ガイド*』、「警告通知の設定」

▼ イベントログのエントリを表示する (Oracle ILOM)



サーバーのパフォーマンスのモニターを支援したり、ハードウェア障害のトラブルシューティングを行ったりするには、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) のイベントログを使用します。イベントログは、ハードウェアの障害、ホットスワップおよび取り外しアクション、上限および下限の回復不可能イベント、上限および下限のクリティカルイベントに関する情報を提供します。イベントログを表示する方法の詳細については、次の手順に従ってください。

始める前に

- Oracle ILOM にログインします。手順は、[46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」](#)を参照してください。

次の手順では、サーバーサービスプロセッサ (SP) とシャーシモニタリングモジュール (CMM) の両方に対する Web インタフェース手順とコマンド行インタフェース (CLI) 手順を示します。

- イベントログのエントリを表示するには、望ましい Oracle ILOM ユーザーインタフェースで次の手順を実行します。

インタフェース	手順	詳細
Web	■ 「ILOM Administration」>「Logs」>「Event」をクリックします。	Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「Event Log」ページで「More details」リンクをクリックします。
CLI	■ 次のように入力します。 <code>show /[SP/CMM]/Logs/event/lists</code>	次のように入力します。 <code>help /[SP/CMM]/Logs/event</code>

- 参照
- ファームウェアリリース 3.1 または 3.2 の『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 ユーザーズガイド』、「Oracle ILOM のログエントリの管理」
 - ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、「警告通知の設定」

▼ 未解決の問題をモニターする (Oracle HMP)



- Oracle HMP の `hwmgmtcli` コマンドを使って未解決の問題をモニターします。
Hardware Management Agents のドキュメントや次にある Oracle Hardware Management Pack のドキュメントライブラリに含まれる `hwmgmtcli` コマンドを参照してください。

<http://www.oracle.com/goto/OHMP/docs>

▼ POST でエラーメッセージを表示して解決する

Oracle サーバーは、低レベルの診断を行う POST (電源投入時自己診断) を実行することで、特定のハードウェアコンポーネントの障害を突きとめます。POST でエラーが検出された場合、通常は次の情報が報告されます。

- 検出されたエラーのタイプ
- エラーが発生した時間または場所

POST でエラーメッセージがいくつか検出された場合、最初のエラーの原因のトラブルシューティングと修正を行います。場合によっては、最初のエラーの原因を修正すると、次回の POST 実行時にほかのエラーメッセージも解決されていることがあります。

画面に表示される POST エラーメッセージの詳細については、『*Oracle ILOM 3.1 および Oracle ILOM 3.2.x 搭載サーバー用 Oracle x86 サーバー診断、アプリケーション、およびユーティリティーガイド*』を参照してください。

POST 時に潜在的なハードウェア障害を検出するには、次の手順に従います。

1. **物理的なサーバーに端末を接続するか、あるいは Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) からサーバーへのリモート KVMS リダイレクションセッションを確立します。**

ローカルで端末を接続する方法の詳細については、サーバーの設置ガイドを参照してください。Oracle ILOM 経由でリモート KVMS 接続を確立する方法の詳細については、[47 ページの「KVMS のための Oracle ILOM リモートリダイレクションセッションの起動](#)」を参照してください。

2. **サーバーの電源をリセットします。**

POST シーケンスが開始され、テストの出力が画面上に表示されます。

テストによってエラーが検出された場合、エラーメッセージが画面に表示されます。それ以外の場合はオペレーティングシステムが起動されます。

- 参照
- [59 ページの「サーバーの電源投入と電源切断](#)」
 - 『*Oracle ILOM 3.1 および Oracle ILOM 3.2.x 搭載サーバー用 Oracle x86 サーバー診断、アプリケーション、およびユーティリティーガイド*』、「BIOS POST エラー」

診断の概要

サーバー設置の検証、問題のトラブルシューティング、あるいはハードウェア修復の検証を行うには、Oracle 診断テストを実行します。

次の表に診断ツールの概要を示します。詳細は、<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs> にある『Oracle ILOM 3.1 および Oracle ILOM 3.2.x 搭載サーバー用 Oracle x86 サーバー診断、アプリケーション、およびユーティリティーガイド』を参照してください。

ツール	説明	詳細
U-Boot 診断	<p>U-Boot は、SP をブートするのに十分な機能があることを確認するため、ハードウェアの基本機能を自動的にテストします。</p> <p>U-Boot 診断を起動するには、サーバーを再起動し、「e」、「q」、「n」のいずれかを入力して対応する診断テストを開始します。</p>	『Oracle ILOM 3.1 および Oracle ILOM 3.2.x 搭載サーバー用 Oracle x86 サーバー診断、アプリケーション、およびユーティリティーガイド』の「U-Boot 診断」セクションを参照してください。
Oracle ILOM のブート前メニュー	<p>Oracle ILOM の実行中には修正不可能な Oracle ILOM の問題を修正するには、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) のブート前メニューを使用します。たとえばこのメニューを使えば、Oracle ILOM のブートプロセスに割り込みをかけ、設定を構成し、ブート処理を続行させることができます。Oracle ILOM のブート前メニューを使えば、特に、Oracle ILOM root パスワードの出荷時のデフォルトへのリセット、シリアルポートへの Oracle ILOM アクセスの復元、サービスプロセス (SP) ファームウェアの更新を行うことができます。</p> <p>ブート前メニューを起動するには、SP をリセットしてブートプロセスに割り込む必要があります。ローカルでこれを行うには、サーバーの位置特定ボタンを押したまま、SP をリセットします。リモートでこれを行うには、ブートストラッププロセスの一時停止中に xyzyzy と入力します。</p>	『Oracle ILOM 3.1 および Oracle ILOM 3.2.x 搭載サーバー用 Oracle x86 サーバー診断、アプリケーション、およびユーティリティーガイド』の「Oracle ILOM の「Preboot」メニュー」セクションを参照してください。
BIOS POST	<p>システムの起動時、システム BIOS は電源投入時自己診断テスト (POST) を実行してサーバー上のハードウェアをチェックし、すべてのコンポーネントが存在すること、および適切に機能することを確認します。これは、システムコンソールにこのテストの結果を表示します。</p> <p>電源投入時自己診断を起動してテストの出力を表示するには、サーバーの電源をリセットします。</p>	『Oracle ILOM 3.1 および Oracle ILOM 3.2.x 搭載サーバー用 Oracle x86 サーバー診断、アプリケーション、およびユーティリティーガイド』の「BIOS POST」セクションを参照するか、 144 ページの「POST でエラーメッセージを表示して解決する」 を参照してください。
OracleVTS	Oracle VTS は、ほとんどのハードウェアコントローラおよびデバイスの接続性と機能を検査する、包括的診断ツールです。Oracle VTS は、I/O やホストバスアダプタ (HBA) の問題を診断する際の推奨のテストです。	『Oracle ILOM 3.1 および Oracle ILOM 3.2.x 搭載サーバー用 Oracle x86 サーバー診断、アプリケーション、およびユーティリティーガイド』の「Oracle VTS」セクションを参照してください。

診断の概要

ツール	説明	詳細
	Oracle Solaris オペレーティングシステムが実行されているシステム上で、Oracle VTS を起動します。あるいは、Oracle VTS の ISO イメージを Oracle サーバーや CD/DVD にダウンロードしたあと、Oracle ILOM のリダイレクションを使ってそのイメージをブートすることもできます。	
Run Diagnostics on Boot [†] または PC-Check [‡]	<p>定義済みの一連の診断テストを実行することで、マザーボードコンポーネント、ドライブ、ポート、およびスロットの問題を検出します。</p> <p>これらのテストは、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) の Web インタフェースまたはコマンド行インタフェース (Command-Line interface, CLI) から起動します。</p> <p>Web:</p> <ol style="list-style-type: none"> 「Host Management」>「Diagnostics」をクリックします。 「Run Diagnostics on Boot」リストボックスで、実行する診断のレベル (「Enable」、「Disable」、「Extended」、「Manual」のいずれか) を選択したあと、「Save」をクリックします。 <p>CLI:</p> <p>■ 次のように入力します。</p> <pre>set /HOST/diag [enable disable extended manual]</pre>	<p>『Oracle ILOM 3.1 および Oracle ILOM 3.2.x 搭載サーバー用 Oracle x86 サーバー診断、アプリケーション、およびユーティリティーガイド』の PC-Check または Run Diagnostics on Boot に関するセクションを参照してください。</p> <p>Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、Oracle ILOM の「Diagnostics」Web ページで「More details」リンクをクリックします。</p> <p>Oracle ILOM CLI で次を入力します。</p> <pre>help /HOST/diag</pre>
サービスプロセッサ (Oracle ILOM)	Oracle ILOM がシステムコンポーネントのステータスを表示します。そこで、故障したコンポーネントを交換すれば、通常は問題が解決します。	141 ページの「未解決の問題のモニタリングと解決」を参照してください。

[†]「Run Diagnostics on Boot」という名前は、UEFI BIOS システムの Oracle ILOM で表示されます。

[‡]「PC-Check」というツール名は、レガシー BIOS システムの Oracle ILOM で表示されます。

ファームウェア構成と BIOS 設定のバックアップおよび復元

システムファームウェア、Oracle ILOM 構成、および BIOS 構成をバックアップ、復元、およびレプリケートし、これらの設定を複数のシステムにレプリケートするには、このセクションの手順を使用します。この手順には次の内容が含まれます。

- 147 ページの「[BIOS ファームウェア構成のバックアップ、復元、またはレプリケート \(Oracle ILOM\)](#)」
- 152 ページの「[Oracle ILOM ファームウェア構成のバックアップ、復元、またはレプリケート](#)」
- 157 ページの「[BIOS 設定をバックアップ、復元、および元に戻す \(Oracle System Assistant 1.1\)](#)」

BIOS ファームウェア構成のバックアップ、復元、またはレプリケート (Oracle ILOM)

Oracle サーバーで BIOS ファームウェアの構成が変更した場合、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) を使用して次の操作を行います。

- 現在機能している構成が失われないようにするため、BIOS 構成をバックアップします。詳細は、[148 ページの「現在の BIOS ファームウェア構成をバックアップする \(Oracle ILOM\)」](#)を参照してください。
- BIOS 構成を、最後に保存した、機能している構成または出荷時デフォルト構成に復元することによって、正当と認められていない構成の変更を復旧します。詳細は、[149 ページの「バックアップした BIOS 構成を復元するか、出荷時デフォルトにリセットする \(Oracle ILOM\)」](#)を参照してください。
- ホストでの現在の BIOS 構成設定は、Oracle ILOM によって格納された構成設定と同期していることを検証します。必要に応じて、ホスト BIOS 設定を Oracle ILOM と同期さ

せることができます。詳細は、[150 ページの「ホスト BIOS ファームウェア構成を同期する \(Oracle ILOM\)」](#)を参照してください。

▼ 現在の BIOS ファームウェア構成をバックアップする (Oracle ILOM)



Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) を使用して、現在の BIOS 構成をバックアップすることにより、機能している BIOS 設定の損失を防ぎます。

始める前に

- Oracle ILOM にログインします。手順は、[46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」](#)を参照してください。
- Oracle ILOM で Reset and Host Control (r) および Admin (a) の役割特権を持っていることを確認します。

次に、サーバーサービスプロセッサ (SP) に対する Web の手順とコマンド行インタフェース (CLI) の手順の両方を記します。

- 現在の BIOS 構成のバックアップコピーを作成するには、次のいずれかを行います。

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none">1. 「System Management」>「BIOS」の順にクリックします。2. バックアッププロセスの転送方法を選択します。3. 「Start Backup」をクリックします。	Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「BIOS Configuration」ページで「 <i>More details</i> 」リンクをクリックします。
CLI	<ul style="list-style-type: none">■ 次のように入力します。 <pre>set /SYSTEM/BIOS/Config/dump_uri= transfer_method://username:password@ ipaddress_or_hostname/ directorypath/filename</pre>	この手順の「 関連項目 」セクションを参照してください。

- 参照 ■ ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、BIOS 構成ファイルのバックアップ。

▼ バックアップした BIOS 構成を復元するか、出荷時デフォルトにリセットする (Oracle ILOM)



BIOS ファームウェア構成に対する変更が機能しなくなった場合、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) を使用して、次のいずれかを行います。

- バックアップした BIOS 構成の設定を使用して、ホスト BIOS 構成を復元する。
または
- 出荷時のデフォルト BIOS 設定を使用して、ホスト BIOS 構成を復元する。

始める前に

- Oracle ILOM にログインします。手順は、[46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」](#)を参照してください。
- Oracle ILOM で Reset and Host Control (r) および Admin (a) の役割特権を持っていることを確認します。

次に、サーバーサービスプロセッサ (SP) に対する Web の手順とコマンド行インタフェース (CLI) の手順の両方を記します。

- **バックアップ構成ファイルの設定を使用して、または出荷時デフォルト設定を使用して BIOS 構成を復元するには、次のいずれかを行います。**

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「System Management」>「BIOS」の順にクリックします。 2. 次のいずれかの手順を行います。 	Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「BIOS Configuration」ページで「More details」リンクをクリックします。

インタフェース	手順	詳細
	<ul style="list-style-type: none"> ■ BIOS 構成設定を出荷時設定にリセットするには、「Reset to Defaults」ドロップダウンリストで「Factory」を選択し、「Save」をクリックします。 ■ バックアップした BIOS 構成を復元するには、「Restore」パネルで次の手順を行います。 <ol style="list-style-type: none"> a) 復元オプションを選択します。 b) 転送方法を選択します。 c) バックアップファイルの場所を入力します。 d) 「Start Restore」をクリックします。 	
CLI	1. 次のいずれかの手順を行います。 <ul style="list-style-type: none"> ■ BIOS 構成を出荷時デフォルトにリセットするには、次のように入力します。 <code>set /System/BIOS reset_to_defaults=factory</code> ■ BIOS 構成を最後にバックアップした BIOS 構成に復元するには、次のように入力します。 <code>set load_uri=restore_option/transfer_method: //username:password@ipaddress_or_ hostname/directorypath/filename</code> 	次のように入力します。 <code>help /System/BIOS</code> または この手順の「関連項目」セクションを参照してください。

- 参照
- ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、「BIOS 構成の復元」
 - ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、「BIOS 構成の出荷時のデフォルトへのリセット」。

▼ ホスト BIOS ファームウェア構成を同期する (Oracle ILOM)



ホストデータストア内の BIOS 構成設定が、Oracle ILOM によって格納された設定と同期しなくなった場合、ホスト設定を Oracle ILOM と手動で同期させる必要が生じることがあります。

Oracle ILOM を使用して BIOS の同期ステータスを特定したり、ホスト BIOS 設定を手動で同期したりするには、次の手順に従います。

始める前に

- Oracle ILOM にログインします。手順は、[46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」](#)を参照してください。
- Oracle ILOM で Admin (a) 役割特権を持っていることを確認します。

次に、サーバーサービスプロセッサ (SP) に対する Web の手順とコマンド行インタフェース (CLI) の手順の両方を記します。

- **同期ステータスを特定する、またはホスト BIOS 構成を Oracle ILOM と同期させるには、次のいずれかを行います。**

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「System Management」>「BIOS」の順にクリックします。 2. 次の手順の一方または両方を行います。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 現在の同期ステータスを確認するには、ページの最上部で「Configuration Sync Status」フィールドを探します。 ■ ホスト BIOS 設定を Oracle ILOM と同期させるには、「Host Management」>「Power Control」>「Power Cycle」の順にクリックすることによってホストシステムの電源を再投入します。 	Oracle ILOM 3.2.1 以降のシステムの場合、「BIOS Configuration」ページまたは「Power Control」ページで「 <i>More details</i> 」リンクをクリックします。
CLI	<ol style="list-style-type: none"> 1. 次の手順の一方または両方を行います。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 現在の同期ステータスを表示するには、次のように入力します。 <code>show /System/BIOS/Config</code> ■ ホスト BIOS 設定を Oracle ILOM と手動で同期させるには、次のように入力します。 <code>reset /System</code> 	<p>次のように入力します。</p> <p><code>help /System/BIOS</code></p> <p>または</p> <p>この手順の「関連項目」セクションを参照してください。</p>

- 参照
- ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『*Oracle ILOM 構成および保守ガイド*』、「BIOS 構成の同期」。

Oracle ILOM ファームウェア構成のバックアップ、復元、またはレプリケート

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) ファームウェア構成が Oracle サーバーのサービスプロセッサ (SP) またはシャーシモニタリングモジュール (CMM) で変更した場合、Oracle ILOM を使用して次の手順を行います。

- 現在機能している構成が失われないようにするため、Oracle ILOM 構成をバックアップします。詳細は、[152 ページの「現在の Oracle ILOM ファームウェア構成をバックアップする \(Oracle ILOM\)」](#)を参照してください。
- Oracle ILOM 構成を、最後に保存した、機能している構成または出荷時デフォルト構成に復元することによって、正当と認められていない構成の変更を復旧します。詳細は、[154 ページの「バックアップした Oracle ILOM 構成を復元するか、構成を出荷時デフォルトにリセットする \(Oracle ILOM\)」](#)を参照してください。
- 1) モデル SP または CMM 構成をキャプチャーする、2) ほかの Oracle サーバーでの使用に合わせキャプチャーした構成をカスタマイズする、3) キャプチャーした構成でほかの Oracle サーバーをプロビジョニングすることにより、ほかの Oracle サーバーに現在の Oracle ILOM 構成をレプリケートします。詳細は、[156 ページの「Oracle ILOM ファームウェア構成をほかの Oracle システムにレプリケートする \(Oracle ILOM\)」](#)を参照してください。

▼ 現在の Oracle ILOM ファームウェア構成をバックアップする (Oracle ILOM)



Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) を使用して、現在の Oracle ILOM 構成をバックアップすることにより、サービスプロセッサ (SP) またはシャーシモニタリングモジュール (CMM) 構成設定の損失を防ぎます。

始める前に

- Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) にログインします。手順は、[46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」](#)を参照してください。

- Admin (a)、User Management (u)、Console (c)、Reset and Host Control (r)、および Read-Only (o) の Oracle ILOM での役割に関連付けられた特権を持っていることを確認します。
- 現在機能している SP または CMM 構成のコピーをバックアップするには、次のいずれかの手順を行います。

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「ILOM Administration」>「Configuration Management」>「Backup/Restore System」の順にクリックします。 2. 「Operations」ドロップダウンリストから「Backup」を選択します。 3. バックアッププロセスの転送方法を選択します。 4. 機密データ (パスワードなど) を暗号化するには、パスフレーズを指定して確認します。 注 - バックアップファイルは、手順 4 で指定したパスフレーズを使用して暗号化されます。バックアップしたファイルを復元するために、このパスフレーズがあとで必要になります。 5. 「Run」をクリックしてバックアッププロセスを開始します。 	Oracle ILOM 3.2.1 以降のシステムの場合、「Backup/Restore Configuration」ページで「 <i>More details</i> 」リンクをクリックします。
CLI	<ol style="list-style-type: none"> 1. 次の例のように、SP または CMM 構成のターゲットに移動します。 <code>cd /SP/config</code> または <code>cd /CMM/config</code> 2. バックアップファイルで機密データ (パスワードなど) を暗号化するには、パスフレーズの値を設定します。次に例を示します。 <code>set passphrase=[value]</code> 注 - バックアップファイルは、手順 2 で指定したパスフレーズを使用して暗号化されます。バックアップしたファイルを復元するために、このパスフレーズがあとで必要になります。 3. バックアッププロセスを開始するには、次のように入力します。 <code>set dump_uri=</code> 	この手順の「 関連項目 」セクションを参照してください。

インタフェース	手順	詳細
		<code>transfer_method://username:password@ ipaddress_or_hostname/directorypath/filename</code>

- 参照 ■ ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、Oracle ILOM 構成ファイルのバックアップ。

▼ バックアップした Oracle ILOM 構成を復元するか、構成を出荷時デフォルトにリセットする (Oracle ILOM)



Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) ファームウェア構成に対する変更が機能しなくなった場合、Oracle ILOM を使用して、サービスプロセッサ (SP) またはシャーシモニタリングモジュール (CMM) 構成を 1) バックアップ構成ファイルに保存した設定か、2) 出荷時デフォルト設定のどちらかで復元します。

始める前に

- Oracle ILOM にログインします。手順は、[46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」](#)を参照してください。
- Admin (a)、User Management (u)、Console (c)、Reset and Host Control (r)、および Read-Only (o) の Oracle ILOM での役割に関連付けられた特権を持っていることを確認します。

次に、サーバーのサービスプロセッサ (SP) とシャーシモニタリングモジュール (CMM) に対する Web の手順とコマンド行インタフェース (CLI) の手順の両方を記します。

- バックアップ構成ファイルの設定を使用して、または出荷時デフォルト設定を使用して Oracle ILOM 構成を復元するには、次のいずれかを行います。

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「ILOM Administration」>「Configuration Management」の順にクリックします。 2. 次のいずれかの手順を行います。 <ul style="list-style-type: none"> ■ SP または CMM 構成を出荷時デフォルト設定にリセットするには、「Reset Defaults」タブをクリックします。「Reset Defaults」ページで「Factory」を選択し、「Reset Defaults」をクリックします。 ■ バックアップした SP または CMM 構成を復元するには、次の手順を行います。 <ol style="list-style-type: none"> a) 「Backup/Restore」タブをクリックします。 b) 「Restore」操作を選択します。 c) 転送方法を指定し、必要なファイルパスまたはホスト情報を指定します。 d) バックアップ構成ファイルが暗号化されていた場合、ファイルの暗号化に使用したパスフレーズを指定します。 e) 「Run」をクリックして復元プロセスを開始します。 <p>注 - 復元操作の実行中は、Oracle ILOM SP または CMM は停止します。復元操作が完了すると、セッションは再開されます。</p>	<p>Oracle ILOM 3.2.1 以降のシステムの場合、「Reset Defaults」ページまたは「Backup/Restore」ページで「More details」リンクをクリックします。</p>
CLI	<ol style="list-style-type: none"> 1. 次のいずれかの手順を行います。 <ul style="list-style-type: none"> ■ SP または CMM 構成を出荷時デフォルトにリセットするには、次のように入力します。 <pre>set /[SP/CMM] reset_to_defaults=factory</pre> ■ SP または CMM 構成を最後にバックアップした構成に復元するには、次の手順を行います。 <ol style="list-style-type: none"> a) SP または CMM config ターゲットに移動します。たとえば、<code>cd /[SP/CMM]/config</code> と入力します b) 必要に応じて、パスフレーズの値を設定します。たとえば、<code>set passphrase=value</code> と入力します。 c) 復元操作を開始するには、次のように入力します。 <pre>set load_uri=transfer_method://username:password @ipaddress_or_hostname/directorypath/filename</pre> 	<p>次のように入力します。</p> <pre>help /[SP/CMM]/config</pre> <p>または</p> <p>この手順の「関連項目」セクションを参照してください。</p>

- 参照
- ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、Oracle ILOM XML バックアップファイルの復元。
 - ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、「Oracle ILOM 構成を出荷時のデフォルトにリセットする」。

▼ Oracle ILOM ファームウェア構成をほかの Oracle システムにレプリケートする (Oracle ILOM)



Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) を使用して、1) モデルサーバーの SP または CMM から構成設定をキャプチャーし、2) キャプチャーした構成をほかのサーバーの SP または CMM にレプリケートすることによって、複数の Oracle システムで一貫性を高め、サービスプロセッサ (SP) またはシャーシモニタリングモジュール (CMM) 構成を標準化します。

始める前に

- Oracle ILOM にログインします。手順は、[46 ページの「Oracle ILOM を起動しログインする」](#)を参照してください。
- Admin (a)、User Management (u)、Console (c)、Reset and Host Control (r)、および Read-Only (o) の Oracle ILOM での役割に関連付けられた特権を持っていることを確認します。

これらの手順に従って、あるサーバーの SP または CMM の Oracle ILOM 構成パラメータを、ほかのサーバーの SP または CMM にレプリケートします。

1. **必要に応じて Oracle ILOM 構成パラメータをカスタマイズして、モデル SP または CMM 構成を作成します。**
たとえば、ユーザーアカウントの定義、ネットワーク設定の変更、警告通知の設定、システムポリシーの定義などを行います。
2. **Oracle ILOM で構成のバックアップ操作を使用して、モデル SP または CMM 構成のバックコピーを作成します。**

詳細は、[152 ページの「現在の Oracle ILOM ファームウェア構成をバックアップする \(Oracle ILOM\)」](#)を参照してください。

3. XML エディタを使用して、モデル構成のバックアップコピーを編集します。

編集のガイドライン - 静的 IP アドレスなどのネットワーク設定や、ターゲットサーバーの SP または CMM に適用できないほかの Oracle ILOM 設定には、構成パラメータの編集を検討してください。

詳細は、ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『*Oracle ILOM 構成および保守ガイド*』を参照してください。

4. Oracle ILOM で構成の復元操作を使用することにより、モデル Oracle ILOM 構成のコピーを使用してターゲットサーバーの SP または CMM をプロビジョニングします。

詳細は、[154 ページの「バックアップした Oracle ILOM 構成を復元するか、構成を出荷時デフォルトにリセットする \(Oracle ILOM\)」](#)を参照してください。

▼ BIOS 設定をバックアップ、復元、および元に戻す (Oracle System Assistant 1.1)

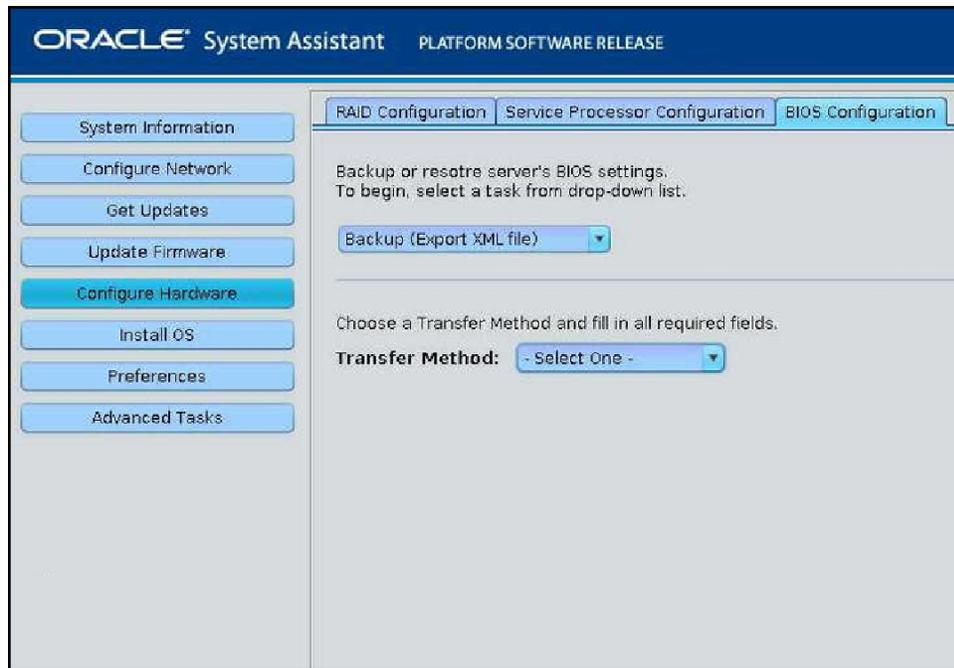


BIOS 構成タスクでは、カスタマイズしたサーバー BIOS 設定をバックアップおよび復元できます。設定は、XML ファイルにバックアップし、XML ファイルから復元できます。サーバーを出荷時のデフォルト設定に復元することもできます。

Oracle System Assistant 1.1 を備えるシステムで BIOS 設定のバックアップと復元を行うには、この手順を使用します。

注記 - Oracle System Assistant が組み込まれたシステムでは、[178 ページの「ハードウェア構成のインポートとエクスポート \(Oracle System Assistant 1.2\)」](#)を参照してください。

1. 「Configure Hardware」タスクボタンをクリックします。
2. 「BIOS Configuration」タブをクリックします。



3. ドロップダウンリストから、バックアップまたは復元オプションを選択します。

バックアップおよび復元のオプションは次のとおりです。

- バックアップ (XML ファイルのエクスポート)
- 復元 (XML ファイルのインポート)
- 出荷時設定に戻す

4. バックアップオプションと復元オプションの場合は、転送方法を選択します。出荷時設定に復元するには、「Factory」ラジオボタンをクリックします。

転送方法のオプションは次のとおりです。

- ローカルドライブ
- TFTP
- FTP
- SFTP
- SCP

- HTTP
 - HTTPS
5. ファイルベースのオプションの場合、ファイルの場所を参照します。
 6. ファイルベースのオプションの場合、「Run」をクリックします。出荷時設定に戻すオプションの場合、「Apply」をクリックします。

BIOS 設定に対する変更は、サーバーの次回のブート中に適用されます。

Oracle System Assistant の使用

このセクションでは、Oracle System Assistant の基本的な使用手順を示します。ここでは、Oracle System Assistant を起動および使用方法や、Oracle System Assistant フラッシュドライブの内容にアクセスする方法について説明します。説明項目は次のとおりです。

- [161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)
- [166 ページの「Oracle System Assistant ユーザーインターフェースの使用」](#)
- [169 ページの「ヘルプおよび ReadMe ファイルを表示する」](#)
- [170 ページの「プラットフォームドキュメントを表示する」](#)
- [172 ページの「Oracle System Assistant の内容を参照する」](#)
- [171 ページの「Oracle System Assistant フラッシュドライブ上のファイルへのアクセス」](#)
- [178 ページの「ハードウェア構成のインポートとエクスポート \(Oracle System Assistant 1.2\)」](#)

Accessing Oracle System Assistant

新しいシステムの運用の準備を行い、ソフトウェアやファームウェアのアップグレードなどの保守タスクを実行するには、Oracle System Assistant を使用します。

Oracle System Assistant を使用するには、システムをリブートしてアクセスする必要があります。

Oracle System Assistant を起動するには、次のいずれかの方法を使用します。

アクセス方法	リンク
起動時に Oracle System Assistant にアクセスします。	40 ページの「起動時に Oracle System Assistant を起動する」
Oracle ILOM を使用して Oracle System Assistant にアクセスします。	41 ページの「Oracle System Assistant を起動する (Oracle ILOM)」

Oracle System Assistant はデフォルトで有効になっていますが、無効にできます。詳細は、[189 ページの「Oracle System Assistant を有効または無効にする \(BIOS\)」](#)を参照してください。

▼ 起動時に Oracle System Assistant を起動する



システムのブート中に、Oracle System Assistant を起動するには、次の手順を使用します。

始める前に ■ [189 ページの「Oracle System Assistant を有効または無効にする \(BIOS\)」](#)。

1. サーバーがスタンバイモードまたは全電力モードであることを確認します。
2. モニター、キーボード、およびマウスが、サーバーにローカル接続されている、またはリモート KVM セッションを通じて接続されていることを検証します。

詳細は、[49 ページの「リモートシステムコンソールリダイレクションセッションの起動」](#)を参照してください。

3. サーバーをブートします。
ブートメッセージがモニターに表示されます。



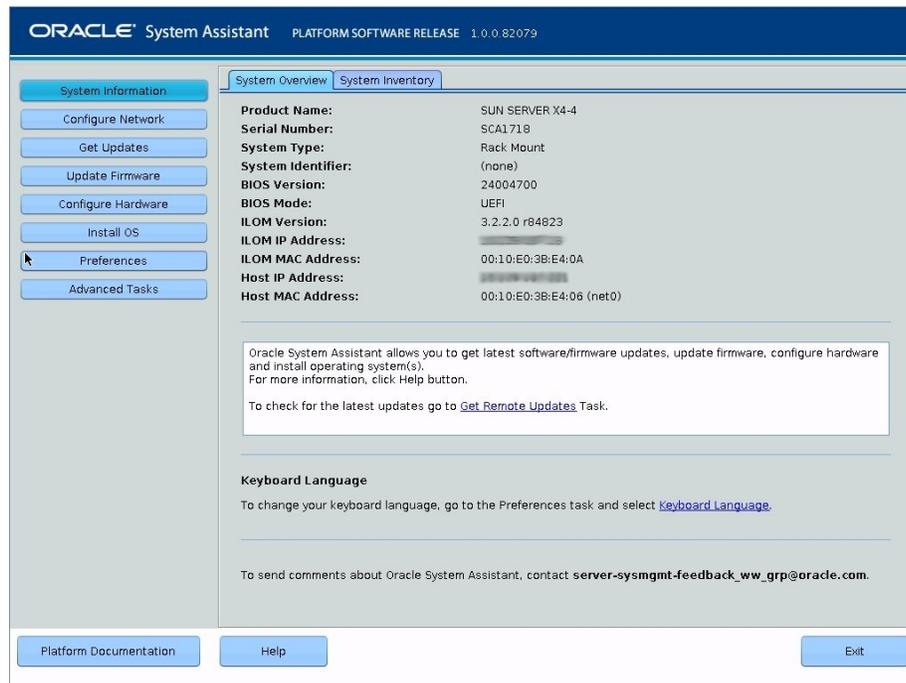
4. プロンプトが表示されたら F9 ファンクションキーを押します。
シリアルキーボードの CTRL-O を押すこともできます。

ヒント - Oracle ILOM リモートコンソールを使用してサーバーにアクセスする場合は、遅延のためにサーバーが信号の受信に失敗する可能性があるため、F9 キーを数回押します。

テキスト [Oracle System Assistant Selected] を含む、チェックポイントメッセージが表示されます。

「Software License Agreement (SLA)」ダイアログボックスが表示されたら、「SLA」ダイアログボックスの「Accept」をクリックして続行します。

「Launching Oracle System Assistant」画面が表示され、続いて「System Overview」画面が表示されます。



- 参照
- 211 ページの「BIOS のキーマッピング」
 - 「Oracle System Assistant のトラブルシューティング」
 - 59 ページの「サーバーの電源投入と電源切断」

▼ Oracle System Assistant を起動する (Oracle ILOM)



サーバーに対して確立されたりモート KVM セッションを通じて、Oracle ILOM から Oracle System Assistant を起動するには、次の手順を使用します。

- 始める前に
- root ユーザーとして、または Admin (a) および Console (c) の役割特権を持つユーザーとして、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) にログインします。
root ユーザーとして Oracle ILOM にログインする手順については、[44 ページの「Oracle ILOM へのアクセス」](#)を参照してください。
 - この手順を行う前に、管理対象のサーバー上のホストオペレーティングシステムの電源を切ってください。そうしないと、Oracle ILOM から、Oracle System Assistant を起動する前にホストオペレーティングシステムの電源を切るように求めるプロンプトが表示されます。
 - Oracle ILOM リモートシステムコンソールを起動および使用するための要件を満たしていることを確認します。
これらの要件の詳細については、[49 ページの「リモートシステムコンソールリダイレクションセッションの起動」](#)を参照してください。

次に、Oracle ILOM SP でのリモート KVM セッションから Oracle System Assistant にアクセスする手順について説明します。

- **Oracle System Assistant を起動するには、望ましい Oracle ILOM ユーザーインターフェースに応じた次の手順を実行します。**

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「System Information」>「Summary」の順にクリックします。 2. Oracle System Assistant の「Launch」ボタンをクリックします。 <p>ヒント - 「Launch」ボタンは、ページの右側に表示される「Actions」パネルに置かれています。</p> <p>注記 - Oracle System Assistant ウィンドウではなく「Software License Agreement (SLA)」</p>	Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「More details」リンクをクリックします。

インタフェース	手順	詳細
	<p>ダイアログボックスが表示された場合は、「SLA」ダイアログボックスで「Accept」をクリックして、Oracle System Assistant の起動を続行します。</p> <p>3. Oracle System Assistant ウィンドウからサーバー設定タスクを実行する方法の詳細については、Oracle System Assistant の個々のページで「Help」ボタンをクリックします。</p>	
CLI	<p>1. 次のように入力します。</p> <pre data-bbox="613 663 1036 688">/HOST/provisioning/start system-assistant</pre> <p>Oracle System Assistant を起動するように求めるメッセージが表示されます。</p> <p>2. 49 ページの「リモートシステムコンソールリダイレクションセッションの起動」の説明に従って、Oracle ILOM リモートコンソールを起動します。</p> <p>3. y と入力して Oracle System Assistant を起動します (または、n と入力して操作を取り消します)。</p> <p>Oracle System Assistant ウィンドウが表示されます。</p> <p>注記 - Oracle System Assistant ウィンドウではなく「Software License Agreement (SLA)」ダイアログボックスが表示された場合は、「SLA」ダイアログボックスで「Accept」をクリックして、Oracle System Assistant の起動を続行します。</p> <p>4. Oracle System Assistant ウィンドウからサーバー設定タスクを実行する方法の詳細については、Oracle System Assistant の個々のページで「Help」ボタンをクリックします。</p>	<p>次のように入力します。</p> <pre data-bbox="1073 674 1317 730">help /HOST/provisioning/system-assistant</pre>

- 参照
- [59 ページの「サーバーの電源投入と電源切断」](#)
 - [49 ページの「リモートシステムコンソールリダイレクションセッションの起動」](#)

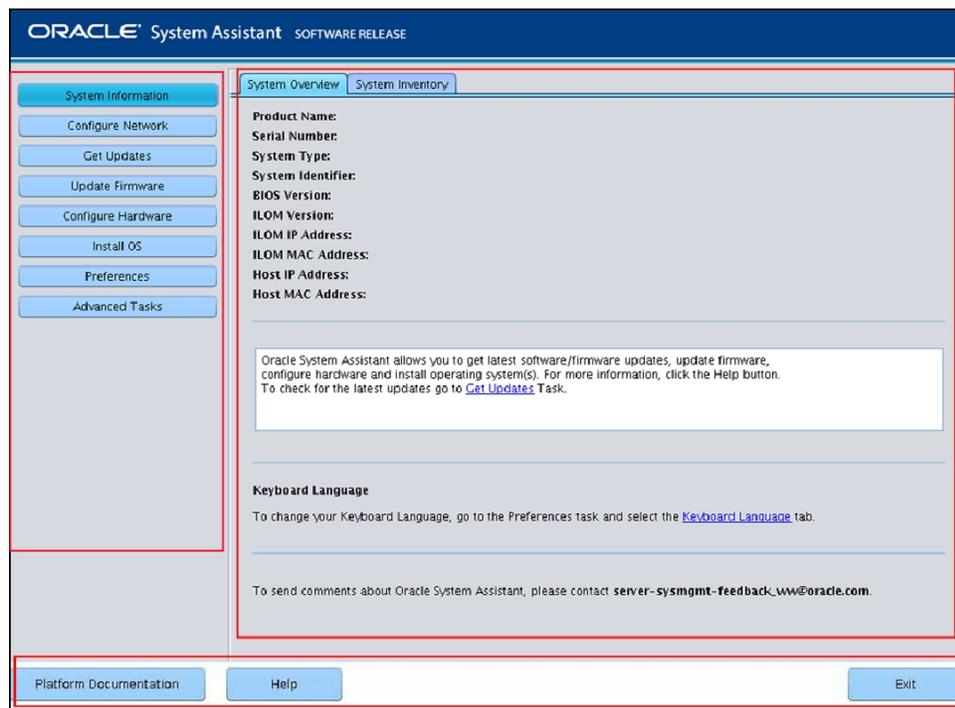
▼ Oracle System Assistant を終了する



1. Oracle System Assistant から「Exit」ボタンをクリックして、アプリケーションセッションを終了します。
2. システムをリブートするか、電源を切断するかを選択します。
Oracle System Assistant が終了します。いずれかのオプションを選択すると、システムがリブートするか、電源が切れます。

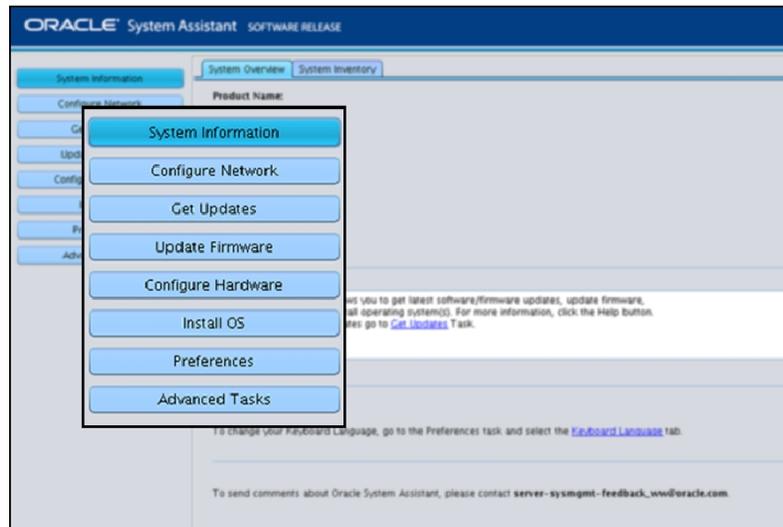
Oracle System Assistant ユーザーインターフェースの使用

Oracle System Assistant のユーザーインターフェース (UI) は、左側のタスクペイン、中央のメインペイン、そして UI の最下部にある「Platform Documentation」、「Help」、「Exit」ペインの 3 つのセクションに分かれています。

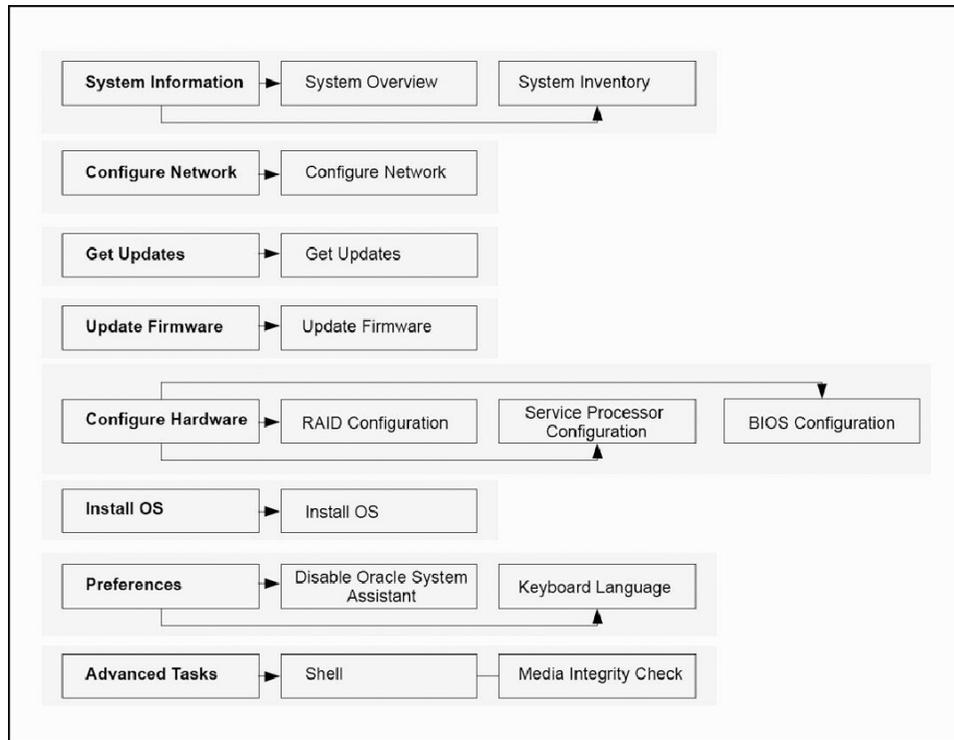


タスクペインとメインペイン

Oracle System Assistant はタスクに基づいて編成されています。インターフェースの左側にあるタスクペインには、8 つのタスクボタンが配置されています。

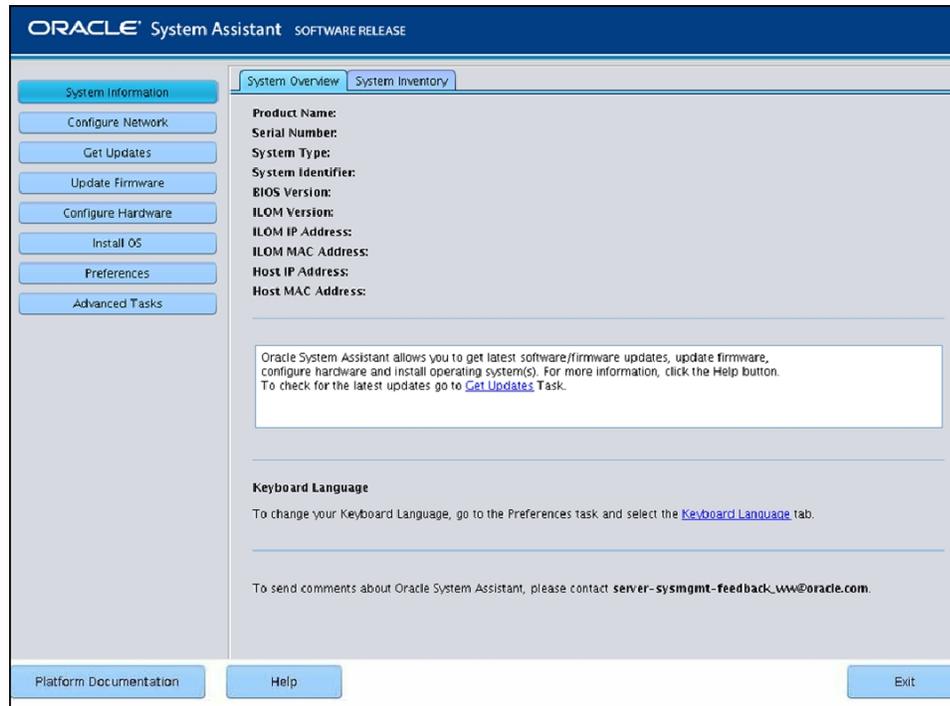


いずれかのタスクボタンをクリックすると、中央のメインペインに内容が表示されます。一部のタスクにはタブが含まれており、それらのタブを使って追加のタスク画面にアクセスできるようになっています。次の図は、Oracle System Assistant の機能やさまざまなサブタブやタスクの構造を示したものです。



Oracle System Assistant のホーム画面

「System Information」の「System Overview」画面が、Oracle System Assistant のホーム画面です。ホーム画面とは Oracle System Assistant の起動時に最初に表示される画面のことであり、そこには、重要なサーバーハードウェア識別子情報やサーバーシステムファームウェアバージョンの概要が表示されます。



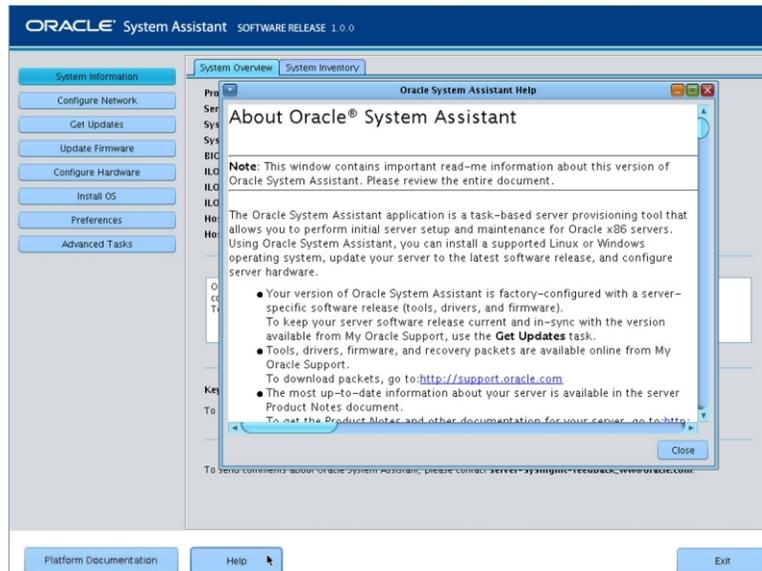
▼ ヘルプおよび ReadMe ファイルを表示する



インストールされているプラットフォームソフトウェアリリースに関する Oracle System Assistant のヘルプおよび ReadMe ファイル (リリースノート) を表示するには、次の手順を使用します。

1. **Oracle System Assistant にアクセスします。**
詳細については、[161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)を参照してください。
「System Overview」タスク画面が表示されます。
2. 「System Overview」タスク画面の下部にある「Help」ボタンをクリックします。

Oracle System Assistant およびプラットフォームソフトウェアリリースに関する情報が記載された ReadMe ファイルが表示されます。



3. 必要に応じてほかのボタンをクリックしてヘルプを表示させます。

▼ プラットフォームドキュメントを表示する



1. Oracle System Assistant にアクセスします。
詳細については、[161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)を参照してください。
「System Overview」タスク画面が表示されます。
2. 画面最下部の「Platform Documentation」ボタンをクリックします。
サーバー固有のドキュメントが新しいウィンドウ内に表示されます。

Oracle System Assistant フラッシュドライブ上のファイルへのアクセス

このセクションでは、Oracle System Assistant フラッシュドライブのファイルにアクセスする手順を示します。説明項目は次のとおりです。

- [171 ページの「オペレーティングシステムからフラッシュドライブのファイルにアクセスする」](#)
- [172 ページの「Oracle System Assistant の内容を参照する」](#)
- [174 ページの「Solaris 10 ホストで Oracle System Assistant フラッシュドライブをマウントする」](#)
- [175 ページの「Oracle VM ホストで Oracle System Assistant フラッシュドライブをマウントする」](#)
- [177 ページの「Linux ホストで Oracle System Assistant フラッシュドライブをマウントする」](#)

Oracle System Assistant フラッシュドライブにはファームウェア、ソフトウェア、および製品ドキュメントのファイルが含まれています。これらにアクセスするには、コマンド行またはファイルブラウザを使ってドライブに移動します。

フラッシュドライブに含まれるシステムドキュメントは、Web ブラウザで表示できます。

注記 - 使用しているサーバーに対応した最新のドキュメントは、サーバーのドキュメントライブラリのページからオンラインで入手することもできます。

Oracle System Assistant の更新を行うたびに、更新されたドキュメントがダウンロードされます。詳細については、[222 ページの「システムソフトウェアおよびファームウェアの更新 \(Oracle System Assistant\)」](#)を参照してください。

▼ オペレーティングシステムからフラッシュドライブのファイルにアクセスする



オペレーティングシステムからフラッシュドライブのファイルにアクセスするには、コマンド行かファイルブラウザを使用します。

- **コマンド行またはファイルブラウザを使ってフラッシュドライブに移動します。**

ドライブのラベルは次のとおりです。

- Oracle Solaris および Linux: ORACLE_SSM
- Oracle VM: ORACLE_SSM
- Windows: ORACLE_SSM

フラッシュドライブにアクセスできない場合:

- フラッシュドライブを表示できない場合、Oracle System Assistant がおそらく無効になっています。[189 ページの「Oracle System Assistant を有効または無効にする \(BIOS\)」](#)を参照してください。
- フラッシュドライブが表示はできるがアクセスはできない場合、そのマウントを行う必要があります。これは、Oracle Solaris 10 および Oracle VM オペレーティングシステムでは必要になる可能性があります。Windows、Linux オペレーティングシステム、Solaris 11 オペレーティングシステムでは通常は不要です。
 - Oracle Solaris: [174 ページの「Solaris 10 ホストで Oracle System Assistant フラッシュドライブをマウントする」](#)
 - Oracle VM: [175 ページの「Oracle VM ホストで Oracle System Assistant フラッシュドライブをマウントする」](#)
 - Linux: [177 ページの「Linux ホストで Oracle System Assistant フラッシュドライブをマウントする」](#)
 - Windows: マウントは不要です。

システムドキュメントを表示するには、/documentation ディレクトリに移動します。

▼ Oracle System Assistant の内容を参照する



1. Oracle System Assistant にアクセスします。

詳細については、161 ページの「[Accessing Oracle System Assistant](#)」を参照してください。

「System Overview」タスク画面が表示されます。

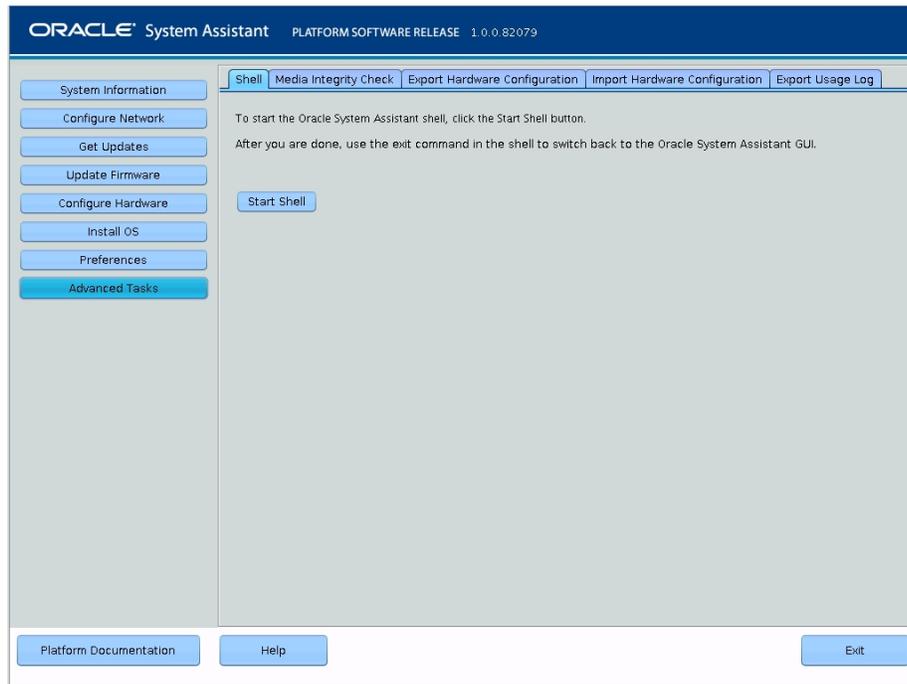


注意 - データの損失や Oracle System Assistant 機能の損失: Oracle System Assistant のシェルを使用するのは上級ユーザーだけにしてください。

2. 「Advanced Tasks」をクリックしてから、「Shell」タブをクリックします。

「Shell」画面が表示されます。

注記 - 「Import」タブと「Export」タブは Oracle System Assistant 1.2 以降でのみ表示されます。



3. 「Start Shell」ボタンをクリックします。

Oracle System Assistant のコマンド行シェルウィンドウが表示されます。

```
Oracle System Assistant
Enterprise Linux Command Line Environment
You are now in the shell with full root-level access!

**Caution**: Potential for loss of data or loss of server system functionality. Root-level access is for advanced users or system administrators only. To quit the shell and return to the Oracle System Assistant application, type 'exit' and press Enter.

-bash-4.1# _
```

4. Oracle System Assistant フラッシュドライブの内容を表示するには、次を入力します。

```
cd /sysroot
```

5. シェルを終了するには、「exit」と入力します。

- 参照
- [161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)
 - [174 ページの「Solaris 10 ホストで Oracle System Assistant フラッシュドライブをマウントする」](#)
 - [175 ページの「Oracle VM ホストで Oracle System Assistant フラッシュドライブをマウントする」](#)
 - [177 ページの「Linux ホストで Oracle System Assistant フラッシュドライブをマウントする」](#)

▼ Solaris 10 ホストで Oracle System Assistant フラッシュドライブをマウントする

サーバーで Oracle Solaris オペレーティングシステムが動作している場合は、ファイルシステムを使用して内容を表示またはアクセスする前に、Oracle System Assistant の USB フラッシュドライブをマウントする必要があります。

1. volfs サービスをオフにするには、次のように入力します。

```
# svcadm disable volfs
```

2. USB フラッシュドライブを識別するには、次のように入力します。

```
# rmformat -l
```

デバイスのリストが表示されます。

```
Looking for devices...
```

```
1. Logical Node: /dev/rdisk/clt0d0p0
Physical Node:
/pci@0,0/pci108e,484e@1a/hub@1/storage@2/disk@0,0
Connected Device: ORACLE   SSM   PMAP
Device Type: Removable
#
```

3. USB フラッシュドライブを読み取り専用モードで手動でマウントするには、次を入力します。

```
# mount -F pcfs -o ro /dev/dsk/clt0d0p1 /mnt
```

4. Oracle Solaris の内容を取得するには、次を入力します。

```
# cd /mnt/Solaris
```

```
# ls
```

次のように表示されます。

```
10U10 11
```

```
#
```

5. Oracle System Assistant デバイスをアンマウントするには、次を入力します。

```
# cd /
```

```
# umount /mnt
```

6. volfs を再起動するには、次を入力します。

```
# svcadm enable volfs
```

Oracle System Assistant の USB フラッシュドライブがマウントされます。

▼ Oracle VM ホストで Oracle System Assistant フラッシュドライブをマウントする

サーバーで Oracle VM が動作している場合は、ファイルシステムを使用して内容を表示またはアクセスする前に、Oracle System Assistant の USB フラッシュドライブをマウントする必要があります。

1. Oracle VM サーバーに root ユーザーとして接続します。
2. Oracle System Assistant の USB フラッシュドライブのデバイスマッピングを確認するには、`lsscsi` コマンドを入力します。

このコマンドによるサーバー上のストレージデバイスの表示例は、次のとおりです。

```
# ls SCSI
[0:0:0:0] disk SEAGATE ST360057SSUN600G 0805 /dev/sda
[0:0:1:0] disk SEAGATE ST32000SSUN2.0T 0313 /dev/sdb
[0:0:2:0] disk SEAGATE ST32000SSUN2.0T 0313 /dev/sdc
[0:0:3:0] disk ATA INTEL SSDSA2BZ30 0362 /dev/sdd
[0:0:4:0] enclosu ORACLE BLADE14 0903 -
[7:0:0:0] disk SUN StorEdge 3511 421F /dev/sde
[7:0:0:1] disk SUN StorEdge 3511 421F /dev/sdf
[7:0:0:2] disk SUN StorEdge 3511 421F /dev/sdg
[7:0:0:3] disk SUN StorEdge 3511 421F /dev/sdh
[9:0:0:0] disk SUN CSM200_R 0660 /dev/sdi
[9:0:0:1] disk SUN CSM200_R 0660 /dev/sdj
[9:0:0:2] disk SUN CSM200_R 0660 /dev/sdk
[9:0:0:3] disk SUN CSM200_R 0660 /dev/sdl
[9:0:0:4] disk SUN CSM200_R 0660 /dev/sdm
[9:0:0:5] disk SUN CSM200_R 0660 /dev/sdn
[11:0:0:0] disk ORACLE SSM PMAP /dev/sdo
```

Oracle System Assistant の USB フラッシュドライブは、ORACLE SSM というラベルの付いたディスクであり、この例では /dev/sdo にマップされています。

3. Oracle System Assistant の USB デバイス上のパーティションの名前を確認するには、`fdisk -l /dev/sdo` コマンドを入力します。

このコマンドで生成される出力例は、次のとおりです。

```
# fdisk -l /dev/sdo
Disk /dev/sdo: 3880 MB, 3880452096 bytes
4 heads, 32 sectors/track, 59211 cylinders
Units = cylinders of 128 * 512 = 65536 bytes

Device Boot Start End Blocks Id System
/dev/sdo1 * 17 57344 3668992 ef EFI (FAT-12/16/32)
```

4. (オプション) Oracle System Assistant の USB フラッシュドライブをマウントするときに使用するマウントポイントを作成します。

次に例を示します。

```
# mkdir /mnt/OSA
```

5. Oracle System Assistant の USB デバイスをマウントするには、ステップ 3 で確認したパーティション名、および既存のマウントポイントまたはステップ 4 で作成したマウントポイントを使用します。

マウントコマンドの例は次のとおりです。

```
# mount -t vfat -o codepage=850 /dev/sdo1 /mnt/OSA
```

```
# ls /mnt/OSA
boot      Firmware  LiveOS    OracleVM  syslinux.cfg
Documentation ldlinux.sys manifest.xml readme.html Versions.txt
EFI       Linux     Oracle    Solaris   Windows
#
```

指定された mount の場所に、Oracle System Assistant の USB フラッシュドライブがマウントされます。

▼ Linux ホストで Oracle System Assistant フラッシュドライブをマウントする

サーバーで Linux オペレーティングシステムが動作している場合は、ファイルシステムを使用して内容を表示またはアクセスする前に、Oracle System Assistant の USB フラッシュドライブをマウントしなければいけない可能性があります。

- Oracle System Assistant の USB フラッシュドライブをマウントするには、次に示すコマンドを入力します。

```
#>mkdir /mnt/OSA
#>mount LABEL=ORACLE_SSM /mnt/OSA
#>cd /mnt/OSA
#>ls -l
total 916
drwxr-xr-x 2 root root 4096 Nov 21 07:42 boot
drwxr-xr-x 3 root root 4096 Nov 21 07:42 Documentation
drwxr-xr-x 3 root root 4096 Oct 26 21:05 EFI
drwxr-xr-x 16 root root 4096 Nov 21 07:42 Firmware
-r-xr-xr-x 1 root root 15218 Oct 26 19:10 ldlinux.sys
drwxr-xr-x 5 root root 4096 Nov 21 07:41 Linux
drwxr-xr-x 2 root root 4096 Oct 26 21:05 LiveOS
-rwxr-xr-x 1 root root 787672 Nov 21 08:17 manifest.xml
drwxr-xr-x 2 root root 4096 Nov 21 08:00 Oracle
-rwxr-xr-x 1 root root 78879 Nov 21 07:42 readme.html
drwxr-xr-x 4 root root 4096 Nov 21 07:41 Solaris
-rwxr-xr-x 1 root root 263 Oct 26 21:05 syslinux.cfg
-rwxr-xr-x 1 root root 3755 Nov 21 07:42 Versions.txt
drwxr-xr-x 3 root root 4096 Nov 21 07:42 VMware
drwxr-xr-x 4 root root 4096 Nov 21 07:42 Windows
#>
```

指定された場所に、Oracle System Assistant の USB フラッシュドライブがマウントされます。

ハードウェア構成のインポートとエクスポート (Oracle System Assistant 1.2)

このセクションでは、RAID、Oracle ILOM、および BIOS ハードウェア構成情報をインポートおよびエクスポートする手順について説明します。

この機能を使用すると、構成情報をバックアップおよび復元し、別のシステムに移行できます。

すべての情報は、選択した各構成 (RAID、Oracle ILOM、および BIOS) につき 1 つの xml ファイルにインポートおよびエクスポートされます。これらの xml ファイルは 1 つの zip ファイルに格納されます。

- エクスポート時に、Oracle System Assistant では選択された各構成について、xml ファイルを含む zip ファイルを 1 つ作成します。
- インポート時に、Oracle System Assistant では選択された各構成について、xml ファイルを含む zip ファイルを 1 つ必要とします。

▼ ハードウェア構成のエクスポート (Oracle System Assistant 1.2)



このタスクを使用して RAID、Oracle ILOM、および BIOS 構成情報を xml ファイルにエクスポートし、これをサーバーにインポートして対応する構成をレプリケートできます。xml ファイルは単一の zip ファイルで提供されます。

エクスポートされた構成は次に使用できます。

- システムをバックアップするため、構成をエクスポートして、その zip ファイルを元のシステムにインポートして設定を復元します。
- 別のシステムの設定をレプリケートするため、構成をエクスポートして、その zip ファイルを新しいシステムにインポートします。

設定をインポートするには、[179 ページの「ハードウェア構成のインポート \(Oracle System Assistant 1.2\)」](#)を参照してください。

1. 「Advanced」>「Export Hardware Configuration」を選択します。
「Export Hardware Configuration」ウィンドウが表示されます。
2. インポートする構成を選択します。
「Service Processor Configuration」を選択した場合は、パスフレーズを入力して確認します。
3. 転送方法を選択します。
選択内容に応じて、追加のフィールドが表示されます。必須の詳細を入力します。
4. 「Export」を選択します。
システムによって xml ファイルが作成され zip ファイルに格納されたあと、その zip ファイルが転送方法で選択した宛先に書き込まれます。

▼ ハードウェア構成のインポート (Oracle System Assistant 1.2)



このタスクを使用して RAID、Oracle ILOM、および BIOS 構成情報を xml ファイルからサーバーにインポートします。インポートを実行すると、xml ファイル内の情報に一致するよう対応するハードウェアが構成されます。



注意 - サービスの喪失: xml ファイル内の情報が正しく構成されていなかったり、対応しないシステムからエクスポートした xml ファイルを使用した場合、サーバーが無効になる可能性があります。

xml ファイルは、[178 ページの「ハードウェア構成のエクスポート \(Oracle System Assistant 1.2\)」](#)に記載のハードウェア構成エクスポート機能を使用して生成する必要があります。

始める前に インポートする構成ごとに 1 つの xml ファイルが必要で、これらは 1 つの zip ファイルに格納されている必要があります。

xml ファイルの内容は正確で完全である必要があります。ファイルのエクスポートに使用するシステムは、ファイルのインポート先システムと一致している必要があります。次が同じである必要があります。

- モデル番号
- Oracle ILOM および BIOS のバージョン
- ディスクドライブの構成
- オプションカード

1. **「Advanced」>「Import Hardware Configuration」を選択します。**

「Import Hardware Configuration」ウィンドウが表示されます。

2. **インポートする構成を選択します。**

「Service Processor Configuration」を選択した場合は、パスフレーズを入力して確認します。

3. **転送方法を選択します。**

選択内容に応じて、追加のフィールドが表示されます。必須の詳細を入力します。

4. **「Import」を選択します。**

転送方法で特定される zip 内の xml ファイルから構成情報がインポートされます。

ファイルが適切に構成されていない場合、警告メッセージが表示され、確認または終了の選択を求められます。

Oracle System Assistant の管理

このセクションでは、Oracle System Assistant の保守手順を示します。説明項目は次のとおりです。

- [181 ページの「Oracle System Assistant の更新の準備」](#)
- [187 ページの「Oracle System Assistant の有効化と無効化」](#)
- [190 ページの「Oracle System Assistant のキーボード言語を設定する」](#)
- [191 ページの「使用ログのエクスポート \(Oracle System Assistant 1.2\)」](#)

Oracle System Assistant の更新の準備

Oracle System Assistant を使用してシステムを更新する前に、次を実行する必要があります。

- ネットワークインタフェースを構成します。
[181 ページの「ネットワークインタフェース設定を構成する \(Oracle System Assistant\)」](#)を参照してください。
- My Oracle Support を構成し、更新を取得するための資格をサーバーに付与します。
[184 ページの「Oracle System Assistant の更新を有効にするように MOS を構成する」](#)を参照してください。

▼ ネットワークインタフェース設定を構成する (Oracle System Assistant)



Oracle System Assistant で外部ネットワークへのアクセス時に使用されるポートのネットワーク設定を構成するには、次の手順を使用します。

Oracle System Assistant が起動すると、Net0 上で DHCP への接続が試みられます。

- Net0 が DHCP に対応したネットワークに接続されている場合は、処理が成功します。
- Net0 が DHCP に対応したネットワークに接続されていない場合は、ネットワーク接続を構成する必要があります。

ネットワークインタフェースの数はサーバーのハードウェアによって異なります。取り付けられている最大数まで Net0、Net1 と指定されます。

注記 - 機能するネットワーク接続が Oracle System Assistant になければ、「Get Updates」タスクを使用することはできません。

始める前に ネットワーク情報 (静的 IP 用のネームサーバーやプロキシ情報など) を取得します。

1. **Oracle System Assistant にアクセスします。**

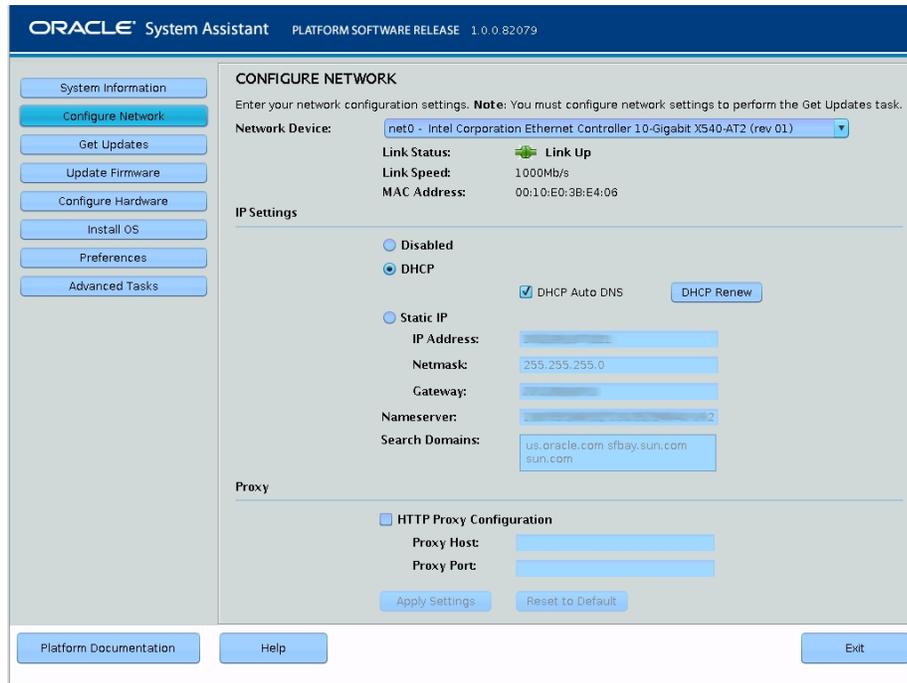
詳細は、[161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)を参照してください。

2. **「Configure Network」タスクボタンをクリックします。**

認証を必要とするプロキシ経由でサーバーがネットワークに接続している場合:

- Oracle System Assistant 1.1 の場合、サーバーに到達できないことを示すメッセージが表示されます。
- Oracle System Assistant 1.2 の場合、認証サーバーのユーザー名とパスワードを要求されます。

「Configure Network」画面が表示されます。



3. ドロップダウンリストからネットワークインタフェースデバイスを選択します。

ドロップダウンリストで、サーバーに表示されるデバイスを特定します。

4. ネットワークインタフェースデバイスのアドレス設定を構成します。

次の方法のいずれかを選択して、サーバーの IP アドレスを特定します。

- **Disabled** – このデバイスのネットワークアクセスを許可しません。
- **DHCP** – 動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用して IP アドレスを自動的にサーバーに割り当てます。このオプションが選択されているときに、「Auto DNS via DHCP」オプションを選択すると、ネームサーバーの IP アドレスおよび検索ドメインを自動的に割り当てることができます。「Auto DNS via DHCP」オプションを選択しない場合は、次の情報も指定する必要があります。
 - ネームサーバーの IP アドレス
 - (オプション) 検索ドメイン
- **Static** – 固定 IP アドレスをサーバーに割り当てます。次の情報を指定する必要があります。

- サーバーの IP アドレス
- Netmask
- Gateway
- **HTTP Proxy Configuration** – プロキシサーバーを使用する場合に、このオプションを選択します。次の情報を指定する必要があります。
 - プロキシホスト
 - プロキシポート

注記 - 「DHCP Renew」ボタンをクリックすると、Oracle System Assistant が DHCP アドレスの取得を試みます (Oracle System Assistant 1.2 のみ)。

5. 「Apply Network Settings」をクリックします。

ネットワーク設定を適用し、その他のすべてのインタフェースを無効にするかどうかの確認を求めめるプロンプトが表示されます。
6. 確認ダイアログボックスで、「Yes」をクリックして続行します。

参照 ■ [161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)

▼ Oracle System Assistant の更新を有効にするように MOS を構成する



プラットフォームソフトウェアのリリース更新をダウンロードする前に、Oracle System Assistant は、サーバーに My Oracle Support (MOS) からダウンロードを入手する資格があることを検証します。更新を実行するには、サーバーのシリアル番号が有効な MOS Customer Support Identifier (CSI) に関連付けられている必要があります。この関連付けが行われていないと、「Get Updates Sign-in」画面で更新プロセスが停止してしまいます。



MOS でサーバーと CSI を関連付けるには、この手順を使用します。

注記 - これは 1 回かぎりの設定手順です。関連付けが行われると、構成が永続化されます。

始める前に 次のいずれかを持っている必要があります。

- CSI (Customer Support Identifier)。これは Oracle Premier Support for Systems の購入確認書に印刷されているか、サーバーの保証契約書で入手できます。
- サーバーのシリアル番号。これは Oracle System Assistant の「System Overview」タブで入手できます。
- 組織名。

1. <http://support.oracle.com> で MOS にログインします。
2. 「More」ドロップダウンリストから「Settings」タブを選択します。
3. 左側のペインの「Personal」の下で、「Accounts/Privileges」をクリックします。
4. 「Support Identifiers」ウィンドウで「Request Access」ボタンをクリックします。「Request Access to a Support Identifier」ウィンドウが表示されます。

5. 次のいずれかを実行します。

- CSI を持っている場合は、それを「Request Access」タブの「Support Identifier」フィールドに入力して、「Request Access」をクリックします。



承認が必要となる場合がありますが、一度アクセスが許可されると、CSI に関連付けられたすべてのサーバーで Oracle System Assistant の更新の取得機能が有効になります。

注記 - CSI を取得できない場合、または Oracle System Assistant を使用してサーバーの更新をダウンロードできない場合は、Oracle サポートにお問い合わせください。

- サーバーのシリアル番号はあるが、CSI を持っていない場合は、次を実行します。

a. 「Find a Support Identifier」タブをクリックします。



b. 「System Serial Number」フィールドにサーバーのシリアル番号を入力します。

c. 「Organization」フィールドに組織名を入力します。

d. 「Search」をクリックします。

- e. 検索結果の表内の CSI を強調表示して、「Request Access」をクリックします。

承認が必要となる場合がありますが、一度アクセスが許可されると、CSI に関連付けられたすべてのサーバーで Oracle System Assistant の更新の取得機能が有効になります。

注記 - CSI を取得できない場合、または Oracle System Assistant を使用してサーバーの更新をダウンロードできない場合は、Oracle サポートにお問い合わせください。

Oracle System Assistant の有効化と無効化

このセクションでは、Oracle System Assistant の動作やステータスに影響を及ぼすタスクを実行する手順を示します。説明項目は次のとおりです。

- [187 ページの「Oracle System Assistant を無効にする \(Oracle System Assistant\)」](#)
- [189 ページの「Oracle System Assistant を有効または無効にする \(BIOS\)」](#)

▼ Oracle System Assistant を無効にする (Oracle System Assistant)

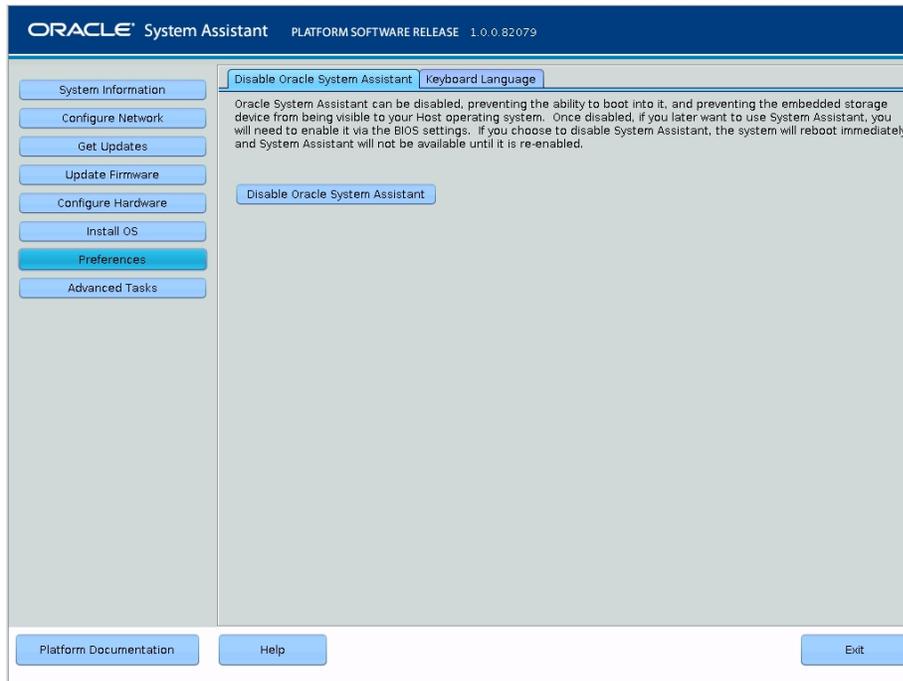


Oracle System Assistant を無効にするには、この手順を使用します。この場合、それはブート不可能となり、ホストのオペレーティングシステムから USB ドライブのファイルにアクセスできなくなります。これは、セキュリティ上の理由により望ましいことがあります。

Oracle System Assistant を再度有効化するには、[189 ページの「Oracle System Assistant を有効または無効にする \(BIOS\)」](#)の説明に従って BIOS 設定ユーティリティの「Boot」メニューを使用します。

1. 「Preferences」をクリックしてから、「Disable Oracle System Assistant」タブをクリックします。

「Disable Oracle System Assistant」画面が表示されます。



2. 「Disable Oracle System Assistant」をクリックします。

3. 確定するには「Yes」をクリックします。

システムがリブートします。

- 参照
- [161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)
 - [216 ページの「UEFI または Legacy ブートモード \(BIOS\) を選択する」](#)
 - [189 ページの「Oracle System Assistant を有効または無効にする \(BIOS\)」](#)

▼ Oracle System Assistant を有効または無効にする (BIOS)

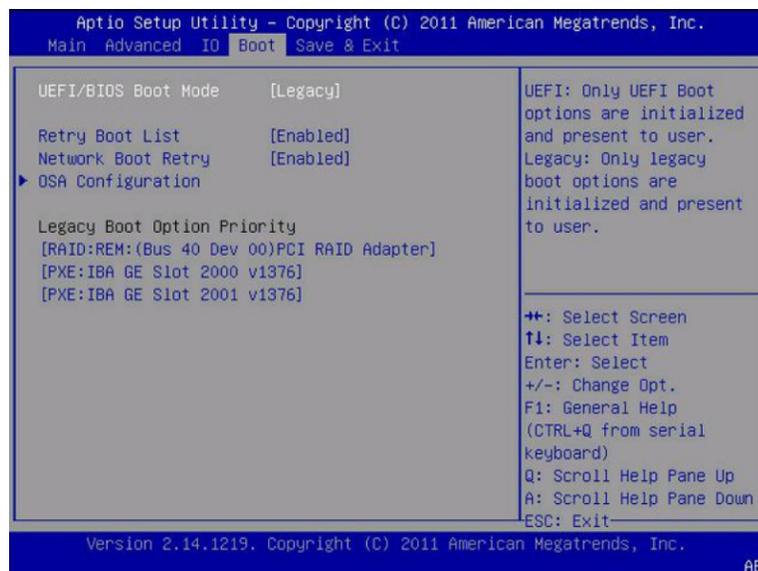


Oracle System Assistant を無効または有効にするには、BIOS 設定ユーティリティの「Boot」メニューの Oracle System Assistant 構成設定を使用します。

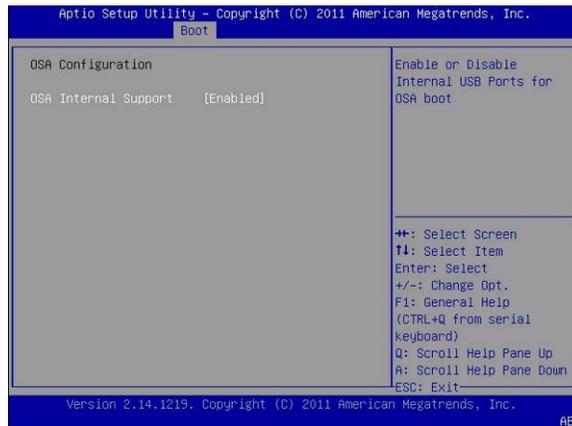
Oracle System Assistant を無効にすると、それはブート不可能となり、ホストのオペレーティングシステムから USB ドライブのファイルにアクセスできなくなります。これは、セキュリティ上の理由により望ましいことがあります。

Oracle System Assistant の USB デバイスを有効または無効にするには:

1. サーバーの BIOS 設定ユーティリティにアクセスします。
206 ページの「BIOS 設定ユーティリティのメニューにアクセスする」を参照してください。
2. 「Boot」画面に移動します。



3. 「OSA Configuration」画面に移動します。



4. 「OSA Internal Support」設定で「Enabled」(または「Disabled」) を選択します。
Enter キーを押します。
5. BIOS ユーティリティを保存して終了するには、F10 キーを押します。
サーバーがブートします。

参照 ■ [56 ページの「BIOS 設定ユーティリティへのアクセス」](#)

▼ Oracle System Assistant のキーボード言語を設定する

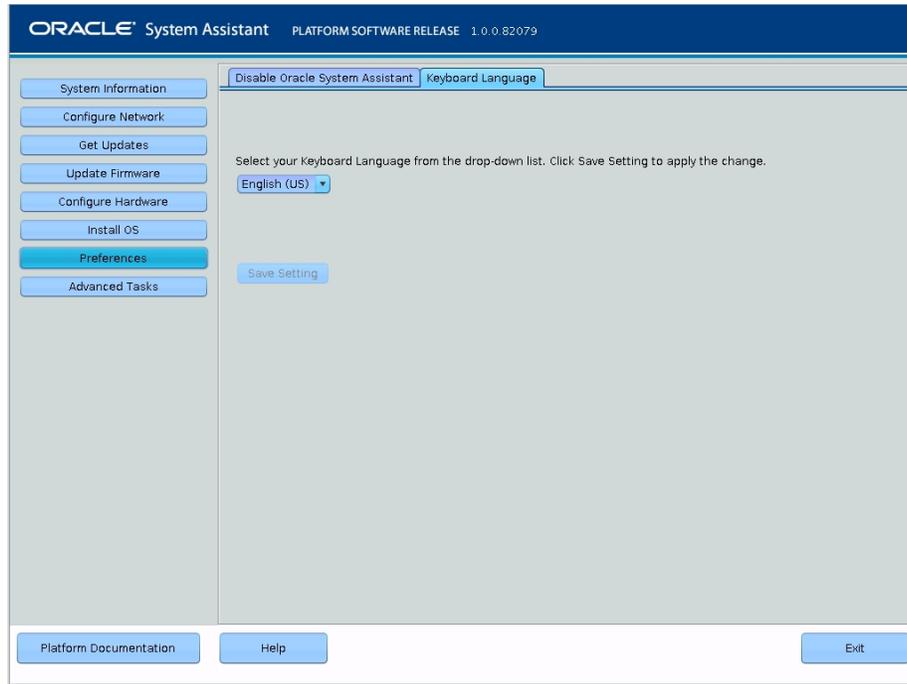


キーボード言語タスクでは、Oracle System Assistant のキーボード言語を選択できます。

注記 - 「Keyboard Language」タスクの設定は Oracle System Assistant にのみ適用されます。これは、シェルコマンド行インタフェースには適用されませんし、サーバーオペレーティングシステムのキーボード言語を設定することはありません。

Oracle System Assistant のキーボード言語を設定するには、次の手順を使用します。

1. 「Preferences」をクリックしてから、「Keyboard Language」タブをクリックします。
「Keyboard Language」画面が表示されます。



2. ドロップダウンリストから、キーボード言語を選択します。
オプションとして、英語 (US)、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、スウェーデン語があります。
3. 「Save Setting」をクリックします。

参照 ■ [161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)

▼ 使用ログのエクスポート (Oracle System Assistant 1.2)



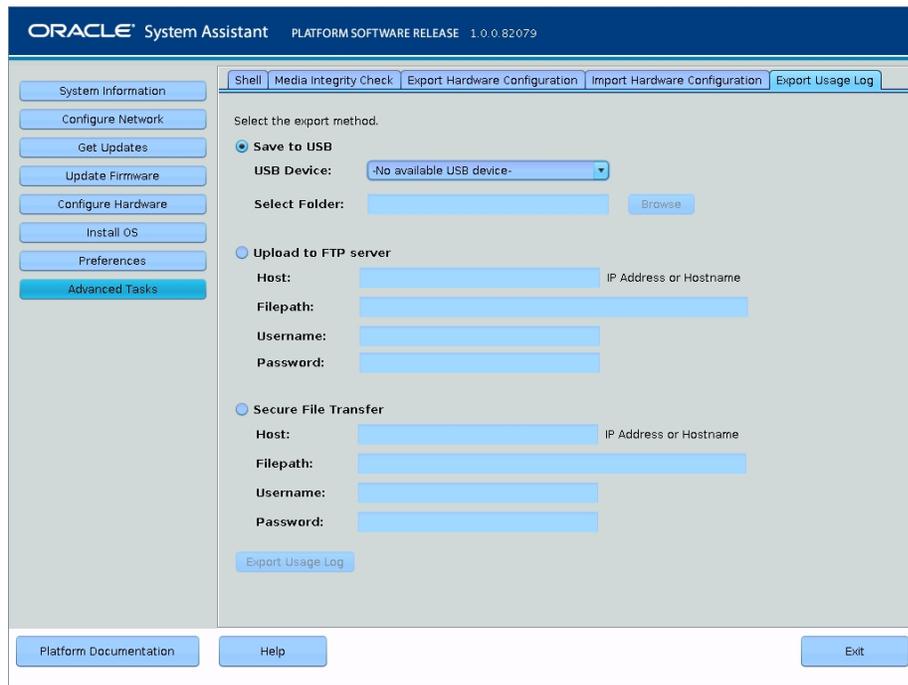
Oracle System Assistant リリース 1.2 では、Secure Copy (SCP) を使用すると、使用ログファイルを USB ドライブ、FTP サーバー、またはネットワークの場所にエクスポートできます。

これらのファイルには各 Oracle System Assistant タスクの追跡情報が含まれています。これらは問題の修正時に便利です。



注意 - 情報セキュリティ。 使用ログファイルにはセキュア情報が含まれることがあるため、認証されていないアクセスから保護する必要があります。

1. 「Advanced Tasks」ボタンをクリックしてから、「Export Usage Log」タブをクリックします。「Export Usage Log」ページが表示されます。



2. エクスポート方法 (宛先) を選択し、必須情報を入力します。
ログは Oracle System Assistant USB ドライブに保存できません。
3. 「Export Usage Log」ボタンをクリックします。
Oracle System Assistant によって、構成した場所にファイルがエクスポートされます。

Oracle System Assistant のトラブルシューティング

Oracle System Assistant が起動しない場合やサーバーから使用不可の場合、あるいはサーバーにインストールされているか不明な場合、このセクションの手順を使って Oracle System Assistant のトラブルシューティングや検証、および機能の復元を行なってください。

このセクションには、次のタスクが含まれています。

- [194 ページの「 Oracle System Assistant のトラブルシューティングや確認を行う」](#)
- [197 ページの「 Oracle System Assistant メディアの整合性をチェックする」](#)
- [198 ページの「 Oracle System Assistant ソフトウェアの復元」](#)

Oracle System Assistant のトラブルシューティングや確認を行う際には、次の点を考慮してください。

- Oracle System Assistant は各サポート対象サーバーにインストールされます。ただし、Oracle System Assistant のインストールを拒否することもできます。この拒否オプションが発生するのは、サーバーの注文処理中です。
- Oracle System Assistant を起動するには、サーバーの起動中に F9 キーを押します。これを行うには、次のいずれかの方法を使用してサーバーのブートプロンプトを確認し、それに応答する必要があります。KVM が接続されたサーバーの近くでそれを手動で起動して操作することもできますし、リモートコンソールアプリケーションを使って Oracle ILOM からリモートでそれを起動して操作することもできます。

起動方法によらず、サーバーのブートが必要となります。サーバーを Oracle System Assistant にブートする必要があります。

- Oracle System Assistant は組み込み USB ドライブにインストールされますが、このドライブは、サーバーのオペレーティングシステムにはストレージデバイスとして表示されます。このデバイスはファイルブラウザやコマンド行インターフェースで表示できるので、このデバイスに移動して Oracle System Assistant のファイルシステムを参照することができます。
- Oracle System Assistant は物理デバイス上に存在しているため、サーバー内部にアクセスして USB ドライブが存在しているかチェックすることができます。

- 安全性およびセキュリティーの機能を使えば、USB ドライブを無効化してオフライン状態に移行させることができますが、この状態では、オペレーティングシステム、Oracle ILOM、または BIOS 設定ユーティリティーから表示もアクセスもできません。デバイスがこの無効状態になると Oracle System Assistant を起動できなくなりますが、これを有効化してオンライン状態に戻すには、サーバーの BIOS 設定ユーティリティーを使用する必要があります。
- Oracle System Assistant が起動する場合、それはサーバーにインストールされており、BIOS 設定ユーティリティーで有効化されており、破壊されていません。
- Oracle System Assistant が破壊された場合、サーバーに最初インストールされていたのであれば、Oracle System Assistant のイメージを復旧することができます。

▼ Oracle System Assistant のトラブルシューティングや確認を行う



Oracle System Assistant は、ユーザーのサーバーでサポートされているので、拒否しないかぎりサーバーにプリインストールされています。Oracle System Assistant がファイルシステムから見えない場合や起動できない場合、それがオフラインになっているか、破壊されているか、あるいはインストールされていない可能性があります。

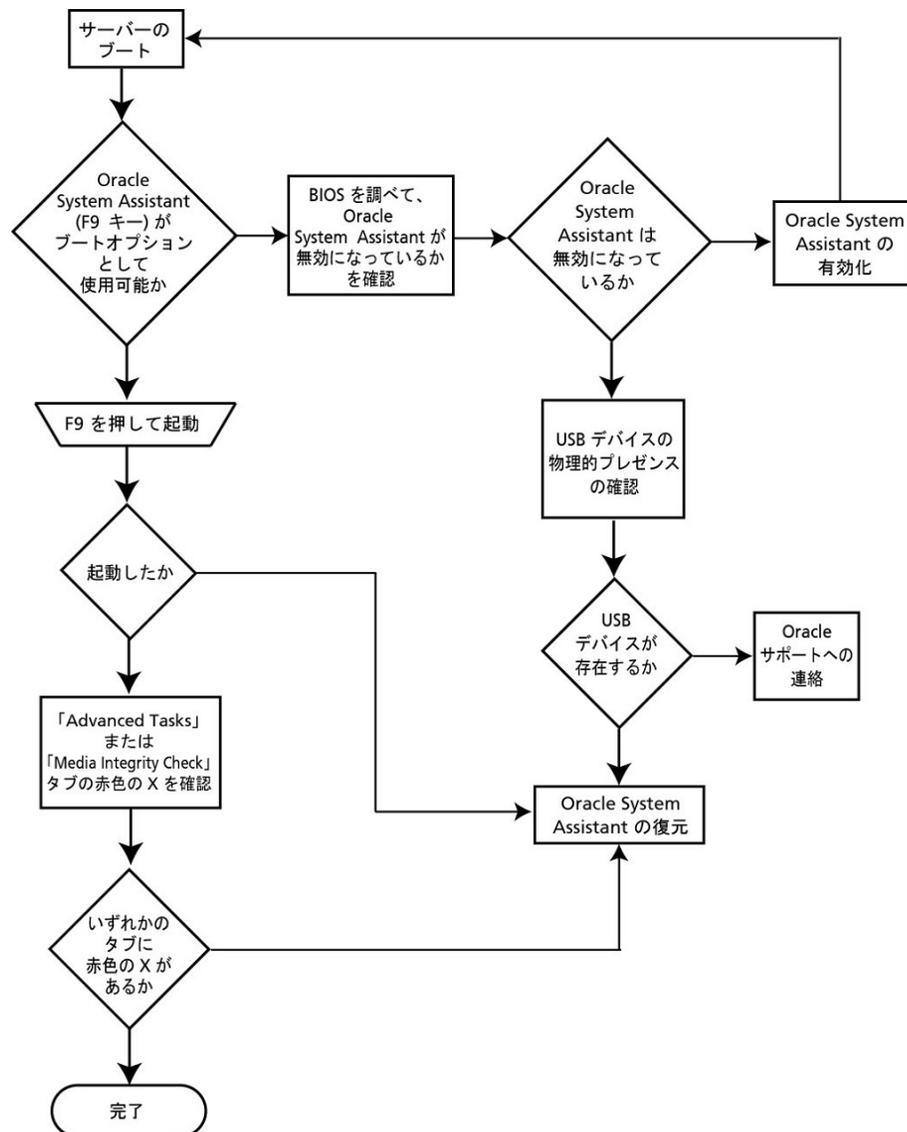
Oracle System Assistant の状態を判定したり、それがサーバーにインストールされていることを確認したりするには、この手順を使用します。

始める前に ■ この手順はローカルで実行します。

1. Oracle System Assistant を起動します。

Oracle System Assistant を起動するには、[40 ページの「起動時に Oracle System Assistant を起動する」](#)の手順に従ってサーバーをブートします。

次のフローチャートと情報をトラブルシューティング作業のガイドとして使用してください。



2. F9 プロンプトが表示されるかを確認します。

- Oracle System Assistant の F9 プロンプトが表示されない場合はステップ 3 に進み、BIOS 設定ユーティリティを確認します。

- Oracle System Assistant の F9 プロンプトは表示されるが、F9 キーを押しても Oracle System Assistant が起動しない場合は、Oracle System Assistant ソフトウェアを復元し、ステップ 1 から再度試みます。ソフトウェアを復元する方法については、[198 ページの「Oracle System Assistant ソフトウェアの復元」](#)を参照してください。

Oracle System Assistant が起動する場合、それはサーバーにインストールされており、BIOS 設定ユーティリティで有効化されており、破壊されていません。

3. BIOS 設定ユーティリティをチェックし、Oracle System Assistant USB ドライブが無効になっていないか確認します。

- デバイスが無効になっている場合は有効にし、ステップ 1 から再度試みます。USB ドライブを有効にするには、[189 ページの「Oracle System Assistant を有効または無効にする \(BIOS\)」](#)を参照してください。
- デバイスが無効になっていないか BIOS 設定ユーティリティに表示されない場合は、次のステップに進んでサーバーの物理チェックを実行します。

Oracle System Assistant が起動する場合、それはサーバーにインストールされており、BIOS 設定ユーティリティで有効化されており、破壊されていません。

4. サーバーの物理チェックを実行し、Oracle System Assistant USB ドライブがサーバー内に物理的に存在しているか確認します。

アクセス手順や内部 USB ポートの位置については、サーバーハードウェアのドキュメントを参照してください。

- デバイスが存在している場合は、Oracle System Assistant ソフトウェアが壊れている可能性があり、復元しなければいけない可能性があります。Oracle System Assistant ソフトウェアを復元し、ステップ 1 から再度試みます。ソフトウェアを復元する方法については、[198 ページの「Oracle System Assistant ソフトウェアの復元」](#)を参照してください。
- デバイスが存在していない場合は、Oracle サポートに連絡します。

Oracle System Assistant が起動する場合、それはサーバーにインストールされており、BIOS 設定ユーティリティで有効化されており、破壊されていません。

参照 [161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)

▼ Oracle System Assistant メディアの整合性をチェックする



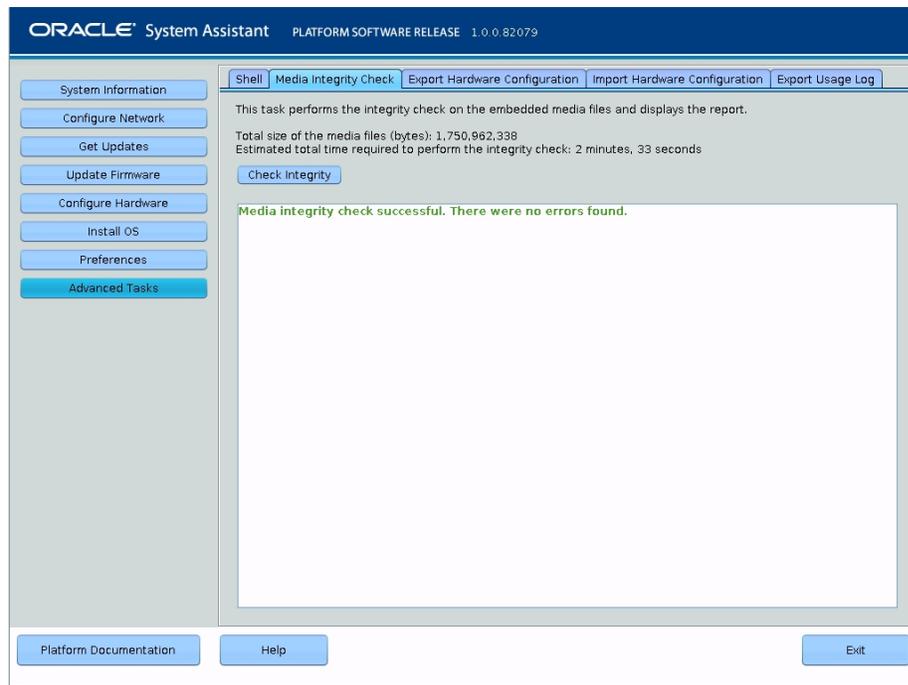
メディアの整合性のチェックタスクは、内部の Oracle System Assistant メディアファイルの整合性を検証し、レポートを表示します。このタスクは、USB デバイスでエラーが発生したときや、Oracle サービス担当者から要請されたときに実行する必要があります。

注記 - Oracle System Assistant 1.2 はマスターブートレコードをチェックします。Oracle System Assistant 1.1 は行いません。

使用しているバージョンの Oracle System Assistant が破損した場合は、My Oracle Support サイトからサーバーに対応した Oracle System Assistant アップデータイメージファイルをダウンロードします。詳細については、[198 ページの「Oracle System Assistant ソフトウェアの復元」](#)を参照してください。

Oracle System Assistant USB メディアの整合性を検証するには、次の手順を使用します。

1. 「Advanced Tasks」をクリックしてから、「Media Integrity Check」タブをクリックします。
「Media Integrity Check」画面が表示されます。



2. 「Check Integrity」ボタンをクリックします。

Oracle System Assistant の内蔵 USB デバイスがテストされ、レポートが生成されます。テストでは推定実行時間が表示されます。テストはいつでも取り消すことができます。

- 参照
- [198 ページの「Oracle System Assistant ソフトウェアの復元」](#)
 - [161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)

▼ Oracle System Assistant ソフトウェアの復元

Oracle System Assistant ソフトウェアが上書き、消去、または破壊された場合、My Oracle Support サイトから入手可能なイメージファイルをダウンロードし、Oracle System Assistant を USB デバイスに復元することができます。

Oracle System Assistant ソフトウェアを復元するには、次の手順を使用します。

- 始める前に
- サーバーブートメッセージに対するローカルまたはリモートの表示アクセス権と応答アクセス権がなければいけません。詳細については、サーバーの設置ガイドを参照してください。

1. **My Oracle Support の Web サイトから適切なイメージファイルをダウンロードします。**

使用しているサーバーに固有のイメージをダウンロードします。サーバーの更新イメージのパッケージ名は次のとおりです:

```
system_name and SW version -- Oracle System Assistant
```

My Oracle Support にアクセスしてこのイメージをダウンロードする方法については、[223 ページの「プラットフォームソフトウェア、ドライバ、およびファームウェアの更新をダウンロードする \(Oracle System Assistant\)」](#)を参照してください。

2. **更新イメージをサーバーで使用可能にするには、次のいずれかを行います。**

- **イメージファイルを使用して、物理 DVD イメージを作成します。**
サーバーに取り付けられている DVD ドライブに DVD を挿入します。
- **Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションを使用して、更新イメージファイルを ISO イメージとしてサーバーで使用可能にします。**

3. **サーバーをリセットするか、サーバーの電源を投入します。**

次のいずれかの方法を選択します。

- **ローカルサーバーから、サーバーのフロントパネルにある電源ボタンを押して (約 1 秒) 電源を切り、再度電源ボタンを押して、サーバーの電源を投入します。**
- **Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」>「Power Control」を選択し、「Select Action」ドロップダウンリストから「Reset」を選択します。**
- **サーバー SP の Oracle ILOM CLI で「reset /system」と入力します。**



注記 - これらのイベントはすぐに発生します。表示される時間が短いため、メッセージを注意して観察してください。

4. BIOS 画面で、F8 キーを押して、Oracle System Assistant のインストールで使用する一時ブートデバイスを指定します。

「Please Select Boot Device」画面が表示されます。



5. 復旧イメージをサーバーで使用可能にしたときに使用した方法に応じて、次のステップのいずれかを実行します。

注記 - 「Please Select Boot Device」メニューに一覧表示される項目は、システムがレガシーブートモードでブートされたか、UEFI ブートモードでブートされたかによって異なります。

- 復旧 DVD を作成し、その DVD を接続された DVD ドライブに挿入するように選択した場合は、次の「Please Select Boot Device」メニューに示されている `SATA:HDD:P4: TSSTcorp CDDVDW TS-T633C` を選択してから、Enter を押します。
- Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションを使用して、復旧イメージをリダイレクトされた DVD または ISO イメージとしてサーバーで使用可能にするように選択した場合は、次の「Please Select Boot Device」メニューに示すように、`USB:VIRTUAL:AMI Virtual CDROM 1.00` を選択してから、Enter を押します。

メッセージが表示され、復旧プロセスを続行するかどうかを尋ねるプロンプトが表示されます。

6. Oracle System Assistant イメージを復旧するには、「yes」と入力してから、Enter を押します。

復旧プロセスが進行中であることを示す次のメッセージが表示されます。復旧処理を中断しないでください。

```
The embedded storage device is being recovered.
Please do not reboot or power off the server
during this process.

[*****] 100%
Recovery is complete, you may optionally perform an integrity verification
of the device to insure that it was correctly programmed.
Would you like to verify the device? (yes or no) no

Rebooting to start Oracle System Assistant...
Connected. Use ^D to exit.
```

復旧プロセスが完了したら、オプションで USB ドライブのファイルの整合性を検証することができます。

7. 検証プロンプトで、次のいずれかを行います。

次の画面が表示され、Oracle System Assistant の USB デバイスが正常に検証されたことを示します。その後、システムがリブートし、Oracle System Assistant アプリケーションが起動します。

- USB ドライブの検証をスキップする場合は、no と入力してから Enter キーを押します。
サーバーが Oracle System Assistant にブートします。

- USB ドライブを検証する場合は、yes と入力して Enter キーを押します。
検証プロセスが開始されます。プロセスが完了すると、サーバーが Oracle System Assistant にブートします。

```
The embedded storage device is being recovered.

Recovery is complete. You may optionally perform an integrity verification
of the device to insure that it was correctly programmed.

Would you like to verify the device? [yes or no] yes

Verifying...
[=====] 100%
Verification Succeeded.

Rebooting to start Oracle System Assistant...
Connected. Use ^D to exit.
-> set /HOST/provisioning/system-assistant setboot=system-assistant

Rebooting to start Oracle System Assistant...
Connected. Use ^D to exit.
-> set /HOST/provisioning/system-assistant setboot=system-assistant
```


BIOS の設定と構成

このセクションでは、システムで BIOS 設定ユーティリティーを使用する方法について説明し、Legacy ブートモードか UEFI ブートモードかの選択のためのガイドラインおよび手順を示します。説明項目は次のとおりです。

- [205 ページの「BIOS 設定ユーティリティー」](#)
- [213 ページの「Legacy ブートモードと UEFI ブートモード」](#)

使用しているシステムには、Unified Extensible Firmware Interface 互換 BIOS (UEFI BIOS) が搭載されており、Legacy BIOS の制限の多くを回避します。ただし、オペレーティングシステムの中には UEFI ブートモードではブートできないものがあるので、UEFI BIOS にはブートモードを選択する機能が備わっています。デフォルトは、Legacy ブートモードです。

BIOS 設定ユーティリティーの詳細は、サーバーのドキュメントを参照してください。

BIOS 設定ユーティリティー

このセクションでは、BIOS 設定ユーティリティーへのアクセス方法および使用方法について説明します。

BIOS 設定ユーティリティーメニューの概要

BIOS 設定ユーティリティーには、システムを起動またはリセットし、F2 を押して、BIOS 電源投入時自己診断 (POST) に割り込むことによってアクセスします。詳細は、[206 ページの「BIOS 設定ユーティリティーのメニューにアクセスする」](#)を参照してください。

このセクションの内容:

- [206 ページの「BIOS 設定ユーティリティーのメニューにアクセスする」](#)

- [208 ページの「BIOS 設定ユーティリティを終了する」](#)
- [209 ページの「BIOS 設定ユーティリティのメニュー間を移動する」](#)
- [212 ページの「UEFI Late Synchronization を設定する」](#)

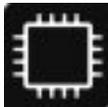
次の表で、BIOS 設定ユーティリティのトップレベルのメニュータブについて説明します。

メニュー	説明
Main	メモリー、時刻と日付、セキュリティ設定、システムのシリアル番号、CPU と DIMM の情報など、一般的な製品情報が含まれます。
Advanced	信頼できるコンピューティング、USB など、CPU の構成設定が表示されます。
IO	オプション ROM を有効または無効にします。
Boot	Oracle System Assistant の内部サポートを有効または無効にしたり、ブートモードを Legacy または UEFI に設定したり、ブートデバイスの優先順位を構成したりします。
UEFI Driver Control	UEFI/BIOS ブートモードが UEFI に設定されている場合にのみ表示されま す。UEFI ブートオプションのみがユーザーに提示されます。
Save and Exit	変更を保存して終了、変更を破棄して終了、変更を破棄、最適デフォルトをロー ド、フェイルセーフなデフォルトをロード、のいずれかを実行できます。

関連情報

- [206 ページの「BIOS 設定ユーティリティのメニューにアクセスする」](#)
- [209 ページの「BIOS 設定ユーティリティのメニュー間を移動する」](#)

▼ BIOS 設定ユーティリティのメニューにアクセスする

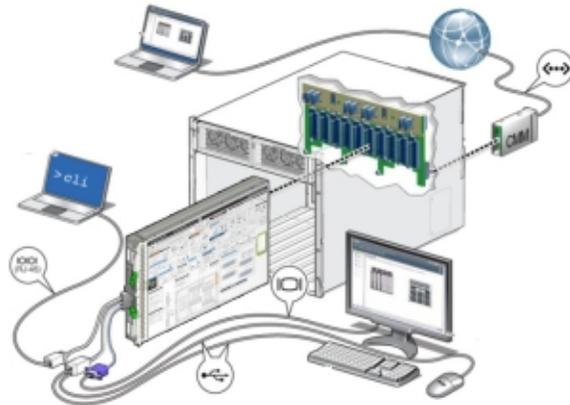


始める前に 次のいずれかのアクセスインターフェースを選択します。

- サーバーに直接接続されている USB キーボードと VGA モニターを使用する。(BIOS 設定ユーティリティの操作にマウスは必要ありません)。
- サーバーのバックパネルにあるシリアルポートから端末またはコンピュータに接続された端末エミュレータを使用する。

- Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションを使用してサーバーに接続する。
詳細は、49 ページの「リモートシステムコンソールリダイレクションセッションの起動」を参照してください。

次の図は、ブレードシステムでの接続インタフェースを示しています。

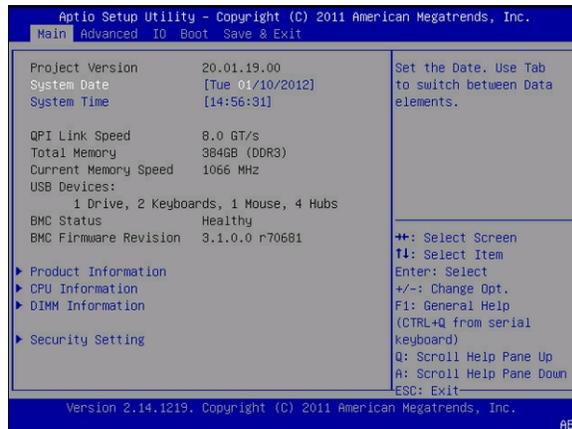


1. 次のいずれかの方法でサーバーをリセットするか電源を投入します。
 - ローカルサーバーから - サーバーのフロントパネルにある電源ボタンを押してサーバーの電源を切り、もう一度電源ボタンを押してサーバーの電源を入れます。
 - Oracle ILOM Web インタフェースから - 「Host Management」>「Power Control」の順にクリックし、「Select Action」ドロップダウンリストから「Reset」を選択します。
 - サーバー SP の Oracle ILOM CLI から - 「reset /System」と入力します。

POST シーケンスが開始されます。

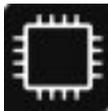
詳細は、サーバーのサービスマニュアルを参照してください。

2. BIOS 設定ユーティリティに進むには、プロンプトが表示されたときに F2 キー (シリアル接続の場合は Ctrl + E キー) を押します。
BIOS 設定ユーティリティの「Main」が表示されます。

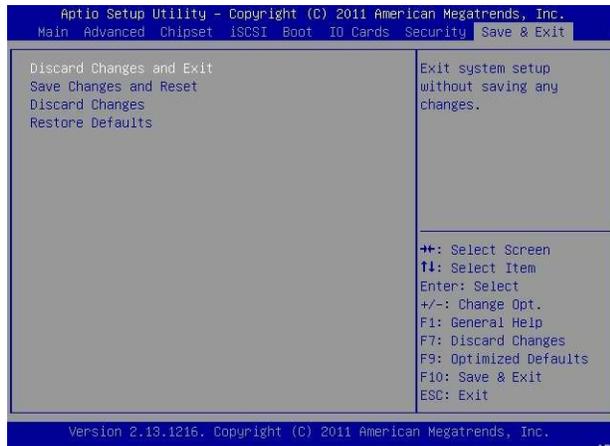


- 参照
- 209 ページの「BIOS 設定ユーティリティのメニュー間を移動する」
 - 211 ページの「BIOS のキーマッピング」

▼ BIOS 設定ユーティリティを終了する



1. トップレベルの「Save & Exit」メニューに移動します。
2. 上下の矢印を使用して、目的の終了アクションを選択します。
3. オプションを選択するには、Enter キーを押します。
確認ダイアログボックスが表示されます。



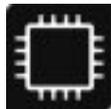
4. BIOS 設定ユーティリティを終了するには、確認ダイアログボックスで「OK」を選択します。変更を保存して BIOS 設定ユーティリティを終了するか、代替の終了オプションを選択します。

- 代わりに、変更を保存して BIOS 設定ユーティリティを終了する場合は、「Save & Exit」メニューを選択し、「Save Changes and Reset」を選択できます。
- または、終了処理を中止する場合は、「Cancel」を選択します。

注記 - BIOS 設定を変更してから「Save & Exit」メニューで「Save Changes and Reset」を選択してリポートすると、設定の変更をしなかった場合の通常のリポートに比べて時間がかかる場合があります。この遅れは、BIOS 設定の変更内容を Oracle ILOM と同期させるために発生します。

参照 ■ [206 ページの「BIOS 設定ユーティリティのメニューにアクセスする」](#)

▼ BIOS 設定ユーティリティのメニュー間を移動する



画面上に表示される個々のメニューまたはオプション間を移動するには、矢印キーを使用します。構成が可能なオプションまたはフィールドは、メニュー上では色付きで表示されます。

BIOS 設定ユーティリティ内で移動する方法や設定を変更する方法の詳細は、メニューの右下に表示されるオンラインの移動情報を参照してください。メニューの右上には、メニュー選択に関する情報が表示されます。

1. **BIOS 設定ユーティリティにアクセスします。**
 - a. **システムをブートします。**

ブートメッセージがコンソール画面をスクロールして表示されます。
 - b. **F2 キー (またはシリアル端末からは Ctrl + E) を連続して押します。**

BIOS 設定ユーティリティのメイン画面が表示されます。
2. **別の各プライマリメニューオプションを選択するには、左右の矢印キーを使用します。**

各メニューオプションを選択すると、そのメニューオプションのトップレベルの画面が表示されます。
3. **トップレベルの画面でオプションを選択するには、上下の矢印キーを使用して、表示されているオプションを移動します。**
 - 上下の矢印キーを押すと、変更可能なオプションが強調表示されます。
 - フィールドが変更可能な場合、オプションを選択すると、そのオプションの変更方法が画面の右側の列に表示されます。
 - フィールドがサブ画面へのリンクである場合、そのサブメニューコンテンツの説明が右側の列に表示されます。
4. **設定フィールドを変更するには、+ (プラス) キーまたは - (マイナス) キーを押すか、Enter を押してダイアログボックスメニューから目的のオプションを選択します。**
5. **サブメニューから前のメニュー画面に戻るには、Esc キーを押します。**

トップレベルメニューで Esc を押すことは、「Save and Exit」メニューで「Discard Changes and Exit」オプションを選択することと同じです。
6. **必要に応じてパラメータを変更します。**

7. 変更内容を保存または破棄して BIOS 設定ユーティリティを終了するには、F10 を押し
ます。

変更を保存して BIOS 設定ユーティリティを終了する場合は、「Save & Exit」メニューを選択し、「Save Changes and Reset」を選択できます。

注記 - BIOS 設定を変更してから「Save & Exit」メニューで「Save Changes and Reset」を選択してリブートすると、設定の変更をしなかった場合の通常のリブートに比べて時間がかかる場合があります。この遅れは、BIOS 設定の変更内容を Oracle ILOM と同期させるために発生します。

注記 - BIOS 設定ユーティリティの設定データが無効になると、BIOS 設定はそれぞれ出荷時のデフォルト値に戻されます。

BIOS のキーマッピング

Oracle ILOM リモートコンソール機能を使用して端末から BIOS 出力を表示する場合、一部の端末はファンクションキーをサポートしません。シリアルリダイレクトが有効になっている場合、BIOS は Control キーシーケンスへのファンクションキーのマッピングをサポートします。次の表に、ファンクションキーの Control キーへのマッピングの説明を示します。

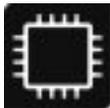
ファンクションキー	Control キーシーケンス	BIOS POST 機能	BIOS 設定機能
F1	Ctrl+Q	該当なし。	BIOS 設定ユーティリティのヘルプメニューを起動します。
F2	Ctrl+E	システムが電源投入時自己診断 (POST) を実行している間に、BIOS 設定ユーティリティを開始します。	該当なし。
F7	Ctrl+D	該当なし。	変更内容を破棄します。 「UEFI Driver Control」メニューでは該当なし。
F8	Ctrl+P	BIOS の「Boot」メニューを起動します。	該当なし。
F9	Ctrl+O	Oracle System Assistant を起動します。BIOS は、このワнтаイ	「Load Optimal Values」ダイアログボックスメニューを起動します。

ファンクションキー	Control キーシーケンス	BIOS POST 機能	BIOS 設定機能
		ムブート方式のために、現在の「Boot Option Priority」リストをバイパスして Oracle System Assistant でブートします。	「UEFI Driver Control」メニューでは該当なし。
F10	Ctrl+S	該当なし。	「Save and Exit」ダイアログボックスメニューを起動します。
F12	Ctrl+N	ネットワークブートをアクティブ化します。	「UEFI Driver Control」メニューでは該当なし。 該当なし。

関連情報

- [206 ページの「BIOS 設定ユーティリティのメニューにアクセスする」](#)

▼ UEFI Late Synchronization を設定する



いずれかの BIOS 設定を変更した場合、ブートプロセスが中断され、その後再開することがあります。これは、さまざまなシステムコンポーネント間で設定を同期させるために必要です。

- UEFI Late Synchronization が有効な場合、この中断は POST メッセージが終了したあとに起こります。
- UEFI Late Synchronization が有効でない場合、この中断は POST メッセージが始まる前に起こります。

1. BIOS 設定ユーティリティにアクセスします。

a. システムをブートします。

ブートメッセージがコンソール画面をスクロールして表示されます。

- b. F2 キー (またはシリアル端末からは Ctrl + E) を連続して押します。
BIOS 設定ユーティリティのメイン画面が表示されます。
2. BIOS の「Main」メニュー画面から、「Advanced」>「UEFI Configuration Synchronization」の順に選択します。
3. 「Synchronization Late」に対して「Enabled」または「Disabled」を選択します。
デフォルトは「Enabled」です。
4. 変更内容を保存して画面を終了するには、F10 を押します。

Legacy ブートモードと UEFI ブートモード

システムには UEFI BIOS が搭載されており、これは、Unified Extensible Firmware Interface (UEFI) 仕様に基づいています。

UEFI BIOS は、Legacy バージョンの BIOS に比べて利点がありますが、そのブート方法が一部のオペレーティングシステムに適合せず、構成によっては最適な選択肢ではなくなる場合があります。このため、システムは、Legacy ブートモードでも、UEFI ブートモードでもブートするように構成できます。**Legacy** ブートモードがデフォルトです。

通常、ブートモードは、オペレーティングシステムのインストール前に一度だけ設定します。オペレーティングシステムをインストールしたあとでブートモードを変更すると、オペレーティングシステムをブートできなくなります。

UEFI ブートモードをサポートするオペレーティングシステムのリストについては、プロダクトノートを参照してください。

Legacy と UEFI のそれぞれの BIOS ブートモードを選択する場合

Legacy ブートモードか UEFI ブートモードかを選択できる場合、UEFI ブートモードには次の利点があります。

- ブートの時間が短くなる。

- レガシーオプション ROM のアドレスの制約を受けない。詳細は、[214 ページの「BIOS ブートモードに関するその他の考慮事項」](#)を参照してください。
- 2 テラバイト (2 TB) を超えるオペレーティングシステムブートパーティションをサポートする。サポートされるオペレーティングシステムの制限に関する詳細は、サーバーのプロダクトノート [を参照してください](#)。
- PCIe デバイス構成ユーティリティが BIOS 設定ユーティリティのメニュー内に組み込まれる。
- ブート可能なオペレーティングシステムのイメージがラベルの付いたエンティティとしてブートリストに表示される。たとえば、Raw デバイスラベルではなく、Windows ブートマネージャーラベルを表示します。
- 効率的な電力およびシステム管理が可能になる。
- 確実な信頼性および障害管理が組み込まれる。
- UEFI ドライバを使用する。

次の場合に Legacy BIOS ブートモードを選択します。

- オペレーティングシステムが UEFI ブートモードでのブートをサポートしていない場合
- HBA および Express Module デバイスがオプション ROM を使用できるようにする場合

BIOS ブートモードに関するその他の考慮事項

Legacy BIOS ブートモードを選択すると、HBA および Express Module デバイスがオプション ROM を使用できるようになります。UEFI ブートモードを選択すると、UEFI ドライバを使用します。

注記 - オペレーティングシステムはインストール時に最初に設定されたブートモードプロパティ値でのみブートできます。オペレーティングシステムのインストール後にブートモードプロパティ値を変更した場合、オペレーティングシステムは動作不能になります (ブートしません)。この問題を解決するには、ブートモードプロパティ値を初期の設定に戻す必要があります。

選択したブートモードをサポートするデバイスのみが、BIOS の「Boot」画面に一覧表示されます。UEFI ブートモードを選択すると、UEFI BIOS ブートモードをサポートするブート候補のみが BIOS 設定ユーティリティの画面のブート順序リストに一覧表示されます。Legacy BIOS ブートモードを選択すると、Legacy BIOS ブートモードをサポートするブート候補のみがブート順序リストに一覧表示されます。

注記 - ブートモードを変更すると、インストールしたオペレーティングシステムはブートできなくなります。変更前のブートモードのブート候補も表示されなくなります。新しく変更したブートモードのブート候補は、「Save Changes and Reset」の BIOS コマンドが発行されたあとで表示され、次に BIOS 設定ユーティリティをブートしたあとにも画面に表示されます。

Legacy ブートモードと UEFI ブートモードを切り替えると (いずれの方向であれ)、「Boot Option Priority」リストの設定に影響を与える BIOS 設定が変更され、元の設定は失われます。元に戻す予定がある場合は、BIOS 構成をバックアップしてください。[157 ページの「BIOS 設定をバックアップ、復元、および元に戻す \(Oracle System Assistant 1.1\)」](#)を参照してください。

UEFI ブートモードをサポートするオペレーティングシステムのリストについては、サーバーのプロダクトノートを参照してください。

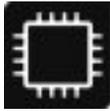
オペレーティングシステムの中には Legacy ブートモードを必要とするものも、どちらのモードでも機能できるものもあります。ただし、オペレーティングシステムをいったんインストールしたあとは、インストール中に使用したブートモードを使用する必要があります。

ブートモードの表示と変更

次のインタフェースを使用して、サーバーのブートモードを表示または設定できます。

- **BIOS 設定ユーティリティ**。BIOS 設定ユーティリティを使用すると、ターゲットブートモードを表示または設定できます。詳細は、[216 ページの「UEFI または Legacy ブートモード \(BIOS\) を選択する」](#)を参照してください。
- **Oracle System Assistant**。Oracle System Assistant を使用してオペレーティングシステムをインストールしている場合は、[132 ページの「オペレーティングシステムをインストールする \(Oracle System Assistant\)」](#)の説明に従って、「Oracle System Assistant Install Operating System」画面でサーバーのターゲットブートモードを表示または設定できます。
- **Oracle ILOM**。Oracle ILOM SP CLI または Web インタフェースからブートモードを表示できます。Oracle ILOM SP Web インタフェースからサーバーのターゲットブートモードを表示するには、「System Management」>「BIOS」をクリックします。または、Oracle ILOM SP CLI から表示する場合は、`show /System/BIOS` と入力します。

▼ UEFI または Legacy ブートモード (BIOS) を選択する



システムは Legacy と UEFI の両方のブートモードをサポートしています。

注記 - オペレーティングシステムはインストール時に最初に設定されたブートモードプロパティ値でのみブートできます。オペレーティングシステムのインストール後にブートモードプロパティ値を変更した場合、オペレーティングシステムは動作不能になります (ブートしません)。この問題を解決するには、ブートモードプロパティ値を初期の設定に戻す必要があります。

BIOS 設定ユーティリティを使用してサーバーのターゲットブートモードを表示または設定するには、次の手順に従います。

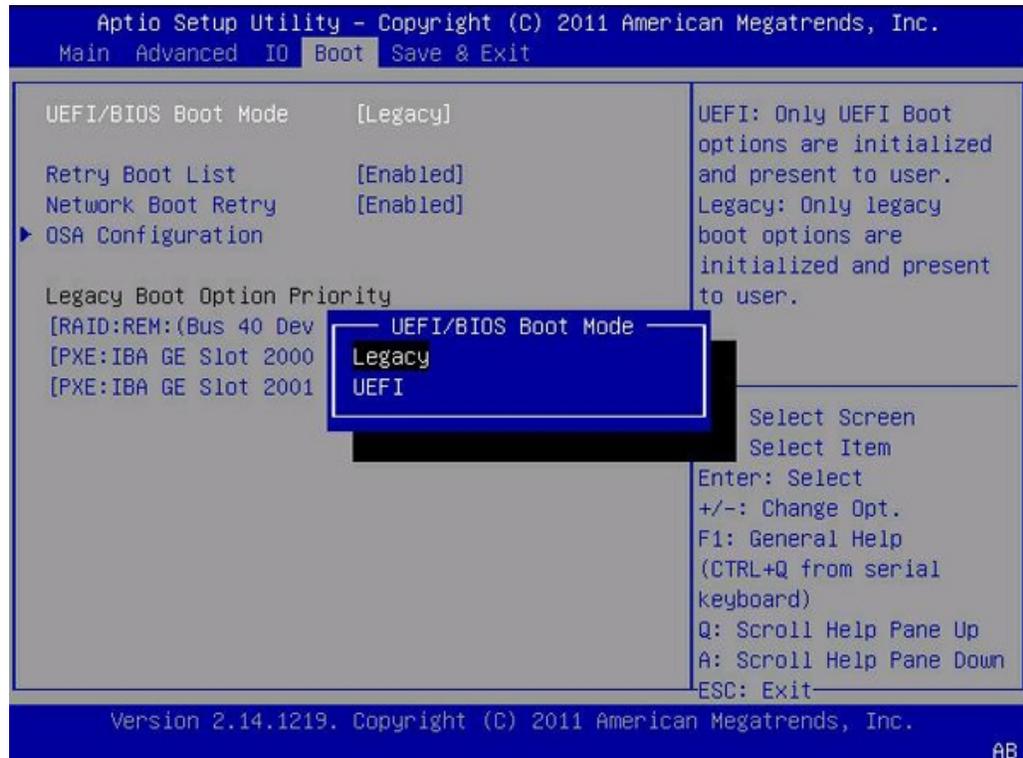
1. BIOS 設定ユーティリティにアクセスします。
 - a. システムをブートします。

ブートメッセージがコンソール画面をスクロールして表示されます。
 - b. F2 キー (またはシリアル端末からは Ctrl + E) を連続して押します。

BIOS 設定ユーティリティのメイン画面が表示されます。
2. BIOS の「Main」メニュー画面で、「Boot」を選択します。
3. 「Boot」画面から、「UEFI/BIOS Boot Mode」を選択し、Enter を押します。

「UEFI/BIOS Boot Mode」ダイアログボックスが表示されます。

注記 - ブートモードの切り替え後にブート順序リストを構成することはできません。選択したブートモードをサポートするデバイスをブート順序リストに正しく設定するには、システムをリブートする必要があります。



4. 上下の矢印を使用して Legacy ブートモードか UEFI ブートモードか選択し、Enter を押します。
5. 変更内容を保存して画面を終了するには、F10 を押します。

参照 ■ [216 ページの「UEFI または Legacy ブートモード \(BIOS\) を選択する」](#)

システムのファームウェアやソフトウェアのダウンロードと更新

このセクションでは、サーバーの更新されたファームウェアやソフトウェアをダウンロードしてインストールする方法について説明します。

更新は、複数の形式で提供され、さまざまなツールの 1 つを使ってインストールできます。このセクションでは、更新とツールについて説明し、更新をダウンロードしてインストールする手順を示します。説明項目は次のとおりです。

ツール	機能	リンク
すべてのツール	ツールとダウンロードのタイプの概要を説明します。	219 ページの「更新とツールの概要」
Oracle System Assistant	更新を取得してインストールします。	222 ページの「システムソフトウェアおよびファームウェアの更新 (Oracle System Assistant)」
Oracle ILOM	Oracle ILOM と BIOS のファームウェアを更新します。	229 ページの「サーバーまたはブレードシャーシファームウェアの更新 (Oracle ILOM)」
Oracle HMP	Oracle HMP を使ってファームウェアの更新をインストールします。	231 ページの「SP および BIOS ファームウェア、および HBA ファームウェアの更新 (Oracle HMP)」
My Oracle Support	My Oracle Support から更新を取得します。	232 ページの「MOS または PMR からのファームウェアおよびソフトウェアの取得」

更新とツールの概要

サーバーのファームウェアやソフトウェアは定期的に更新されます。これらの更新は、サーバーで使用可能なファームウェア、ソフトウェア、ハードウェアドライバ、ツール、およびユーティリティが格納されたダウンロード可能ファイル (パッチ) の集まりであるソフトウェアリリースとして入手で

きます。これらのファイルは一緒にテストされ、使用するサーバーで動作することが確認されています。

サーバーファームウェアおよびソフトウェアは、新しいソフトウェアリリースが入手可能になり次第、更新してください。ソフトウェアリリースには、多くの場合はバグの修正が含まれており、サーバーを更新することで、そのファームウェアおよびソフトウェアが最新であることが保証されます。

ソフトウェアリリースの各パッチに付属する ReadMe ドキュメントには、そのパッチに関する情報 (前回のソフトウェアリリースから変更された点や変更されていない点、今回のリリースで修正されたバグなど) が含まれています。

サーバーのプロダクトノートには、そのサーバーでサポートされる最新のソフトウェアリリースが記載されています。

ソフトウェア更新の命名規則

更新の名前は *server_and_release DOWNLOAD_NAME operating system* という形式になります。ここでは:

- *server_and_release* はサーバーの名前とリリース番号です。例: Sun Server X4-2 SW 1.0。
- *DOWNLOAD_NAME* はコンテンツのタイプ (次の表を参照) を識別します。
- *operating system* は、オペレーティングシステム固有のコンテンツを識別します。これは、OS PACK ダウンロードでしか現れません。

たとえば、Sun Server X4-2、SW 1.1、Oracle Linux 5U7 用のダウンロードは次のようになります。

X4-2 SW1.1 OS PACK OL_5U7

ソフトウェアダウンロードのタイプ

次の各表では、各ダウンロードおよびそれらで使用されるツールについて説明します。

- 次の表では、さまざまなタイプのダウンロードを一覧表示して説明します。
- その次の表ではツールの一覧を示し、そのツールごとに、ツールがサポートするダウンロードとインストールのタイプ、および必要になる環境を示します。

ダウンロード名	説明
OS PACK	<p>特定のオペレーティングシステムに対するすべてのツール、ドライバ、およびユーティリティから成るパッケージを含みます。OS Pack は、サポートされるオペレーティングシステムのバージョンごとに入手できます。</p> <p>ソフトウェアには、Oracle Hardware Management Pack および LSI MegaRAID ソフトウェアが含まれます。</p> <p>Windows オペレーティングシステムの場合、Intel Network Teaming も OS パックに含まれます。</p>
FIRMWARE PACK	Oracle ILOM、BIOS、およびオプションカードファームウェアを含む、すべてのシステムファームウェアを含みます。
DIAGNOSTICS	Oracle VTS 診断イメージを含みます。詳細は、 http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=OracleVTS7.0 を参照してください。
ALL PACKS	<p>Firmware Pack、すべての OS Pack、およびすべてのドキュメントを含みます。</p> <p>このパックには、Oracle VTS や Oracle System Assistant イメージは含まれません。</p>
ORACLE SYSTEM ASSISTANT UPDATER	Oracle System Assistant を更新します。

ソフトウェアのダウンロードに使用されるツール

次の表にダウンロードのタイプ、各タイプを使用するツール、および各ツールで必要になる環境を示します。

ツール	ダウンロード	環境
My Oracle Support	すべてのダウンロードタイプが使用可能です。製品とリリースで検索します。	<p>オンライン。</p> <p>My Oracle Support はダウンロードを提供しますが、それらをインストールする機能は提供しません。</p> <p>232 ページの「MOS または PMR からのファームウェアおよびソフトウェアの取得」を参照してください。</p>
Oracle System Assistant	古いものをすべてダウンロードします (DIAGNOSTICS は除く)。	<p>アウトオブバンド。システムを Oracle System Assistant にブートする必要があります。</p> <p>インストールオプションにより、選択された更新のインストール、すべての更新のインストール、のいずれかを行えます</p> <p>222 ページの「システムソフトウェアおよびファームウェアの更新 (Oracle System Assistant)」を参照してください。</p>

ツール	ダウンロード	環境
Oracle ILOM	Oracle ILOM と BIOS の FIRMWARE PACK のみ。	Oracle ILOM。ダウンロードはオペレーティングシステムの実行中でも可能ですが、インストール中はオペレーティングシステムのリブートが必要になります。 230 ページの「BIOS および SP ファームウェアまたは CMM ファームウェアを更新する (Oracle ILOM)」 を参照してください。
Hardware Management Pack	Oracle ILOM と BIOS を含むすべての FIRMWARE PACK。	オペレーティングシステムのコマンド行またはシェルからのインバンド。更新のインストール時にオペレーティングシステムがブートされます。 まず、My Oracle Support から更新をダウンロードしておく必要があります。 231 ページの「SP および BIOS ファームウェア、および HBA ファームウェアの更新 (Oracle HMP)」 を参照してください。
コマンド行またはシェル	OS PACKS および DIAGNOSTICS。	OS パックのインストールはコマンド行かシェルから行えますが、その際、通常はサーバーのリブートが必要となります。詳細については、オペレーティングシステムのドキュメントかパックの Readme ファイルを参照してください。 http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=OracleVTS7.0 の説明に従って、Oracle VTS 診断をインストールしてください。

システムソフトウェアおよびファームウェアの更新 (Oracle System Assistant)

このセクションでは、Oracle System Assistant を使って一部または全部のシステムソフトウェアおよびファームウェアを更新する手順を示します。

Oracle System Assistant によるシステムファームウェアの更新は、次の 2 つの段階で行われます。

1. 更新をダウンロードします。[223 ページの「プラットフォームソフトウェア、ドライバ、およびファームウェアの更新をダウンロードする \(Oracle System Assistant\)」](#)または [225 ページの「プラットフォームソフトウェア、ドライバ、およびファームウェアの更新をローカルの場所からダウンロードする \(Oracle System Assistant\)」](#)を参照してください。
2. 更新の一部または全部をインストールします。[227 ページの「ソフトウェアおよびファームウェアを更新する \(Oracle System Assistant\)」](#)を参照してください。

Oracle System Assistant は、入手可能な更新をすべてダウンロードし、すべての更新のインストール、選択された更新のみのインストール、のいずれかを行う機能を提供します。

Oracle System Assistant を使ってサーバーを更新する前に、Oracle System Assistant で Web へのアクセスに使用されるネットワークポートを構成する必要があるほか、サーバーがダウンロードを取得する権限を持つように My Oracle Support を構成しなければいけない可能性があります。詳細については、[181 ページの「Oracle System Assistant の更新の準備」](#)を参照してください。

▼ プラットフォームソフトウェア、ドライバ、およびファームウェアの更新をダウンロードする (Oracle System Assistant)

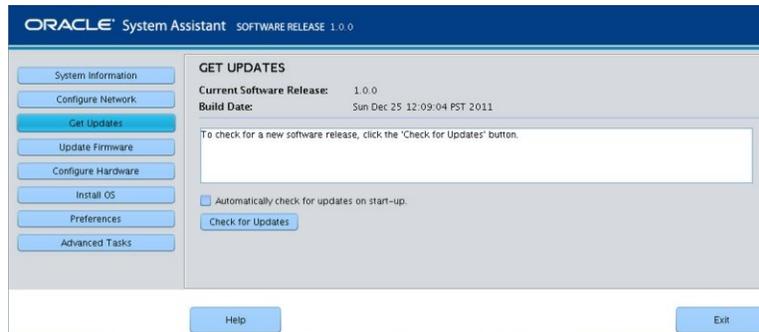


「Get Updates」タスクを使って Oracle System Assistant を更新するには、この手順を使用します。

このタスクを実行すると、Oracle System Assistant は My Oracle Support に接続し、システム用のすべてのソフトウェアを含む単一のバンドルをダウンロードします。

始める前に Web にアクセスできるように Oracle System Assistant を構成しておかないと、このタスクを完了できません。詳細については、[181 ページの「ネットワークインタフェース設定を構成する \(Oracle System Assistant\)」](#)を参照してください。

1. **Oracle System Assistant にアクセスします。**
詳細は、[161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)を参照してください。
2. **「Get Updates」タスクボタンをクリックします。**
「Get Updates」ページが表示されます。



注記 - システムが起動するたびに自動的に更新をチェックするには、このチェックボックスをクリックします。

3. Oracle System Assistant 1.2 以降では、「Get Remote Updates」タブが選択されていない場合は選択します。
4. 新しいソフトウェアリリースがないかチェックするには、「Check for Updates」ボタンをクリックします。

注記 - 最新以外のバージョンを取得するには、「Available Updates」ドロップダウンリストから選択します。このリストは、Oracle System Assistant 1.2 以降の場合に使用できます。

更新が利用可能な場合は、その更新の readme ファイルが表示されます。

5. 更新を取得するには、「Download and Apply Updates」ボタンをクリックします。

「Get Updates Sign-In」画面が表示されます。

6. My Oracle Support (MOS) の資格を入力します。

MOS のユーザー名とパスワードを入力します。

注記 - サインインのプロセスが停止する場合、それは、ユーザー名やパスワードが一致しないからであるか、あるいはサーバーが更新を取得できるように My Oracle Support が構成されていないからである可能性があります。サーバーが更新を取得できるように My Oracle Support を構成する方法については、[184 ページの「Oracle System Assistant の更新を有効にするように MOS を構成する」](#)を参照してください。

サーバーは、更新をダウンロードしたあと、サーバーをリブートするよう求めるメッセージを表示します。

7. 「OK」を選択します。

サーバーがリブートされ、Oracle System Assistant が再起動されます。

更新をインストールするには、次を参照してください。

- 参照
- [227 ページの「ソフトウェアおよびファームウェアを更新する \(Oracle System Assistant\)」](#)
 - [166 ページの「Oracle System Assistant ユーザーインターフェースの使用」](#)

▼ プラットフォームソフトウェア、ドライバ、およびファームウェアの更新をローカルの場所からダウンロードする (Oracle System Assistant)



ISO ファイルや DVD などのローカルデバイスから Oracle System Assistant を更新するには、この手順を使用します。

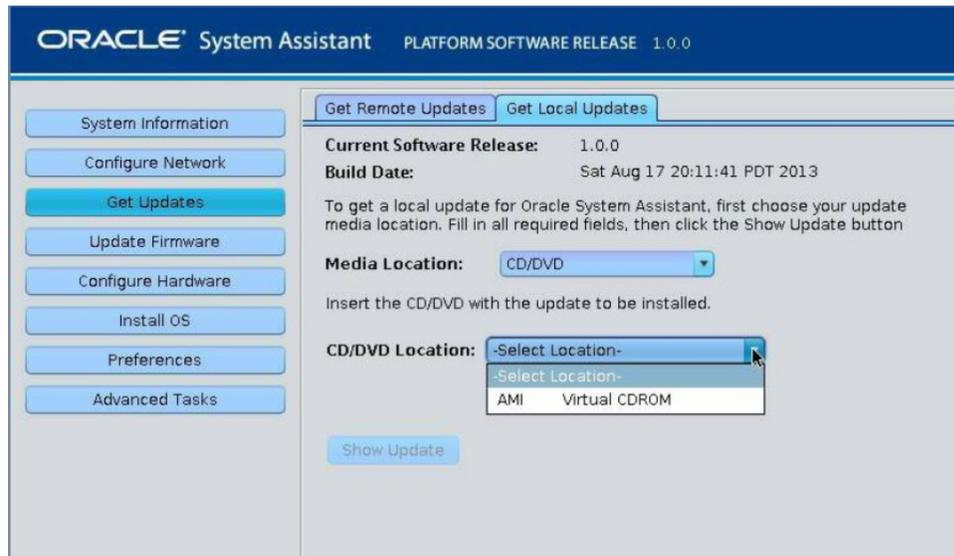
このタスクを実行すると、Oracle System Assistant がローカルデバイス上のソフトウェアを使用してシステムを更新します。

始める前に このタスクでは Oracle System Assistant 1.2 以降が必要です。

1. [232 ページの「MOS または PMR からのファームウェアおよびソフトウェアの取得」](#)の説明に従って、更新のコピーを取得します。
 - USB または DVD ドライブから更新をインストールするには、更新ファイルをメディアに書き込み、メディアをドライブに挿入します。
 - ネットワークの場所からインストールするには、更新ファイルをその場所に書き込みます。
2. Oracle System Assistant にアクセスします。

詳細は、161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」を参照してください。

3. 「Get Updates」タスクボタンをクリックします。
「Get Updates」ページが表示されます。
4. 「Get Local Updates」タブをクリックします。
「Local Updates」ページが表示されます。
5. メディアの場所を選択します。
選択肢は「USB」、「CD/DVD」、または「Network Location」です。
別のドロップダウンリストが表示されます。
6. 2 つ目のドロップダウンリストから選択します。
選択肢は手順 5 の選択内容に応じて異なります。



7. 選択されたメディアを参照するには、「Show Update」ボタンをクリックします。
画面に選択したメディアが表示され、そのメディアファイルを参照できます。
8. 「Get Updates」をクリックします。
サーバーがリブートされ、Oracle System Assistant が再起動されます。

更新をインストールする方法については、[227 ページの「ソフトウェアおよびファームウェアを更新する \(Oracle System Assistant\)」](#)を参照してください。

▼ ソフトウェアおよびファームウェアを更新する (Oracle System Assistant)



Oracle System Assistant を使ってサーバーのファームウェアを更新するには、この手順を使用します。

「Update Firmware」タスクでは、システムのファームウェア (BIOS と Oracle ILOM SP) およびシステム内のハードウェアデバイスのファームウェアを最新版に更新できます。これを使用すれば、変更内容を確認し、バージョン番号を比較してから、更新するコンポーネントを手動で選択することも、すべてのファームウェアコンポーネントを更新するように選択することもできます。

最良の結果を得るには、すべてのファームウェアコンポーネントを最新版に更新してください。

注記 - 一部のファームウェアコンポーネントでは、ファームウェア更新の直後にサーバーをリブートする必要があります。サーバーは必要に応じて、更新処理中に 1 回以上自動的にリブートする可能性があります。

Oracle ILOM/SP 更新の実行にかかる時間は、Oracle ILOM のローカルホストインターコネクト設定によって変わります。

- Oracle ILOM のローカルホストインターコネクト設定がホスト管理 (true) として構成されている場合、内部のホスト - ILOM 間インターコネクトが使用されます。これがデフォルトであり、最速になります。
- Oracle ILOM のローカルホストインターコネクト設定がホスト管理 (false) として構成されている場合、より長い時間がかかります。

始める前に

- Oracle System Assistant を更新用に準備します。詳細については、[181 ページの「Oracle System Assistant の更新の準備」](#)を参照してください。

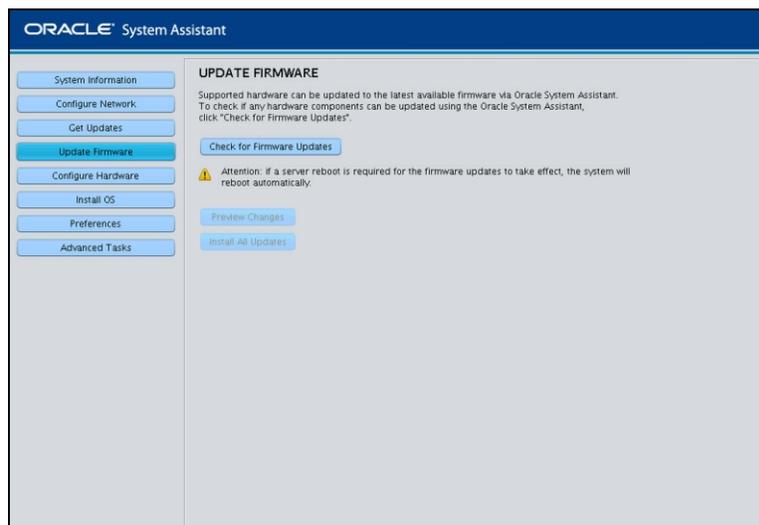
- Oracle System Assistant を使って更新パッケージを取得します。詳細については、[223 ページの「プラットフォームソフトウェア、ドライバ、およびファームウェアの更新をダウンロードする \(Oracle System Assistant\)」](#)を参照してください。

1. **Oracle System Assistant にアクセスします。**

詳細は、[161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)を参照してください。

2. **「Update Firmware」をクリックします。**

「Update Firmware」画面が表示されます。



3. **更新できるコンポーネントを表示するには、「Check for Firmware Updates」ボタンをクリックします。**

タスクがコンポーネントに対してポーリングを行い、ファームウェア更新チェックを実行する間、「Firmware Update Check」進捗ボックスが表示されます。

4. **(オプション)「Preview Changes」ボタンをクリックします。**

「Firmware Update Install Changes」ダイアログボックスが表示されます。

5. **更新が必要なファームウェアコンポーネントのリストを表示し、現在のバージョン番号と利用可能なバージョン番号を比較します。**

「Component Name」、「Device Name」、「Firmware/BIOS Installed」、および「Firmware/BIOS Available」も確認できます。

6. 続行するには、次のいずれかを選択します。

- ファームウェアの更新を選択的に実行するには、インストールするファームウェアの更新を選択してから、「Install Updates」ボタンをクリックします。

注記 - 最新状態のコンポーネントは選択できません。

- ファームウェアの更新をすべてインストールするには、「Install All Updates」ボタンをクリックします。

7. ファームウェアが更新されるまで待ちます。

ファームウェアの更新の進捗バーが表示されます。

システムは数回リブートする可能性があります。インストールすべき更新がほかにも存在する場合は、リブート後に Oracle System Assistant がふたたび表示され、ファームウェアの更新が続行されます。

ファームウェア更新に Oracle ILOM の更新が含まれる場合、Oracle ILOM リモートコンソールセッションが切断される可能性があります。セッションを再開しなければいけない可能性があります。

更新がすべてインストールされた時点で、Oracle System Assistant によって完了メッセージが表示されます。



注意 - データ破壊と機能損失: ファームウェア更新処理を中断しないでください。サーバーは自動的に数回リブートする可能性があります。処理が完了したことの確信が持てるまで、処理を中断しないでください。

参照 ■ [161 ページの「Accessing Oracle System Assistant」](#)

サーバーまたはブレードシャーシファームウェアの更新 (Oracle ILOM)

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) を使ってシステム BIOS、サービスプロセッサ (SP)、またはシャーシモニタリングモジュール (CMM) のファームウェアイメージを更新し

ます。このタスクを実行する方法については、[230 ページの「BIOS および SP ファームウェアまたは CMM ファームウェアを更新する \(Oracle ILOM\)」](#)を参照してください。

▼ BIOS および SP ファームウェアまたは CMM ファームウェアを更新する (Oracle ILOM)



始める前に

- My Oracle Support の Web サイト (<https://support.oracle.com>) から、システム用のファームウェアパックをダウンロードします。ファームウェアパックには、システム BIOS およびサービスプロセッサ (SP) 用またはシャーシモニタリングモジュール (CMM) 用の Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 更新 .pkg ファイルが含まれています。My Oracle Support からファームウェアパックをダウンロードする手順については、[232 ページの「MOS または PMR からのファームウェアおよびソフトウェアの取得」](#)を参照してください。

- 追加のファームウェア (SAS エクスパンダ、ホストバスアダプタ、コントローラなど) をロードする方法については、[222 ページの「システムソフトウェアおよびファームウェアの更新 \(Oracle System Assistant\)」](#)を参照してください。

この手順では、BIOS および SP パッケージまたは CMM パッケージをロードしますが、その他のファームウェア (SAS エクスパンダ、ホストバスアダプタ、コントローラなど) はロードしません。

あるいはブレードの場合、Oracle ILOM を使って完全なパッケージをロードすることもできます。ファームウェアリリース 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』の「ブレードシャーシコンポーネントのファームウェアイメージを更新する」を参照してください。

- Oracle ILOM にログインします。手順については、[44 ページの「Oracle ILOM へのアクセス」](#)を参照してください。
- Oracle ILOM で Admin (a) 役割特権を持っていることを確認します。

次の手順では、サービスプロセッサ (SP) とシャーシモニタリングモジュール (CMM) の両方に対する Web インタフェース手順とコマンド行インタフェース (CLI) 手順を示します。

注記 - ファームウェア更新処理の完了には、数分かかります。この期間中、ターゲットのサーバー SP または CMM で処理を一切実行しないでください。

- 単一システム SP または CMM のファームウェアを更新するには、望ましい Oracle ILOM ユーザーインターフェイスで次の手順を実行します。

インタフェース	手順	詳細
Web	<ol style="list-style-type: none"> 「ILOM Administration」>「Maintenance」>「Firmware Upgrade」をクリックします。 「Firmware Upgrade」ページで適切なフィールドを設定したあと、「Start」をクリックします。 ファームウェアの処理が完了すると、システムがリブートして新しいファームウェアイメージが適用されます。 	Oracle ILOM 3.2.1 以降を含むシステムの場合、「Firmware Upgrade」ページで「More details」リンクをクリックします。
CLI	<ol style="list-style-type: none"> サーバー SP または CMM のファームウェアを更新するには、次を入力します。 <code>load -source/[protocol]://[username]:[password@server_ip]/[path_to_image]/[.pkg]</code> ここで、<i>protocol</i> は http, https, ftp, tftp, sftp, scp のいずれかになります。 Y を入力してイメージをロードしてから、Y と入力して適用可能なファームウェア更新オプションを有効にします。 ファームウェアの処理が完了すると、システムがリブートして新しいファームウェアイメージが適用されます。 	次のように入力します。 ■ help load ■ show /System/ Firmware

- 参照**
- ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、「サーバー SP または CMM ファームウェアイメージを更新する」。
 - ファームウェアバージョン 3.1 または 3.2 の『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、「ブレードシャーシコンポーネントのファームウェアイメージを更新する」。

SP および BIOS ファームウェア、および HBA ファームウェアの更新 (Oracle HMP)

Oracle HMP の `fwupdate` コマンドを使えば、サービスプロセッサと BIOS のファームウェア、およびシステム HBA のファームウェアを更新できます。

これはすべての Oracle HMP コマンドと同じく、オペレーティングシステムのコマンド行から実行できます。

Oracle HMP はファームウェアの更新をダウンロードしません。それらはユーザーが My Oracle Support からダウンロードする必要があります。詳細については、[232 ページの「MOS または PMR からのファームウェアおよびソフトウェアの取得」](#)を参照してください。

MOS または PMR からのファームウェアおよびソフトウェアの取得

Oracle System Assistant を使用して、最新のソフトウェアリリースを簡単にダウンロードして使用できます。詳細については、[222 ページの「システムソフトウェアおよびファームウェアの更新 \(Oracle System Assistant\)」](#)を参照してください。

ただし、My Oracle Support (MOS) を使用するか物理メディアのリクエスト (PMR) を Oracle に対して発行することによって、更新されたファームウェアやソフトウェアを取得することもできます。詳細については、次を参照してください。

- [232 ページの「My Oracle Support を使用してファームウェアとソフトウェアをダウンロードする」](#)
- [233 ページの「物理メディアのリクエスト」](#)

▼ My Oracle Support を使用してファームウェアとソフトウェアをダウンロードする

1. My Oracle Support の Web サイトにアクセスします。
<http://support.oracle.com>。
2. My Oracle Support にサインインします。
3. ページの上部にある「パッチと更新版」タブをクリックします。
画面右に「パッチ検索」ペインが表示されます。
4. 「検索」タブ領域内で、「製品またはファミリー (拡張)」をクリックします。
検索フィールドを含む「検索」タブ領域が表示されます。
5. 「製品」フィールドで、ドロップダウンリストから製品を選択します。
あるいは、製品名 (たとえば、Sun Server X4-2) の全体または一部を、一致するものが表示されるまで入力します。

6. 「Release」フィールドのドロップダウンリストからソフトウェアリリースを選択します。
使用可能なすべてのソフトウェアリリースを表示するには、リストを展開します。
7. 「Search」をクリックします。
「パッチの詳細検索結果」画面が表示され、ソフトウェアリリースのパッチが一覧表示されます。
入手可能なソフトウェアリリースの説明については、サーバーのプロダクトノートを参照してください。
8. ソフトウェアリリースのパッチを選択するには、ソフトウェアリリースバージョンの横のパッチ番号をクリックします。
Shift キーを使用すると複数のパッチを選択できます。
ダイアログボックスが表示されます。パネルには、「README」、「ダウンロード」、「計画に追加」オプションを含め、いくつかのアクションオプションがあります。「計画に追加」オプションの詳細は、関連するボタンをクリックして、「なぜ計画を使用するのですか。」を選択してください。
9. このパッチの ReadMe ファイルを確認するには、「README」をクリックします。
10. ソフトウェアリリースのパッチをダウンロードするには、「ダウンロード」をクリックします。
11. 「ファイル・ダウンロード」ダイアログボックスで、パッチの zip ファイル名をクリックします。
ソフトウェアリリースのパッチがダウンロードされます。

物理メディアのリクエスト

手続き上、Oracle Web サイトからダウンロードできない場合は、物理メディアのリクエスト (PMR) を Oracle に対して発行することで最新のソフトウェアリリースパッケージを入手できます。PMR を発行するための推奨の方法は、My Oracle Support (MOS) の Web サイトを使用することです。

これらのセクションでは、物理メディアのリクエストを発行する際のハイレベルタスクについて説明します。

- [234 ページの「物理メディアのリクエスト用の情報を収集する」](#)
- [234 ページの「物理メディアのリクエスト \(オンライン\)」](#)
- [236 ページの「物理メディアのリクエスト \(電話\)」](#)

物理メディアのリクエスト用の情報を収集する

物理メディアのリクエスト (PMR) を行うには、サーバーの保証またはサポート契約が必要です。

PMR を実行する前に、次を行なってください。

- 製品名、ソフトウェアリリースのバージョン、および必須パッチを入手します。最新版のソフトウェアリリースおよびリクエストしているソフトウェアリリースのパッチの名前を知っていると、リクエストを実行しやすくなります。
 - *My Oracle Support* にアクセスできる場合 - 232 ページの「[My Oracle Support を使用してファームウェアとソフトウェアをダウンロードする](#)」の手順に従って、最新のソフトウェアリリースバージョンを確認し、入手可能なソフトウェアリリースパッケージ (パッチ) を表示します。パッチのリストを表示したあと、ダウンロード手順を続行しない場合は「パッチの詳細検索結果」画面からほかのページに移動できます。
 - *My Oracle Support* にアクセスできない場合 - サーバーのプロダクトノートの情報に基づいて必要なソフトウェアリリースのパッチを決定したあと、最新版のソフトウェアリリースでそれらのパッチをリクエストします。
- 出荷情報を手元に用意します。リクエストの際に、連絡先の名前、電話番号、電子メールアドレス、会社名、および出荷先住所を入力する必要があります。

▼ 物理メディアのリクエスト (オンライン)

始める前に リクエストを行う前に、[234 ページの「物理メディアのリクエスト用の情報を収集する」](#)に記載されている情報を収集します。

1. My Oracle Support の Web サイト (<http://support.oracle.com>) にアクセスします。
2. My Oracle Support にサインインします。
3. ページの右上隅にある「問合せ先」リンクをクリックします。
「サービス・リクエストの作成: 問題」画面が表示されます。
4. リクエストを次のように記述します。
 - a. 「問題のサマリー」フィールドに `PMR for latest software release` と入力します。
 - b. 「問題タイプ」ドロップダウンリストからソフトウェアと OS メディアリクエストに関する項目を選択します。

- c. 「サポート ID」フィールドに、サポート契約に関連付けられたカスタマサポート ID を入力します。
5. 「サービス・リクエストの作成: ソリューション」画面をスキップするため、画面右上隅の「次へ」ボタンを 2 回クリックします。
「サービス・リクエストの作成: 詳細」画面が表示されます。
6. 次のように、リクエストに関する追加情報を提供します。
- a. 「追加情報」セクションで、次の表に記載した質問に答えます。

質問	回答
物理ソフトウェアメディアの送付リクエストですか？	はい
どの製品ラインに関するメディアのリクエストですか？	Sun 製品
パッチのダウンロードに必要なパスワードの確認ですか？	いいえ
CD/DVD でのパッチのリクエストですか？	はい
パッチを CD や DVD でご希望の場合、パッチの番号、オペレーティングシステムとプラットフォームをお知らせください。	希望するソフトウェアリリースのダウンロードごとに、パッチ番号を入力してください。
物理メディア送付を要望されている製品の名前とバージョンをリストしてください。	製品名: Sun Server X4-x バージョン: 最新のソフトウェアリリース番号
リクエストするメディアの OS/プラットフォームは何ですか？	オペレーティングシステム固有のダウンロードを要求する場合は、ここでオペレーティングシステムを指定します。システムファームウェアのみをリクエストする場合は、「一般」と入力します。
この送付に言語は必要ですか？	いいえ

- b. 送付先/連絡先情報 (連絡先の名前、電話番号、電子メールアドレス、会社名、送付先住所など) を入力します。
7. 「次へ」ボタンをクリックします。
「サービス・リクエストの作成: 重大度/連絡先」画面が表示されます。
8. 連絡先電話番号と望ましい連絡手段を入力します。

9. 「発行」ボタンをクリックします。

これで、物理メディアのリクエストが完了します。物理メディアを受け取るまで、最大 7 営業日かかる可能性があります。

▼ 物理メディアのリクエスト (電話)

始める前に リクエストを行う前に、234 ページの「物理メディアのリクエスト用の情報を収集する」に記載されている情報を収集します。

1. 次の Oracle Global Customer Support Contacts Directory にある該当する番号を使用して、Oracle サポートに電話をかけます。

<http://www.oracle.com/us/support/contact-068555.html>

2. Sun Server X4-x の物理メディアのリクエスト (PMR) を行いたい旨を Oracle サポートに伝えます。

- My Oracle Support から特定のソフトウェアリリースパッケージおよびパッチ番号の情報が得られる場合は、この情報をサポート担当者に伝えます。
- ソフトウェアリリースパッケージの情報が見つからない場合は、Sun Server X4-x の最新のソフトウェアリリースをリクエストします。

索引

あ

アクセス

- BIOS 設定ユーティリティー, 56
- Oracle HMP, 55
- Oracle ILOM, 44
- Oracle System Assistant, 39, 161

イベントログ

- 表示, 142

インストール

- Oracle System Assistant を使用したオペレーティングシステムのインストール, 132

サーバー

- タスクの概要, 15

オペレーティングシステム

- Oracle System Assistant を使用したインストール, 132

か

仮想ドライブ

- iSCSI, 73

管理ツール

- Oracle Hardware Management Pack, 34
- Oracle ILOM, 28
- Oracle System Assistant, 26
- Oracle ILOM Web インタフェースからの Oracle System Assistant の起動, 41, 164
- 使用するツールの計画, 21
- 単一システム, 22
- 複数システム, 21

クロックプロパティ

- SP, 106

構成

- MOS, 184
- SP の DNS, 109

さ

サーバー管理ソフトウェア, 21

システムインベントリ

- Oracle System Assistant での表示, 137

システム管理

- タスク, 16

ツール

- 概要, 15

システム識別子

- 割り当て, 92

システム識別情報

- 割り当て, 92

システム情報

- 表示, 137

システム全体の電源管理設定

- set, 117

システムの場所

- 割り当て, 92

システムの連絡先

- 割り当て, 92

シャーシモニタリングモジュール (CMM), 44

診断テスト

- BIOS POST, 145
- Oracle ILOM, 145
- Pc-Check, 145
- Sun VTS, 145
- U-boot, 145
- UEFI diag, 145
- ブート前メニュー, 145

スタンバイ電源, 59

ストレージ

- Oracle System Assistant メディアの整合性のチェック, 197

設定

- SP のクロックプロパティ, 106
- SP 冷却ポリシー, 127

- システム全体の電源管理設定, 117
 - 電源装置軽負荷効率性ポリシー (CMM), 123
 - 電源装置冗長性ポリシー (CMM), 122
 - 電源装置ファン速度ポリシー (CMM), 125
 - 電力上限, 119
 - 電力制限目標, 118
 - ブート時ホスト電源の SP ポリシー, 126
 - ブレードスロット許可制限プロパティ (CMM), 121
 - ソフトウェア
 - Oracle System Assistant イメージの復元, 198
 - Oracle System Assistant の更新のダウンロード, 223, 225
- た**
- 次のブートデバイス, 65
 - 電源
 - スタンバイ, 59
 - フル, 59
 - ボタン, 60
 - 電源状態, 59
 - 電源装置軽負荷効率性ポリシー (CMM)
 - 設定, 123
 - 電源装置冗長性ポリシー (CMM)
 - 設定, 122
 - 電源装置ファン速度ポリシー (CMM)
 - 設定, 125
 - 電源投入時自己診断 (POST), 205
 - 電力上限
 - 設定, 119
 - 電力制限目標
 - 設定, 118
 - ドキュメント
 - Oracle System Assistant から表示, 171
 - トラブルシューティング
 - Oracle System Assistant の問題, 193
 - Oracle System Assistant メディアの整合性のチェック, 197
- な**
- ネットワーク
 - Oracle System Assistant での構成, 181
 - ネットワーク設定
 - SP, 99
- は**
- バックアップ
 - BIOS 設定, 147
 - ファームウェア構成, 147
 - 表示
 - イベントログ, 142
 - ファームウェア
 - Oracle System Assistant からの更新, 227
 - Oracle System Assistant の更新のダウンロード, 223, 225
 - ファームウェア構成
 - バックアップと復元, 147
 - ファイルの参照
 - Oracle System Assistant, 171
 - ブート時ホスト電源の SP ポリシー
 - 設定, 126
 - ブート順序
 - 変更, 63
 - ブート前メニュー, 145
 - 復元
 - BIOS 設定, 147
 - Oracle System Assistant メディアイメージ, 198
 - ファームウェア構成, 147
 - フル
 - 電源, 59
 - ブレードスロット許可制限プロパティ (CMM)
 - 設定, 121
 - ブレードを強制的に SAS23 対応にする, 128
 - ホスト名
 - 割り当て, 92
- ま**
- マウント
 - Oracle System Assistant フラッシュドライブ
 - Linux ホスト上, 177
 - Oracle VM ホスト上, 175
 - Solaris 10 ホスト上, 174
 - 未解決の問題
 - 表示して解決, 141
 - モニタリング, 143
 - メディア、Oracle System Assistant 整合性のチェック, 197

や

- 有効化
 - Oracle System Assistant, 193
- ユーザーアカウント
 - Oracle ILOM, 102

わ

- 割り当て
 - システム識別子, 92
 - システム識別情報, 92
 - システムの場所, 92
 - システムの連絡先 (名前), 92
 - ホスト名, 92

B

- BIOS
 - iSCSI 構成, 80
 - Legacy か UEFI かの BIOS モードの選択, 216
 - Oracle System Assistant からの更新, 227
 - Oracle System Assistant の有効化または無効化, 189
 - 終了, 208
 - 設定ユーティリティのファンクションキーと Control キー, 211
 - 設定ユーティリティへのアクセス, 206
 - 設定ユーティリティメニューの概要, 205
- BIOS POST, 145
- BIOS 設定
 - バックアップと復元, 147
- BIOS 設定ユーティリティ 参照 BIOS
 - アクセス, 56

C

- CIS (Customer Support Identifier), 184
- CLI
 - Oracle Hardware Management Pack のツール, 34

H

- Hardware Management Pack, 34

I

- iSCSI
 - BIOS での仮想ドライブ構成, 80
 - 仮想ドライブプロパティ, 73

L

- Late Synchronization
 - UEFI, 212
- Legacy BIOS, 205, 216
- Linux
 - Oracle System Assistant を使用したインストール, 132
 - フラッシュドライブのマウント, 177

M

- My Oracle Support (MOS)
 - 構成, 184

O

- Oracle Enterprise Manager Ops Center
 - 概要, 21
- Oracle Hardware Management Pack
 - 概要, 34
- Oracle HMP
 - アクセス, 55
- Oracle ILOM, 145
 - Oracle System Assistant からの更新, 227
 - Web インタフェースからの Oracle System Assistant の起動, 41, 164
 - アクセス, 44
 - 概要, 28
 - ユーザーアカウント, 102
- Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM)
 - 参照 Oracle ILOM
- Oracle Linux
 - Oracle System Assistant を使用したインストール, 132
- Oracle System Assistant
 - BIOS からの有効化または無効化, 189
 - F9 ファンクションキー, 40, 162
 - Oracle ILOM Web インタフェースからの起動, 41, 164
 - RAID の構成, 68

- アクセス, 39, 161
 - インストールの検証, 194
 - オペレーティングシステムのインストール, 132
 - 概要, 26
 - キーボード言語の設定, 190
 - 起動, 40, 162
 - 更新のダウンロード, 223, 225
 - 壊れたイメージまたは消去されたイメージの復元, 198
 - シェルへのアクセス, 172
 - システムインベントリの表示, 137
 - システム情報の表示, 137
 - 製品ドキュメントの表示, 171
 - トラブルシューティング, 193
 - ネットワークインタフェース設定の構成, 181
 - ファームウェアの更新, 227
 - ファイルの参照, 171
 - フラッシュドライブのファイルにアクセス, 171
 - フラッシュドライブのマウント
 - Linux ホスト上, 177
 - Oracle VM ホスト上, 175
 - Solaris 10 ホスト上, 174
 - 無効にする, 187
 - メディアの整合性のチェック, 197
 - 有効化, 193
 - リリースノートの表示, 169
 - Oracle VM
 - Oracle System Assistant を使用したインストール, 132
 - Oracle Solaris オペレーティングシステム
 - Oracle System Assistant を使用したインストール, 132
 - フラッシュドライブのマウント, 174
 - Oracle System Assistant のキーボード言語設定, 190
 - Oracle System Assistant のシェルへのアクセス, 172
 - Oracle System Assistant のリリースノート, 169
 - Oracle System Assistant 用の F9 ファンクションキー, 40, 162
 - Oracle System Assistant を無効にする, 187
 - Oracle VM ホスト
 - フラッシュドライブのマウント, 175
- P**
- Pc-Check, 145
 - POST
 - 電源投入時自己診断, 205
 - POST エラーメッセージ
 - 表示して解決, 144
- R**
- RAID
 - Oracle System Assistant からの構成, 68
 - 構成, 67
- S**
- SAS2, 128
 - Solaris オペレーティングシステム
 - Oracle System Assistant を使用したインストール, 132
 - SP
 - DNS, 109, 111
 - クロックプロパティ, 106
 - ネットワークアドレス, 101
 - ネットワーク設定, 96, 99
 - SP 冷却ポリシー
 - 設定, 127
- U**
- U-Boot, 145
 - UEFI
 - Late Synchronization, 212
 - UEFI BIOS, 205, 216
 - UEFI diag, 145
- W**
- Windows
 - Oracle System Assistant を使用したインストール, 132